明治三十七年十二月九日第三種郵便物認可
（毎月一回一日発行）

女子文壇

四年第九號



明治四十一年
六月
一日發行



六月一日より
中形浴衣地
新柄陳列會
尚豫て懸賞を以て募集
致候中形圖案の内優等
の分を浴衣地に染上げ
陳列仕り候
流行の夏物及び雜貨類共一切取
揃へ陳列致置候間御遊覧被成下
候樣伏して奉願上候
三越呉服店

女子文壇第四年

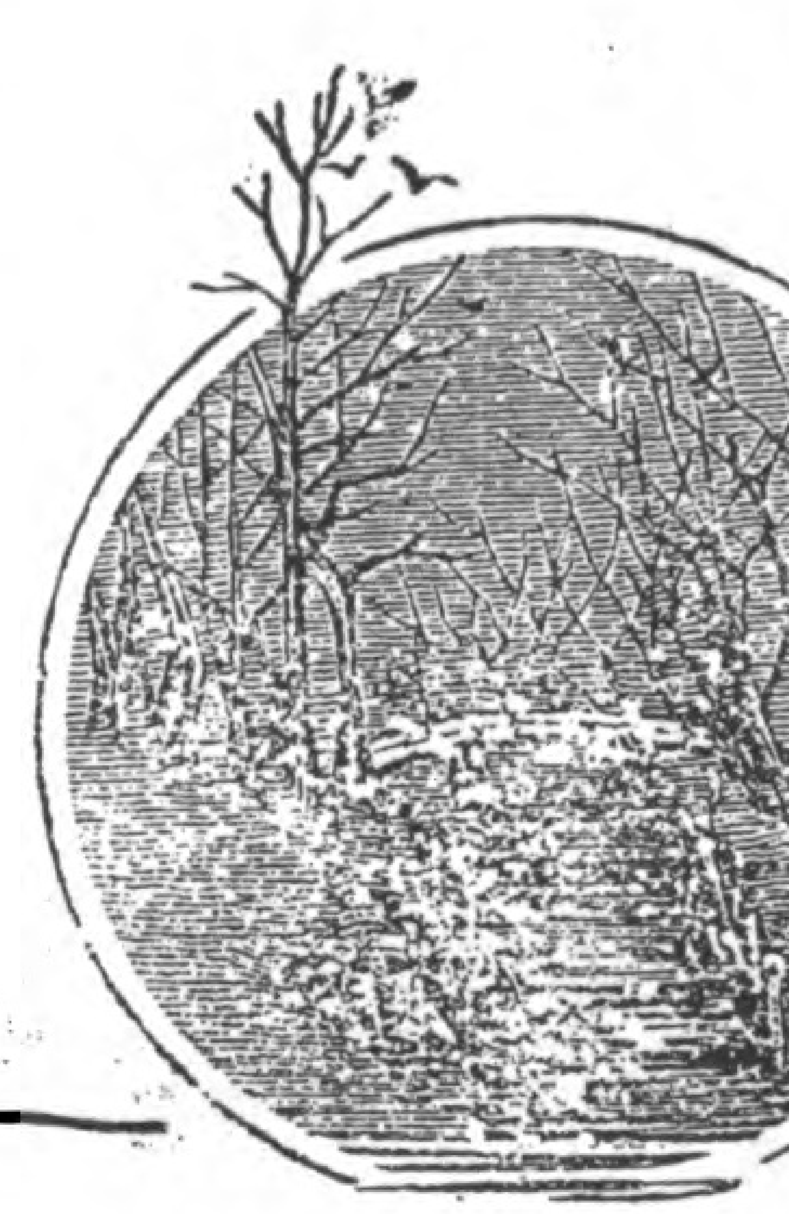
六月一日發行

每號 皇太子妃殿下御尊覽の榮を賜ふ

(甲の二)

本欄

▲口繪▼





第九號目次

涼風



大江原色版部製版

女子文壇の廣告により御申込の節は其旨御書添をこふ

出來材料

御望次第に調製承

○刺繡用器具 幷に材料

○袋物器具 幷に材料

○摘ミ細工 壜細工材料

刺繡、摘ミ細工、日本畫用トシテ特製セシ白無地絹張團扇

切取線

此切取線を添へ御申越しの方へは美術技藝の栞並に定價表無代進呈す（女子文壇）

東京市本郷區弓町貳丁目

倉持商店

二大博士發明

神經衰弱貧血頭痛

依卜昆的里（ヒステリー）陰痿等通俗的症候解說療法攝生法根治藥詳說の雜誌をハガキで申込次第無代進呈す

肺病救濟

アドロフ博士新發見肺結核治療藥は醫界新紀元也我國に傳へ公私病院長廿七名の醫家實驗全治報告根治の不思議の效果を確認せる療法詳說の雜誌を救濟の爲め無代進呈ハガキで申込め

東京京橋越前堀

樂天堂藥房

洋畫講義錄

執筆畫伯

三宅克己先生
岡田三郎助先生
大下藤次郎先生
中澤弘光先生
外大家十數名

洋畫講義錄は水彩畫を始め其他油繪木炭畫ペン畫鉛筆畫肖像畫等すべて一切の洋畫に關する事を詳細に講述す毎號美麗なる挿畫數多あり、毎月一回發行、一年卒業、會費月卅六錢、詳細規則無料進呈

繪畫講習錄

執筆畫伯

川端玉章先生
荒木寛畝先生
寺崎廣業先生
梶田半古先生
外大家十數名

繪畫講習錄は日本畫の技術と之に關する各種の學科とを平易懇切に教授し如何なる初學者と雖も忽ちにして上達せしむ毎號美麗なる繪畫數葉を挿入す、毎月二回發行一年卒業會費月卅六錢、詳細規則無料進呈

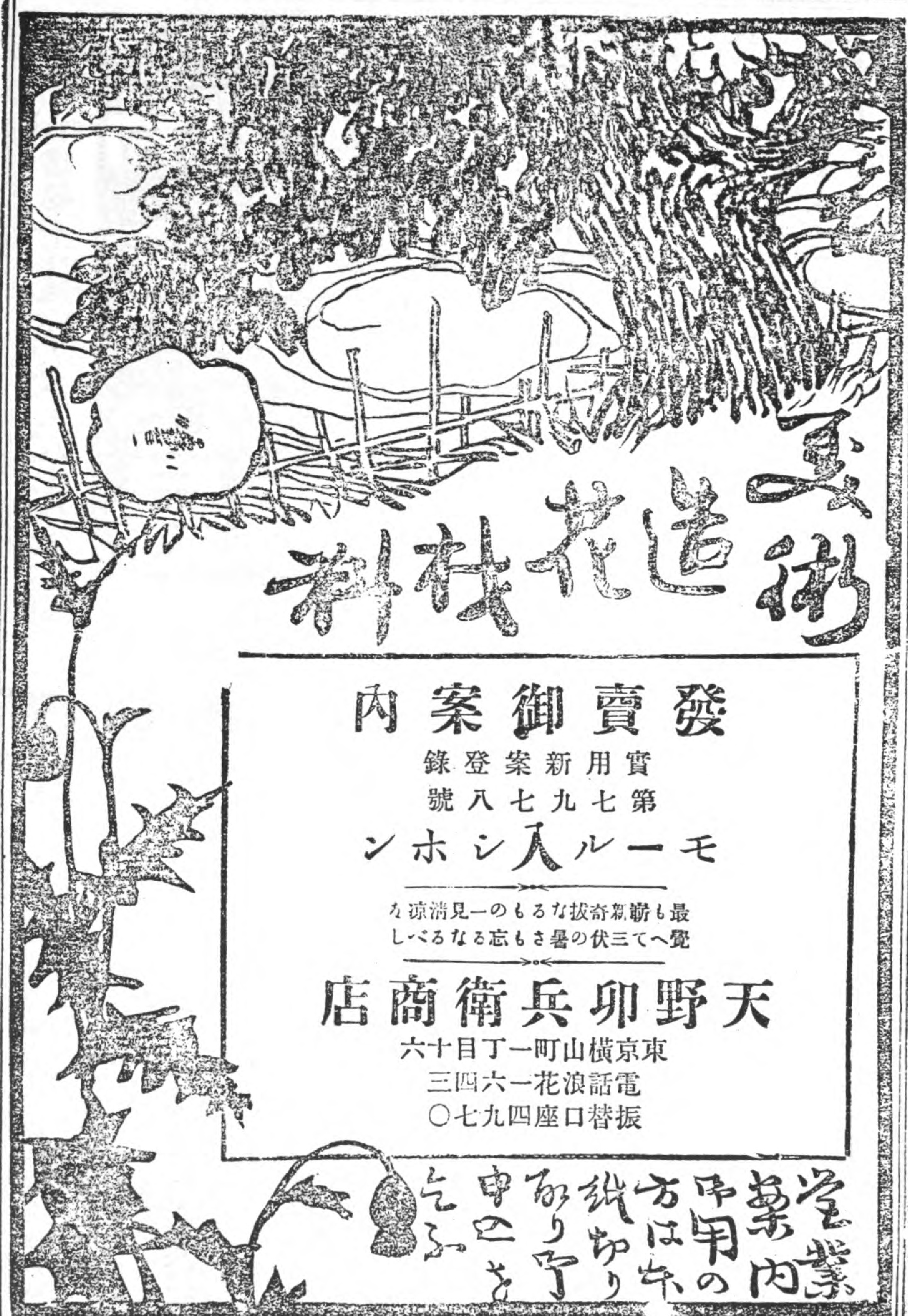
新學期開始！

東京市麻布飯倉四丁目

大日本繪畫講習會

女子文壇の廣告により御申込の節は其旨御書添を乞ふ

女子文壇の廣告より御申込の節は其旨御書添を乞ふ



産科婦人科専門醫學士北畠孝夫先生閲

最近

婦人病心得

子宮病自宅療法

女の一番つらい病は。子宮の諸病であるが。此病にかかりし婦人は。大抵之れを秘して、適當の手當をなさず。亦妙齢の頃などに。月經の閉止とか。不順等あれば、獨り心を痛めて。素人的の通經劑などを試み、遂には恐ろしき難病となつて、生涯の苦みを遺すことのあるのは。洵に痛歎の極である◉著者は多年の實驗と。最近の學説を基礎とし。(婦人病者の心得)と題し左の各項に分ちて丁寧親切に詳説せり◉病める婦人は勿論一般の婦女は。本書を一讀して、自宅の療法を會得せよ。當分の内無代進呈す送料貳錢封入至急申込まれよ

目次

婦人病の總論◉子宮病血の道(ヒステリー)の原因病理及び自宅療法◉神經衰弱、貧血、萎黄病とは如何及其療法◉しらちながちの病理及其根治法◉月經時の手當月經諸病の療法◉姙娠の原理、受胎すべき場合、姙婦の攝生、つわりの養生法

發行所 東京築地新榮町四ノ一 笹岡省三 (電話新橋三千六百一)

●耳だれ
●つんぼ
●耳なり

◉内耳炎◉中耳炎◉外耳炎◉鼓膜炎◉其他聽力の鈍き耳疾根本的必治療法あり郵券二錢封入御申込あれば病理記述の説明書無代進呈す
◉東京市小石川區柳町二六

東洋堂藥店 (電話番町一四三七)

代々家傳の妙藥

經通丸

月やく藥

調劑元

東京市丸の内

本劑は代々家傳の妙藥にて如何なる難澁の月經滯りも胃腸子宮等を痛めず安々と通じ輕症なるは其夜にあること請合也他藥を用ひて効能なき時は本劑を服用し以て其價値を認めよ定價廿五錢五十錢一圓特製二圓但小包送を望まるゝ方は八錢を要す

有樂町二ノ三

江戸屋

◉色白くなる秘法◉

いか程色黒き御方にても色白くなる奇法を郵劵二錢封入申込の方に御知らせ申上升

小石川柳町 森義郎



(乙の六)

女子文壇の廣告により御申込の節は其旨御書添を乞ふ

青少年筆戰之活舞臺

秀才文壇

三十四年創刊

毎月二日十五日二回發行
外に四月十月定期增刊

口繪
天然色寫眞
風景寫眞
數葉入

贈賞確實

毎號青年懸賞文募集

● 名流文藝……
○ 美文
● 評論文
○ 新口語詩……小川未明選
● 寫生文……高濱虛子選
○ 短篇小說……德田秋聲選
● 新體詩……馬場孤蝶選
○ 十行日記
● 評釋文
○ 五行文……矢部白雨選
● 和歌……尾上柴舟 佐々木信綱選
○ 俳句……虛子選
● 漢詩……虛舟選
○ スケッチ……服部愿夫選

正價

一冊郵稅共 金十一錢
六冊(三ヶ月分增刊除ク)仝 金六十三錢
十三冊(半ヶ年分增刊共)仝 金一圓四十錢
廿六冊(一ヶ年分定期增刊二回共)仝 金二圓五十五錢
增刊一冊二十錢宛

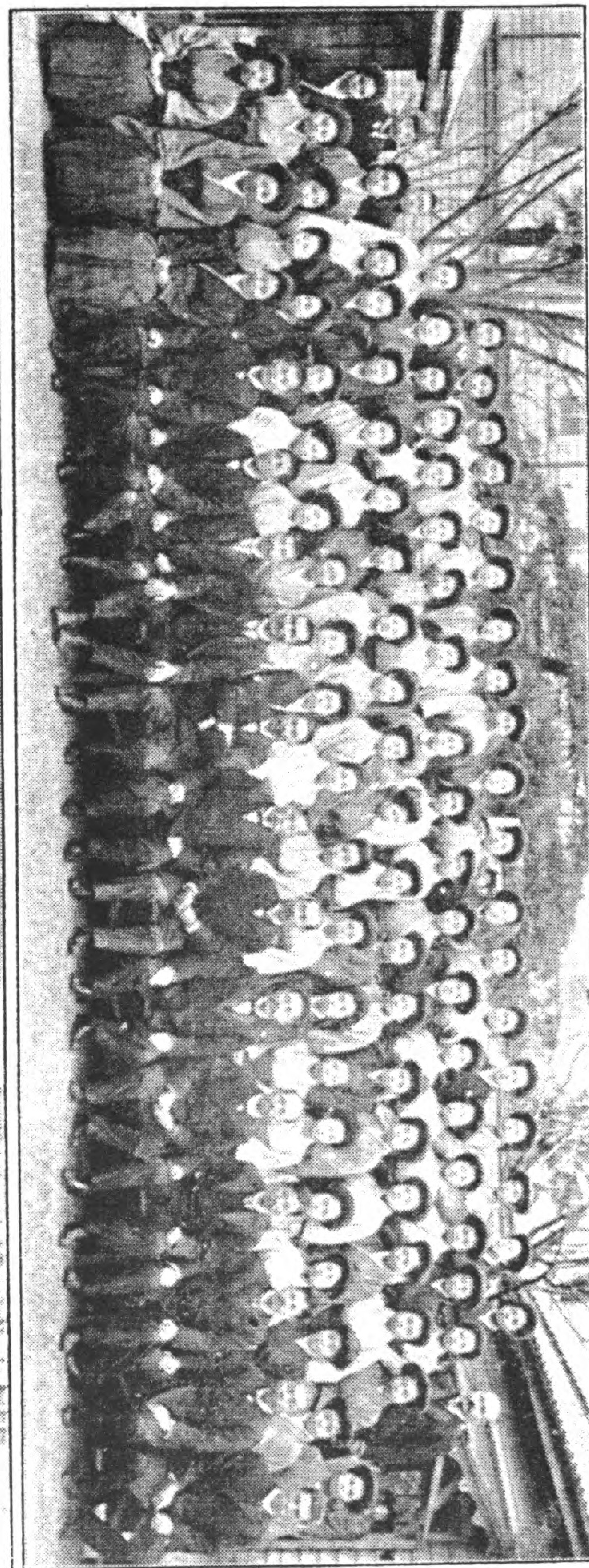
◁紙數百三十頁▷

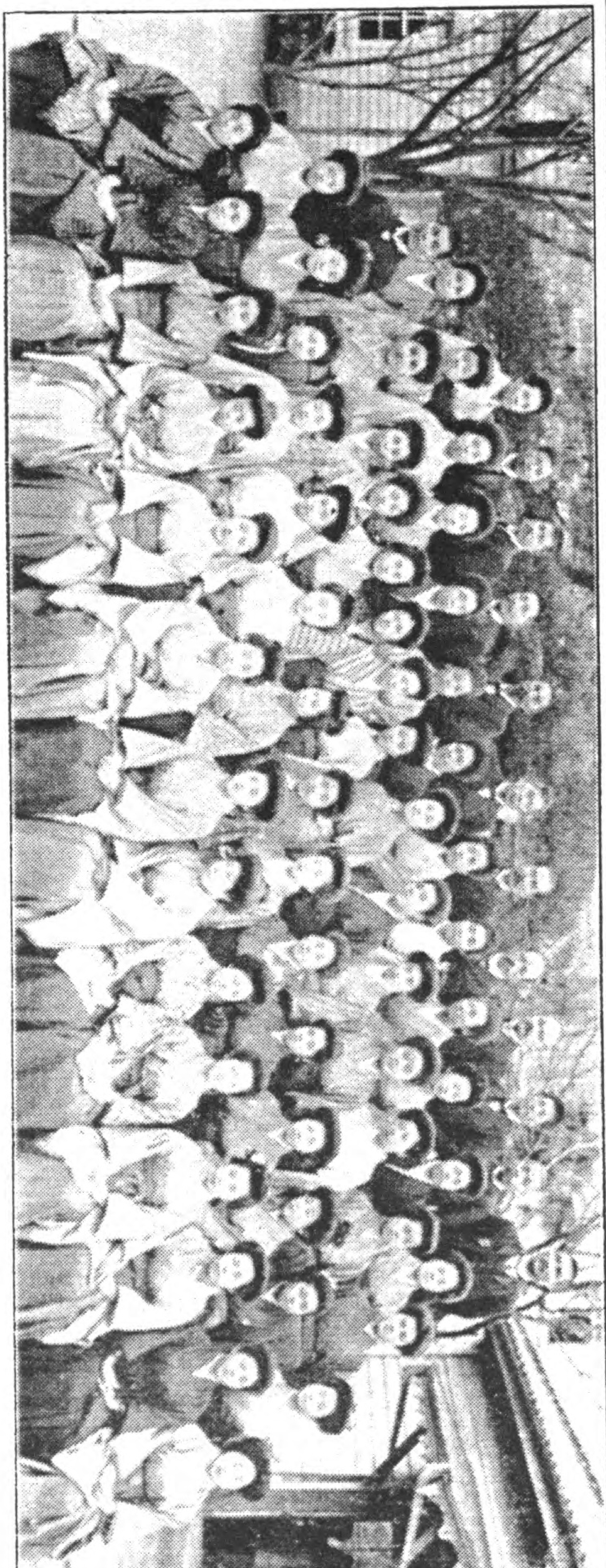
發兌元 東京神田區旅籠町一丁目 文光堂 (振替口座壹九五五番)

賣捌 東京堂 北隆館 東海堂 良明堂 上田屋 外書店


フランス製
ケーバ香水
全世界を通じて
最新流行品
本品は現今貴婦人
紳士方の愛用品
「フランス」上流社會は
ケーバ香水の高尚なる
匂を愛せらる
定價 大瓶 金壹圓
小瓶 金廿五錢
化粧品直輸出入商
東京日本橋區橘町二丁目
竹問商店
長電話浪花一六一四番

東京市各女學校本年の卒業生（十三）

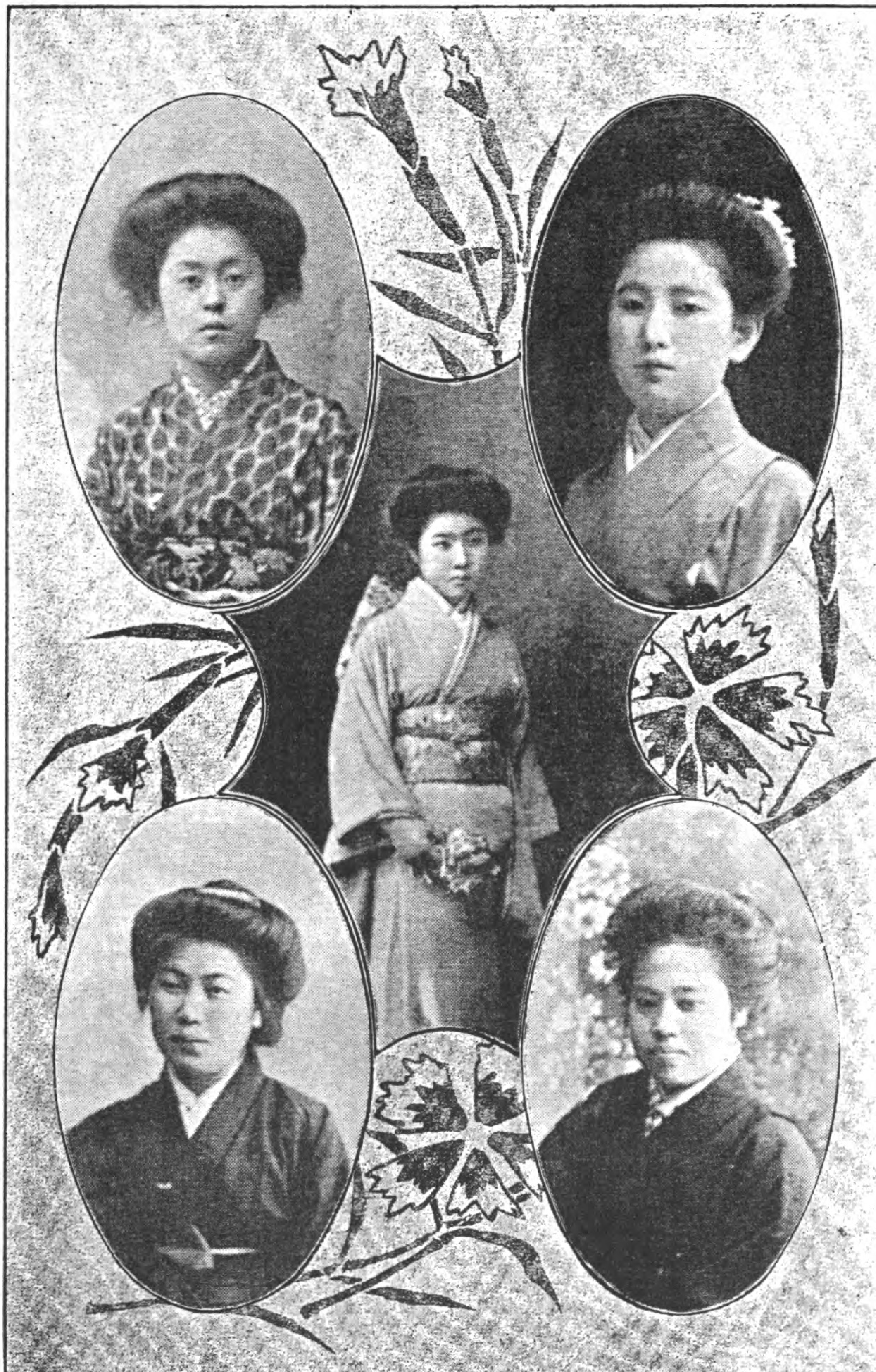




（上圖）女子師範學校卒業生
（下圖）府立第二高等女學校卒業生

各女學校本年の優等卒業生

跡見女學校　鈴木つる子　　跡見女學校　平田ゆか子



跡見女學校　太田とよ子

姫路日の本女學校英文科　高見さとる子　　姫路日の本女學校英文科　中路ちか子

女子文壇の廣告により御申込の節は其旨御書添を乞ふ



世界唯一 痲病消渇の根治新藥

痲滅は最も進步したる最新の痲病消渇即治模範藥なり、本劑はありふれたる普通の賣藥と異なり殺菌學上効力頗る峻烈なる一新藥を主劑とし是を內服して痲病消渇の病原たる「ゴノコッケン」を忽ち滅殺する處方に基き製劑せし新藥に付輕症は壹劑重症は特別製分にて必ず誓て根底より根治することを確證す但し彼の薔式洗滌劑の如き迂遠無効有害の姑息藥と異なり奏効確實峻烈なるだけそれだけ藥價不廉なり用藥者豫め之を諒せよ

りんめつ 痲滅

藥價 壹劑壹圓拾錢 特別製貳圓拾錢 郵券代用貳割增しの事

專賣元 東京神田區五軒町拾九番地 日新館藥房

色白特効 ペーアス石鹼

壹個代價送料共八拾五錢▲三個兩入同上貳圓參拾錢

此石鹼は世界第一等の良品にして化粧品の大王たることは苟も泰西の事情に通ずる者の熟知する所なれば今更喋々贅辯を要せず啻だ單に其主皮膚を潤澤軟密にし色を白くし眼たる特効の一二を掲げん、粗糙質を治するは此石鹼特有の神効なり且つ此石鹼は香氣頗る佳良にして使用後五時間は芳香馥郁として身體に附着し薰るは館主の實驗保證する所なり、乞ふ昨今世上に續々顯出し誇大の廣告を以て世人を瞞着する內國製の粗惡品と玉石混同視すること勿れ（昨年輸入の五萬個は夙に賣切れ久しく品切中の處今回拾萬個荷着せり速に御注文を望む）

輸入一手專賣元 東京神田區五軒町拾九番地 日新館藥房

癩病根治新劑

癩病は不治の病にあらず又血統病にあらず一種の癩病桿狀菌の媒介による傳染症たること近時に發見せり、本劑は此不撓不抜の最新發見 辛苦經營の末今回始て完成發明したる最新藥にして實驗に徵し其効力の峻烈比にあらず、患者よ顯著 彼の十九世紀的遺物たる推量的不合理に調製せし粗雜極まる無効藥に謬らるゝことなく又古來より傳へられたる血統病或は不治症等の愚說に迷ふことなく速に病根を斷絶し生涯永久の榮華を完ふせよ、本劑を試み其病菌を撲滅して輕症は壹劑重症は特別製分以上にて治癒の目的を達す、藥價送料共壹劑五圓拾錢特別製分拾圓拾錢着金即刻小包密封送る

梅毒根治新劑

本劑（藥名ドクトル）は幾多の研究實驗を重ね多年辛苦經營の結果成功したる最新最良の藥物なれば現世紀に於る唯一のばい毒根治特効新藥なり…に黴毒及黴毒に關聯して續發する諸症（即ちばいどく。ひゑ。かさ。しつ毒。かんそう。よこね。ようばいそう。たいどく。瘡毒。ろいれき。骨がらみ。べんどく。ふしぶしのいたみ等）ならば如何なる頑固難症にても特別製分にて誓って根治することを確證す從來醫療賣藥等百方手を盡すも全治の効なくして困難せる患者は速に本劑を試服し其病毒を根底より驅逐斷絶し天賦の生命健康を保全せよ。藥價壹劑分壹圓拾錢貳劑分壹圓九拾錢特別製分參圓六拾錢着金次第速に送藥す郵便切手代用貳割増しの事

●以上二藥 專賣元 東京神田區五軒町拾九番地 日新館藥房

眞正極秘 粹珍書案內

望の人郵券四錢送れ直に送呈すべし披閲忽ち愉絶快絶眞に粹士必讀の珍書案內

申込所 東京市下谷區西黑門町廿番地 東雲堂書店

女子文壇の廣告により御申込の節は其旨御書添を乞ふ

《通信教授》

賛 東京帝國大學講師 アーサーロイド　東京通信學院長 松島剛
助 立教學院總理 ウイリアム タッカー　東京高等商業學校教授 高島捨太
員 萬朝報英文記者 山縣五十雄　學習院教授 山口造酒
講 萬朝報英文記者 斯波貞吉　バチエローオブアーツ 阿部啓吉
師 東京外國語學校教授 片山寛　開成英語學校長 星野久成

新式 獨習英語講義錄

初等科　中等科　高等科

英語を知らざるものは時勢遅れなり、今の世に英語を知らざるは猶昔時いろはを知らざるが如し其不便不利益計り知るべからず、世間英語教授書夥しきも悉く變則にして實用に適せず或は學科の組織不完全にして毫も學力の進歩を期し難し、本會此時勢の缺陷を補はんが爲に秩序ある組織の下に通學すると同等の効果ある最新教授法に依り**完全なる英語を教授す**機會は再び來らず躊躇する勿れ

見本 希望者には各科第一號を送る但實費として一冊に付き十錢宛を要す是れ本講義錄が他の雜駁なる講義錄に比して如何なる價値を有するかを最も正直に説明する者なり

▲第五學期 會員募集▼

各學科講義錄毎月二回配布練習雜誌月一回無代進呈
六ヶ月卒業
第五期六月一日發行毎號
各學科**第五號**新式講習日課附

會費 全科五圓一學科全期一圓七十錢毎月分納一冊廿錢入會金廿錢往復端書にて申込次第送呈

會則 本會講師講義錄の特色明瞭

第四期講習完結取揃送付の便りあり

英語獨習者の（新福音）

好機勿逸

入會金全免證
（女子文壇讀者證）

東京市麹町區富士見町六ノ十
大日本國民英語學會
（振替貯金口座三〇八五番）

空前の歡迎
（理想的初等英語雜誌）

初等英語研究

六月一日發行（毎月一回一日）**第六號** 定價五錢郵税五厘 一ヶ年分六十三錢

（初號より以下數版を重ねて缺本なし）

（中學一二三年程度で毎號綺麗な挿繪十數個入、毎月各種の懸賞課題あり）

ヰリアム ユーアト グラッドストン（肖像略歴）
次郎のＡＢＣ（發音綴字の話）
懸賞習字の手本（寫眞版）

日本一 のやさしきおもしろき **初等英語雜誌!!!**

オウルド ボイズ ソサエティ（初學英語研究青年會）
英文和譯課題、前號の答解、答案略評
買ひもの（やさしい會話）
世界奇聞、最新化學（寫眞版二個入）
先生の手帳（熟語研究、英語學習の心得）
太郎は次郎を愛す（英作文組立法）

氣樂な小鼠（英語の歌、曲譜附）
和文英譯の公式（『……てきやしない』譯し方）
學生が手紙を書く（繪入、暗誦用英文）
文法の話（シャルとヰルの遣ひ分け）
懸賞繪さがし新題（寫眞版）
水車屋の娘（繪入、西洋お伽噺）

和文英譯課題、答案、略評
吾輩は郵便函である（英文手紙の諸規則）
參考書案内、新聞の研究、讀者の手帳、次郎のいたづら（西洋漫畫四圖）、英語遊戲、懸賞習字の披露、記者の領分、讀者の領分懸賞試驗問題、同上前號の成績發表、其他
大改良!! 大擴張!! （愈次號より實行すべき御披露）

（見本は振替口座三〇八五番へ五錢お拂込になれば直ちに進呈す）

東京市麹町區富士見町六丁目
英語研究社

誌友面影（九）



（靜岡）高橋みつ子
大森富子



（石見）武忘松子
外茉孃



（大坂）山本堂嘉子



（福岡）竪林つち子
竪林なを子
浮洲より子



（南豐）瑠璃子
令妹

誌友面影（十）



（千葉）大川とし子



（群馬）坂瓜嶺子



（丹後）林田糸子
小西綾子

（宮城）駒澤きく子



（長崎）永井さき子



續々お寫眞の寄送を願ひたい
掲出の後お返し申します

有効保險
前代未發
秘傳奇術

全壹册正價郵税共參拾五錢▲郵券代用は四拾五錢封送の事

（目錄大要）神經衰弱の新療法●陰萎病を必治する新法●陰門の爛れを治する法●消渇を必治する法●頑癬の必治法●人造麝香の製法●上等香水製法●香袋製法●美顔クリーム製造法●音聲を淸良にする法●齒痛即治藥製法●髮の脫落するを止むる法●化粧石鹼製法●西洋白粉製法●毛髮必生法●臭汗治法●白髮を染る法●毛髮の光澤を美にする新藥●齒磨粉製法●西洋梳油製造新法●にきび即治法●ほくろを落す法●ビットル酒製法●夏日室內を爽涼にする法●羅紗類を汚せるインキ斑痕を除く法●●白瓜を一年新鮮に貯ふ法●蚤を驅除する良法●氷を即時製造する法●百年長壽の奇法●生涯病に罹らざる奇法●人の生死を豫知する法●船中より海の底を見る法●百日眠らず體衰へざる法●拔毛劑新法●寢入たる者に答へしむる法●禿頭病必治法●寢入りたる男女の心中を知る法●白なまず即治法●五十の皺婆を二八の娘に變ずる法●脚氣病必治法●妖怪變化を見顯はす神術●人體不死の奇法●千里一足飛行の神術●盜人を見顯はす神術●女に惚れらるゝ藥法●硬き毛髮を柔軟にする法●思ふ女をなびかす藥法●堅き女の氣を狂はす藥法●陰莖を長大にする藥法●そばかす必治法●女を閨屋にて泣す神藥●夢に戀人と語る秘術●見染し女を手に入れる神法●待人來る神術●一生戀中變らぬ秘術●悋氣深き女を治する藥法●閨中の秘藥●即座に男精を增す法●毒蟲に螫れたる時腫ぬ特効藥●避食の仙術●神速に精力を强む法●即座陰身術●人を眠らす秘法即ち催眠術●顔赤く吹出物生ずるを治する法●過房を治する妙法●多情を抑制する秘法●色慾なき女に情を發せしむる法●記臆力を増進する法●女孕みの仙術●男女梅毒の有無を知る法●淫婦觀破の奇術●黒字夜光の奇術●老人終身皺取りの奇術●腋臭を治する法●色を白くする内服劑新法●寶丹の藥法●腹痛速治法●疥癬病の藥法●生たる鯉を遠國へ送る法●脹喘を治する法●黄痕を治する法●鮫肌を直す秘法●味噌の損じたるを直す法●痳病の治法●月經の不順を治する法●疝氣の妙劑●齒痛を治する法●陰部の臭きを治する法●陰部の虱を去る法●にきびを去る最新法●頭髮を長くする法●毛生藥の最新法●梅毒必治の新法●便毒必治の新法●下疳を治する奇法●胃病の新劑●百日咳の妙法●肺病必治の新藥●中風豫防の新法●凍瘡の妙法●衣服に酒のしみたるを洗はずして落す法●火傷即治の秘法●シヤクリ即治法●聲を能くする新術●白髮豫防新法●土藏の鼠穴を塞ぎ再び明けぬ法●寢小便を治する秘法●頭疳を治する法●耳だれを治する法●いぼを取る法●あざを拔く新法●乳の出る妙藥●陰部の諸痔治する法●虎列拉病療治簡易法●梅毒豫防の奇法●思ふ時目を覺す法●年齡により房事の度數●病氣前知の奇術●男女全體の色を白くし且つ艷美ならしむる法●苺酒を製造する法●富を造るの秘法●一時に數拾匹の鼠を捕獲する秘法●夏朝子洗滌新法●疊の汚染を落す新法●新しき鍋釜の鐵氣を止る法●簡易美顔術新法●衣服に油の付たるを落す良法▲以下數拾法略す（合計壹百四十法あり）着金即刻送本す

專賣元　東京神田區五軒町拾九番地　日新館商店

生殖機病特効新劑……（獨逸新輸入藥）

◎内服　ヨヒンビン

本劑は獨逸國伯林大學教授スピーゲル氏の發見に係る男女**生殖機不能**即ち**陰萎病**陽物無力**腎虛神經衰弱**遺精、夢精、早漏、過房、元氣衰弱、老衰無力生殖虛弱手淫に起因する諸病早老者精液精蟲、缺乏不姙娠、冷症**快美**減少及び**短小者**等に用ひ輕症は四劑重症者は八九劑慢性難症は拾參劑にて根治の目的を遂せしむるに天下無比**可驚奇効**ある最新發見藥也**精力**を**增進**し生殖器を强健に**勃興**して**淫慾**を著しく**發動**せしめ人生の最大**快樂**を得んと望む者は早く試みよ峻烈偉大なる特効眞に**如電光**世にありふれたる誇大奇言を臚列する內地製無効賣藥と同一視することなかれ本劑の卓效は高名なる醫師に就て承合せば明白なり

拾錠入壹劑　藥價送料共　壹圓九十錢　郵券弍割增

一手輸入　專賣元　東京市神田五軒町拾九番地　日新館藥房

世界無比
最新發明藥
あざ

入墨は廿日**ほくろそばかす、なまづ、いぼは拾日**目に必ず美麗に除去すること**保險附**新効即藥にして患部の大小輕重を問はず容易に根治し假令顔面たりとも毫も**痕跡**を殘さず無痛にて除去し得らるゝこと確證す故に之を用ゆべき患ひある人は速に用ひて天然の**美質**を完うせよ來館者へは山の如き全治者の**感謝狀**及び除去したるあざ、ほくろ、そばかす、いぼ等の實物を示すべし實に**世界唯一**の新藥也但し本劑は其製劑を二種に區別し一はあざ、入墨、ほくろを除去し又一はそばかす、なまづ、いぼを除去するものとす故に注文者は各自除去せんと望む所の病名及患部の模樣を詳細明記して申込あれ左すれば其症に適應する藥を送付すべし價は各一劑分壹圓拾錢參劑半分參圓拾錢六劑分五圓拾錢拾貳劑分拾圓拾錢づゝにて郵券代用貳割增し（患部の面積大なる人は大劑を求むるを德用とす）着金即刻小包郵送す

專賣元　東京市神田五軒町拾九番地　日新館藥房

女子文壇の廣告により御申込の節は其旨御書添を乞ふ

女子文壇の誌友倶樂部欄内へ掲載

希望廣告開設す

（文明の世、何人を問はず、此欄へ廣告すれば、便利多し、有効疑なし、速に試よ）

◎就職を望む方

一件（五號活字十六字）二行金貳拾錢

一件（仝　上）三行金三拾錢

◎人を求むる方

一件（五號活字十六字）二行金四拾錢

一件（仝　上）三行金五拾錢

右申込の際原稿と共に前記の掲出料金送付ありたし。
爲替は日本橋區本材木町局宛。郵券代用は一割増。
振替貯金の拂込は第一七二九番女子文壇社宛の事。

東京市京橋區大鋸町十一番地　女子文壇社廣告部

▲女子作文速成良書▼

名家選評　好評増刷發行

懸賞文集

第二輯四六判五百頁

上等紙印刷洋裝美本

▲正價金三拾五錢

特別廉價金貳拾錢　郵税六錢（郵券代用壹割増）

殘部僅少、賣切れると増刷出來ません、早く購讀を願ます

出版元　東京京橋區大鋸町十一　女子文壇社（振替口座第壹七貳九番）

▲學校賞與品最適書▼

健全なる精神は健全なる頭腦に宿るとは、萬古不動の明言なり

レーベン

レーベンは臭素加里を主剤としたるにあらず故に服用に當りて其量を増減するの要なく且つ心臓を害することなし

レーベンは神經系統に鎮靜作用を呈するが故に神經性諸病に最も適良なるものとす

レーベンは鎮痙藥特に婦人の鎮痙藥としてヒステリー症に對し特異の効を奏す

レーベンは神經性不眠症酒客譫忘に催眠藥となり殊に恐るべき男女情慾の興奮を佳良にするに偉大の効を奏し健胃作用を有する等綿密なる注意を拂ひたる藥物なり

要するにレーベンは腦神經衰弱ヒステリー症に對し最も卓絶なる効力を具備せる良藥にして現世に於て殆んど間然するところなき絶好の藥物たるを斷言するに躊躇せざるなり

從五位 勳三等 醫學士 森 友道
海軍軍醫少監 從五位 醫學士 日向 次作
腦神經系統專門 醫學士 森 識

東洋唯一**時事新報**を初め報知新聞、毎日電報、國民新聞、都新聞、日本、東亞新報、東京藥事、其他帝都の大新聞を初め各地の新聞は筆を揃へて社會に紹介せり、曰く、近時社會の狀態一變し精神的智識の競爭時代とはなりぬ、而して腦神經衰弱患者の増加せるは著しき事實にして殊に現時學生の大半は輕微ながらも本病患者なり、醫學士常持爲治氏は本病々理の蘊奥を極め山海大氣の利用に依る自然療法の必要を稱へ終にレーベンなる新藥を創製せられ、斯業界の有力家(中南)の手に依りて社會に發表せらる云々と如何にレーベンが社會の各階級に偉大なる信用を博しつゝあるかを知るべし

若し本劑の内容を知らんと欲せば送料二錢送れ、說明書と養生法とを進上



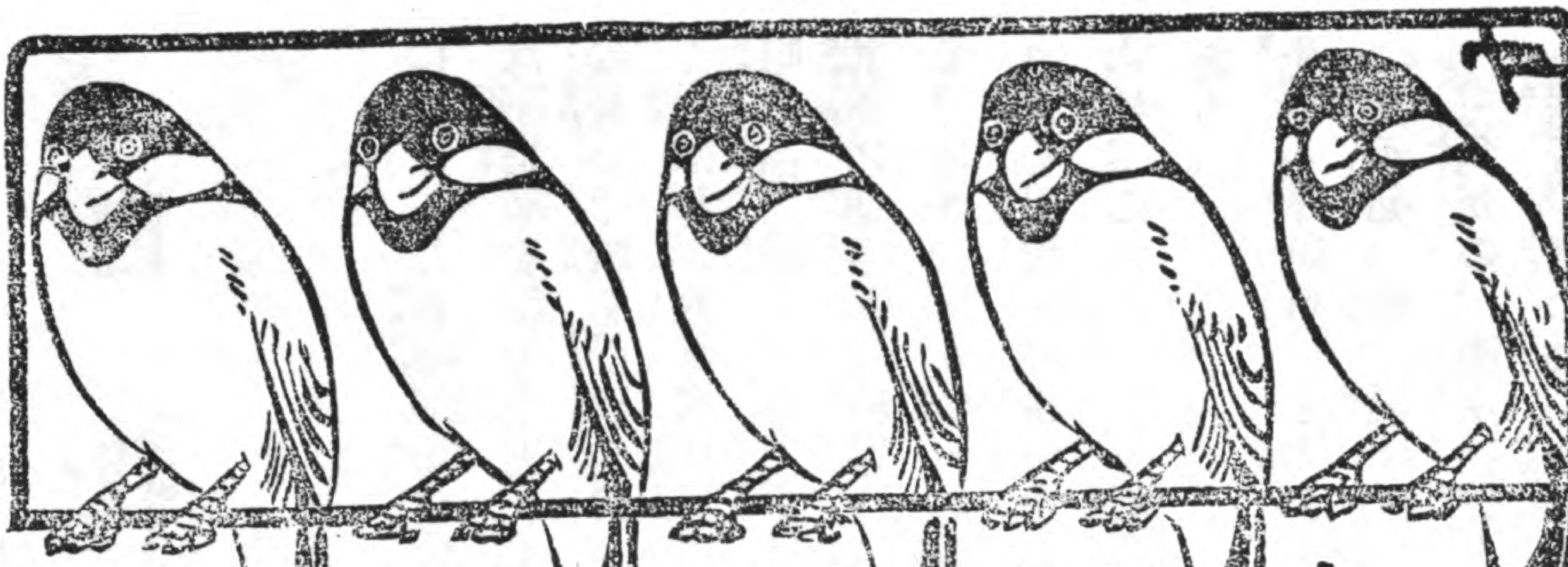
藥効 **腦神經衰弱ヒステリー** 等の腦病神經衰弱諸症の最良最新發見劑也

腦充血、陰萎遺精貧血

藥價	
八百錠入	五圓五拾錢
四百錠入	參圓
二百錠入	壹圓六拾錢
壹百錠入	八拾五錢
全國無郵税	

東京芝區愛宕町二丁目十四番地
弘濟藥院藥品部
電話新橋三〇八九番
貯金口座七七七七番

レーベンは醫界空前の成功 近世絶好の腦神經衰弱療法



女子文壇四年九號

紀元二五六八年　（明治四十一年六月一日發行）　西暦1908

兌換紙幣

一圓紙幣は何處にあつても一圓紙幣です、津々浦々何處へ行ても一圓に通ります、乞食の前に出ても一圓、華族の前へ出ても一圓、懐中の底に休んでゐる時でも一圓、飛び歩いて働いて居る時でも一圓、何んなに忙しくても働くのに嫌な顏をしたことは一度もなく、一圓以下に價値を落すと云ふ事も決してありません、彼方では一圓に通用するが、此方では一圓に通用しないと云ふことは決してない。男でも、女でも、世の中を渡るには又此の兌換紙幣のやうでなければなりません。價値が極つて居なければなりません、文藝では一圓の價値はあるけれど、家庭の主人公としては三文の價値もない人や、學者としては通用するが、世間並の人情は解してゐない人や、教育家としては地位があつても、細君としては一向間に合はない婦人や、女學生としては豪いけれど、一家の令孃としては素行の修まらぬ女子や、是等の例は澤山あつて皆兌換紙幣になり得ない人達です、素より身に一藝一才は有すべき筈でありますが、人間として常識を缺き、理情を辨へず、一方にだけしか通用しないと云ふやうな人は甚だよろしくない、兌換紙幣のやうに何の塲合にも持つて居る其人自身の價値と云ふものがなければなりませぬ。

六月（小）

日曜　七日　十四日　廿一日　廿八日

入梅　十一日

げし　廿二日

枝豆、百合、早松茸の時期

自我

川上眉山

しと／＼と春雨が降つて居る日の夕方である。岸野勉は下宿屋を出やうとして、房州へ旅行して居る友からの長い手紙を受取つた。封筒には彼男の性格を最もよく表はした無骨な折釘のやうな文字で、「東京本郷龍岡町龍岡館」として更に大きく「岸野勉君」と記し、其下に切手が二枚貼つてある。裏には只「安房保田にて、エス、エム生」と淡墨で亂暴だ。手紙はノートブツクを引裂いて書いたものらしく、細かい西洋罫紙に六枚、この男には不似合な紫インクで、小さく書いてある。

先づ「岸野君」と大きく書いて、

御承知の如く僕は二部の學生で、今でも幾何だの、三角だの、應用物理などゝ地味な學課ばかり漁つて居て、君の如く文學だの哲學だのといふ高尚な學問は未だ覗いた事がない。だから君などには可笑しいほど僕の生活が平凡で無趣味に見える事だらうと思ふ。飽まで理性に富み、冷静で、爺臭いのが僕の性格なのだ。それだけ君より常識に富んで居るのも事實である。君と僕とは相容れない性格を持つて居る別々の「人」である。センチメンタルとかローマンチツクとかいふ匂は僕の性格には少しもない。君は茶菓子にマシマローを食ふ人、僕は茶菓子に焼芋でも噛る人だ。エス、エム生は何處までも石に上下を着せた無骨、不風流、蠻カラ極まる青年で、近寄つて汗の臭ひはしても、香水の匂ひはしない男だ。

岸野君、この石に上下を着せた無骨、不風流、蠻カラ極まる青年が、ある少女に戀せられたのは頗る不思議ぢやないか。それぱかりでなく、僕は都寫しの頭髪にリボンを飾り、海老茶の袴を穿いたヘイゲリアンを此地に於て見る事を得た。安房の二十日は僕に取つては忘られぬ紀念の旅行である。そして僕は靜かに暗遷默移する時代の急潮を、自然と人生とに

憧憬深き「二人の個性」に於て見る事が出來たのを感謝する。

昨日だつた――この日は朝から蕭々と細いのが降つて居て、樹木の梢は薄く烟つて居るやうだつた。それでも午過からからりと晴れて夕方には美はしい春の日が照つた。て、僕は濱邊を散歩すべく夕方頃からぶらりと宿を出た。

宿から四五間行つて酒屋と下駄屋との露地を拔けると濱へ出る近路である。濱へ出て見ると女やら子供やら五六人の人影が、潮臭い雨後の空氣を吸うて濱邊を散歩して居た。そして僕はこの雨後の濱邊が如何ばかり美しい景致に富んで居たかを形容するに足る程の君の如き靈筆を持つて居ないのを甚だ遺憾とする。只繪のやうだつたと言はう。遙かに青い波の上に富士の白いのが浮いたやうに見える。

僕は磯に轉がつて居る石の上に腰を下して、懷にして來たユーイングの磁氣學を繙いて、例の磁氣分子説を三十分ばかりも繰返して讀んだ。そして、それから濱邊を散歩しやうとすると、何時か日が暮れんとして居る。その夕暮の美しさ――もう君だつたなら、あの潮の音のやうな淸く悲しい詩でも作つたらうに、と思ふけれど――て、今は最う、幽暗い波と、紅い雲と、水色の空と、磯に繋いだ苫船と、恰で繪のやうな中を、僕はざく／＼砂を踏んで、大股に歩いて居るのだ。

その中にやゝ歩が疲れて來た。再び白砂の上に寢轉んで、遠く磯の彼方を眺めて居る中に、不圖磯邊を樂しげに歩んで居る男女二人の影を見認めた。

その女の方を見た時に、僕は、

「あ、ヘイゲリアンが……………」

と心の中で叫んだ。あゝヘイゲリアン、ヘイゲリアン、君は直ぐ悟つたであらう。千八百年間の露西亞の女學生にはこのヘイゲリアンが澤山居た事を。そして今僕は目のあたり純白のリボンをかけ、海老茶の袴を穿いたこの少女を見た時には、嘗て君から聞かされた「その宵」のエレンの日記を思ひ出さずに

は居られなかつた。

この女は三好由美子と言つて、今年二十一で、この村で有數の財産家の娘で、そしてまた東京女子大學英文科出の才媛である。彼女は最う十七の時から華やかな戀に憧がれて居た。憧がれたのではなく、冷やかな知識の石に縋りついて、戀を解釋しやうと企てたのだ。二十の時一旦他に嫁入つたが、居ること八月ばかりにして彼女には大いなる「自覺」があつた。それは愛なくして結婚するのは罪惡である。女は何時までも男のエコノミカル、サブゼクションに甘んずる事は出來ない。で、彼女は潔よく良人に離婚を迫る。良人は美しい妻を恨んで狂死する。その良人の死屍を見て、冷やかな笑を浮べながら彼女は戀人の許へ走つた。そして結婚して了つたのだ。今にして思ふ。その時彼女は心の中でヘイゲルを說き、ピユイチルを說いた事を。彼女の胸は燃えんばかりに強烈な個人意識に悶えた事を。

自覺、自意識、自我、これ今の女學生が好んで用ふるアブストラクト、ナウンではないか。

個人としての自覺を得た彼女はあらゆる周圍の壓迫に反抗して勝を占めた。あゝ彼處の磯邊を歩んで居る二人は勝誇つた歡喜を呼合つて居るのではないか。やがて男は女に見捨てられる運命が來るとも知らずに。

僕は磯の白砂の上に寢轉んで、萬紅を漲らしながら海に沈入る悲壯な落日の影を望み、遠くエレンとシユビンとを思ひ浮べた。

やがて僕は白砂の上に落ちた書冊を拾上げると、そろそろ歸途に就く。その途中でお綱さんに會つた。お綱さんは僕の宿の隣の肴屋の娘で、此間から宿へちよく〳〵手傳ひに來て居るので能く顏を知つて居る。話した事もある。

「やア。」と聲を掛けると、

「あら。」と顏を赧めた。

「何處へ行くんだね。」

「お前さ迎へに來たゞアよ。」

と言ふ。房州の磯育ちの女は、こんな存在な言葉を平氣で使つて居る。
「然うか。今歸るところだ。」
「おや一緒に歸るべえよ。」
「なに跡から直に歸るから、お前は先へお歸り。」
「あれ、然う嫌つたもんてねえよ。」と言つて笑ふ。
て到頭宿まで一緒に歸る事になつた。
その中に僕等は濱邊から上つて、やゝ人家の稀な小路へ來た時、二三人の漁師に行會つた。すると其いづれもが、やア八亭、と妙な同じやうな事を言つて、通りすがりにお綱さんに調戯つて行く。
「八亭？何だね八亭とは？」
「知りましねえよ。おほゝゝゝ。」
とお綱さんは變に笑つた。僕は解らんから尚、
「妙だね、八亭とは。」
「なアに八人ほど亭主を持つたからだアよ。」
と遂に言つた。僕は驚いた。
「八人持つた。お綱さんが！」
仍て僕はいろ〳〵聞いて見た。
それは恁うだ。
お綱さんは今年廿一である。十七の時と言へば戰爭の始まつた年であるが、其時始めて亭主といふものを貰つた。五月ばかり立つて其人が死んだ。また外から貰つた。半年も經つと今度は其男が厭になつた。そこで追出して又外からお婿さんを貰ふ。こんな工合で五年の間に八人持替へたと言ふ。今は獨りぼッちである。
「そんなに澤山貰つた中で誰か一人位戀しいのがあるだらう。」と聞くと、
「そりや始めの中は誰でも皆戀しかつたけんど、直に厭になるだアよ。今でも思出す事があるだがね、三日と一緒に居た日にや喧嘩だアよ。」と言ふ。
宿へ歸つた頃には最う灯が點いて居た。その門口でお綱さんが何やら紙切を呉れた。室に入つて燈火に近寄つて見ると、塵紙の引裂いたのに、燐寸の燃殘りで黑く、

お前ばかりは
と書いてあつた。今朝はその事で宿の女中に冷かされた。君は此手紙を讀んだら笑ふに違ひない。僕も笑つた。

岸野君、此處で擱筆するに際して、僕はこの二つの個性に就いて君の所感を聞かん事を願ふ。君は文學者の卵である。僕は理學者の卵である。同じ卵であるが、互に相容れない性格を持つて居る事はこの手紙の始めに書いた如くだ。批評もそれ〴〵異なる事は當前である。

あゝ烈しく渦巻く新らしい時代の思潮は世の青春男女を何處の岸に吹きつけるてあらうか。地上の花と歌はれた「若い女」の星のやうな瞳に、溫かい愛の色と懐かしい情の閃きとは最う已に消えて居る。見ゆるものはたゞ深刻なる寂寥と、哀愁の影とてある。そして僕は竊かに思ふ。十九世紀の露西亞の如く、今の女學生は男子のそれよりも遥かに急進的な思想を抱いては居ないかと――そして亦自然科學の影響や、哲學の感化を受けることが深くはないかと。

僕は今日は朝から窓に倚つて、時世の流れの急なのを思ひ、三好由美子を思ひ、お綱さんを思ひ、君から借りたツルゲーネフのデスペレート、キヤラクタアを讀む。

四月中旬　S、M、生

岸野君

名流婦人の
處女時代
兩親に逢ふが樂み

後閑菊野子

姫路の生れて御座いますが、幼少い頃兩親に伴れられて、東京にまゐりましたから、東京で育つたのも同じて御座います。明治九年にお茶の水師範學校の、男子部の附屬小學校に入學しました、其頃の小學校は只今と制度が異つて、一級二級と申します頃で、尋常だ

けが六級かに成つて居りました。私は試驗を受けて、確か二番目の級かに入りましたが、成績によつて上の級に飛び越えることが出來ましたので、十二年には卒業されました。その年の暮に女子部の豫科に入學し、引續いて本科に遷りまして、十七年に卒業いたしますると、直ぐに附屬小學校に敎鞭を執ることになりまして、今まで丁度二十五年間、奉職いたして居りますので、朝夕學校の昇降ごとに、茗溪の流に臨みますると、實に無量の感慨が御座いますのです。

私には兄姉が御座いましたのですが、姉達は早く緣付きましたし、兄は二人とも夭折いたしましたので、兩親は末子の私を何うか無事に育て上げ度いと申しまして、それが爲め態々東京に出てまゐりました。兩親は私の敎育に全力を注いで呉れましたので御座います。ですから私も幼少ながら親達の心を有難く思ひまして、出來るだけ勉强いたしました。師範學校を卒業して、附屬に敎鞭を執るやうになりました時も、兩親は非常に喜んで呉れましたので、私は益自分の志を勵ましたので御座います。

愛讀しました書物で御座いますか、父が國語の書物を澤山藏して居りましたので、種々のものを讀みましたが、中にも八犬傳、水滸傳などが面白く御座いました、八犬傳は何度繰返して見たか知れません。只今から考へまするど、父は大方私の讀で宜しい書物ばかりを選んで、書齋に置いたのであつたらうと思はれます。和歌も父の好きな道で御座いましたから、早くから初めまして、小學校時代から、何うやら三十一文字並べることが出來ました。

娛樂と申しましては、之も父が盆栽を愛しましたから、私も自然に好きになりまして、父を手傳つて、澤山の植木に朝晚水を注いだり、草を除つたりなどして、よく世話を致しました。郊外の散步は何より好きてありました、小供の頃から日曜毎に、父に手を曳かれて野外に出まして、草花を摘んだりなどして餘念なく遊びました。寄宿舍に入りましてからは、日曜毎に宅へ歸りますのが何より樂みでした。兩親も亦私を待つてとが非常で御座いましたのですから、雙方とも日曜の來るのが一日千秋の思ひで……其頃寄宿舍では日曜日の外、外出を免されませんでした……日曜には朝早くから宅に歸りまして、兩親と顏を見合せて互に嬉びあふのが、此上なき愉快で御座いました。歸りますと時間の免す限り一刻も長く宅に居りましたもので、

此事ばかりは、如何なる日曜でも、假令試驗間際であつても、決して缺かしたことがありませんでしたものですから、よくお友達に笑はれました。歌は其頃毎日必ず一首宛作ることに決めて置きましたので、一週に日曜日を除いて六首作りまして、日曜に歸つて父に添削して貰ふので御座いましたが、復習などに逐はれる場合には遂怠けまして、土曜日の晩になつてから狼狽て六首を一度に作つて、持ち歸つたやうなことも御座いました。遊藝は時間もありませんでしたが、宅に居つては習ひませんでした。音樂は學校にピアノ、バイオリンもありましたが、琴は普通の琴、箏の琴、及び雅樂などに用ふる六絃の和琴も習ひました、和琴は拍子木を擊つて歌に合せて彈きますので、卒業式の時にもこれを演じました。作法も學校で小笠原式の禮法を習ひました。

寄宿舍に入りましたのは、師範學校の本科に成つてからですが、只今と違つて皆坐つて居りました、机は各自一脚づゝ宅から持つて行きますので、一室に四人位宛居りましたが、全く一家族のやうに、お互に睦み合ひまして、朝夕の箒掃除も交る〳〵致しました、炊事も何も角も皆生徒がするので、毎日當番を定めまして、當番は朝早く起出て、手分けして食堂の掃除から炊事萬端を引受けますのでした、偶には皆さんして特に御馳走をこしらうやうなこともありました。先達亡くなられました那珂先生(通世氏)が校長の頃で、斯樣なことに非常にお心を注がれまして、其結果、先年歿なりました赤堀峯翁氏を聘して、料理法を敎はることになりましたが、恐らく之が女學校で割烹を敎へた嚆矢でしやうと思ひます。只今赤堀割烹敎場の菊子さんと申されるのはお娘さんて、其頃はまだお若くて、折折助手に見えました。唯に炊事のみでなく、髮も互に結び合ひ、厠のお掃除まで交替に致しましたので、寄宿舍とはいひながら、自身の家に居るのと少しも違ひませんでした。

髮で御座いますか、私どもの頃は重に銀杏返で、ちよいちよい島田の方も見えました、袴も無論着けませんので、世間一般の娘子達と少しも違ひませんでした。先生は女のお方はお三人でしたが、矢張り袴無して、髮はお二人は丸髷、お一人は未亡人の方でしたから、切下髮で御座いました。私も敎へるやうになりましてからは暫く丸髷に結つてまゐりました。十九年頃かと思ひます、高等師範と合併に成りましてから、服裝も

急に變りまして、二十三四年頃までの間洋服を着ることになりました、從て頭髪も束髪となりました。と、同時に舞踏が始まりまして、學校に朝野の人達が集つて舞踏をしたこともありました。貴賓を招待する場合などに、西洋人を頼みまして、室内を装飾するお稽古をしたことも御座いました。着馴れない洋服ではまだまだ不都合がちでありましたので、間も無く、また和服に戻りまして、其頃から袴を用ふることになりました。それから又一度以前に歸つて、袴なしになり、今度着け出してから只今に及びましたので御座います。

家政のことを研究致した初めと申しますのは、二十四年頃と思ひます、以前から此の學科はありましたが、男の先生がお敎へになつて居りました、が、家政のことは女子が受持つべきものであると云ふやうな説がありまして、それには私が早く家庭の人となりまして、幾分か其道に經驗もありましたので、其年から高等師範の家政科を受持つことになりましたのですが、其頃は家政などいふことには餘り人々が注意を拂はなかつた頃でしたから、確か二十六年と思ひます、高等女學校敎員の檢定試驗委員に任ぜられ、家政と裁縫とを受持ちましたが、女の試驗委員は私一人で御座いました、受驗人が家政と裁縫とで僅か一人でした。委員一人に受驗者一人……兩方とも一人宛で御座いましたが、何したことか其一人も試驗を受けませんので、其年は遂に試驗無しに終ひました。翌る年にも一人ぎりでしたが、此人は合格いたしました。其後暫くの間毎年二三人位でありましたのが、只今では優に百名を越えるやうになりましたので御座います。

學校生活時代の考へと申しましても、私はたゞ初めから兩親を喜ばせたい、兩親を滿足さして、そして私も共に喜びたいと思ふ外、別に立派な人に成りたいとも何とも思ひませんのでした。

十三歳で師範入學

矢田部しゅん子

小學校を卒へまして、直ぐ國(秋田縣)の師範學校に入りましたのが、十三歳の時で御座いました。普通ならば師範學校の入學は、十五歳以上でないと免されませんのですが、まだ規則の寛かな頃でしたから……無論私も十五歳といふとに致して入學りました。そんな工合ですから、上には年齡の制限はありませんでした

のか、それとも矢張り、規則が左程嚴重でなかつた爲めか、同じ生徒のうちに、四十歳位の方も居られました。私は寄宿舍に居りましたが、近傍に住つて居るものは通學を免されましたので、寄宿生は總てゞ二十五六名て御座いました。寄宿生同志の間は極く親密て、互に助け合ひまして、恰も一家族のやうに暮しました、それに舍監が、其頃四十恰好の方で、至極よい方でしたし、殊に私は最年少者て、まだ眞の小供で御座いましたから、舍監を師とも親ともたよつて、暇な時には、就いて作法も教はりましたし、何事にも深く世話になりました、其舍監の方は、只今七十歳前後にもなりましやうか、遂先頃まで引續いて舍監を務めて居られました、私は未だに文通致して居ります。

其頃、可笑かつたのは、生徒が皆男子と同じ袴を着けて居たことでした。それは新任されて來ました國語の先生が着けて居られたのが初めて、之を見習ひまして、後には生徒一般に袴を用ふることになりましたのですが、ちやんと襠もあり、腰板もある、小倉織の、縞のある、男子のと少しも異はぬもので御座いました、て、女のことて御座いますから、自身の袴は自身で洗濯もし、縫ひ直しもせんければなりませんので、袴を拵ふことの出來ぬものは、大變に不自由でした、私などは學校に居りますうちに、袴ばかり確か九着か縫ひました。けれども、其他の服裝とか、髪飾りとかいふことには、誠に無頓着でありまして、華美な風姿をするのは却て、恥づべきことであると思つて居りました。只今とは大變に違ひました。凡てが其通りでありまして思想が誠に單純で、唯もう一圖に勉強しやう、少しも多く物ごとを覺えやうといふより外、何ごとも頭腦のうちに蟠つて居りませんでした。別段小說を見やうなどゝいふ氣もありませず、新聞雜誌の如きものも餘り目に觸れませんでしたので、社會の事情には疎かつたのですけれども、其かはり一面また學生らしく、愛らしいところも御座いました。社會の總てが只今のやうに複雜でありませんでしたから、誘惑されるやうなことも少なかつたので御座います。

師範學校を卒業致しましてから、直ぐに東京に出て、高等師範の入學試驗を受けましたところ、志望者も多かつたのですが、幸に入學を免されました。入學つて見ますると、國に居りますのとは大分樣子が變りまして、何ごとも目新しく感じました。何時も待たれましたのは、日曜日の外出で御座いましたが、何うかして

規定の時間に遅れて戻りますと、罰則がありまして、次の日曜日に外出を禁束されますので、是が何より恐ろしい刑罰で御座いました。
學科以外の書籍では、太平記などが好きでした、暇の時には軍談物や、歌學書などを讀みました。體操は學科のうちに御座いましたが、體操以外、別に務めて運動しますやうなこともなく、終日室内に閉籠つて讀書に耽つたこともありまするし、人々の寢靜まつてから密に起出てゝ、書見したこともありましたが、幸に健康も害しませんでした。
高等師範は矢張り官費でありましたが、別段卒業後の檢束はありませんでした。ですから、教員が志望で入學するものばかりではありませんでした、此學校の外に、女子に高等の學問を授ける學府がありませんでしたから、進んで學問を修めやうとする人は、誰でも皆此學校に入學致しましたのです。卒業の際も先生から一人々々に、貴女は教育に從事する積りですかとのお尋ねがありまして、志望であると答へれば、適當の場所に世話して呉れますのですが、左も無いものは、自分の自由になりましたのです。勿論只今のやうに女教員を要することも少なかつたのですが、只今から考へますると一寸異樣に思はれますのです。

（以上談話筆記文責在記者）

蛙の音

兒玉花外

化粧したやうな春の朧月は、いま薄雲に隱れてしまつた。
私は、礫川高等師範學校の在る丘の横側、茗溪の凹い谷の如うな路を歩いてゐる。最う十二時だらう、下駄の音がカラコロ！と當りに低う響いて、右手の藪にそよろと風が生るやうだ。
髮が夜露に濡れたのか、何だか濕つぽい。青葉の匂ひは呼吸に逼つて、春の夜陰、樹木の靈が女のやうに人懷つこく、自分の袖に恠しう近寄つて來る。
綠草は春の女神の拔毛に似やう、ちらばツて青い岡を斜る下は、沼か池か、薄暗うて柵の外からはハッキリと判らないが、水のあるとは確かだ。――蛙が荐りと鳴いてゐた。
ピカ〳〵と春の艷な小さな星が降るやうだ。蛙は春の水に體を漬して、快樂に浮きつ沈みつ、うつら〳〵

と何に取縋るも夢のやう……浮氣な戀歌を唄つて居るらしい。

自分は、亡き母の事や、人のことや、國の田舍の風景を思出した。蛙の聲がしみ〴〵と胸に泌む。那處やらで小川の音が聞える。

尋常學校の門内の一本櫻は、四邊を白う花吹雪をしてゐる。花片に一つ〳〵精靈あつて無言の儘散て消失せる。

小さな狹い橋を渡つて、少し入込んだ場所、此頃建てられたらしい新長屋の前、頻りと人の黑影が動曳いてゐる。女の髮の油の匂ひが流れてくる。

淺黃の色の布を打被せたは正しく簞笥、續いて、長櫃は根つから來ないが、今宵は此處貧乏長屋の御婚禮さうな。

蛙の聲は、心をこそぐるがやう、いま盛に夢を戶口へ運んでくる。

日記の趣味（續き）

吉野臥城

日記は如何に記すべきか

そこて、日記は什麼書いたなら可いか、什麼記したら趣味があらうかと、一般の士女の心を勞する所でありませう。

私の經驗に據りますと、日記を叙記するには、凡そ三つの方法を心得て置くのが必要だと思ふ。その三つの方法とは恁うです。第一は全體の精叙と云ふ事て、第二は部分の精叙と云ふこと、第三は全體の略叙と云ふ事てあります。

作例第一

先づ第一の叙記法は「自炊日記」ならば、

▲三月一日（日曜）。晴。

眠から醒めて、眼を開いて見ると俄かに夜が明けた。板戶の節穴から障子の破れ目を徹して、一條の光線が白く走つて、向うの壁に不規則な圓形を描いて居る。光線の處だけが帶のやうに見えて、濛々たる塵埃が絕えず上下する。細菌が合戰をやつて居るのであらう。

隣の時計が九時を打つた。もう疾うに夜が明けて

居るのだと覺つた。壁上の圓形が段々退却してゆく。起きやうかと、一たび首をあげた。いつも寢て居る筈の渡邊さんが居ない。左樣だ、渡邊さんは昨日午後から代々木の眞山とか被仰る伯母さんの處に往らしつて、まだ歸られないのだと氣が付く。我ながら可笑しいと、寢卷の襟に顏を埋めて、くす〱笑ふ。幾ら日曜日なればとて、一人ぼつちなればとて身だしなみもあること、さう悠然として臥しても居られまい。日曜日でも食べるだけは食べなきやならん、朝飯の用意もせなきやならんと思つて、二たび首をあげた。襖の摸樣が明かに見え渡る。戸外は風が吹く。郵便に戸を叩かれて、とう〱起きた。渡邊さんからの繪葉書、まあ美しいこと。今日は二時頃に歸るとあつた。

お手水をつかつて、髮に櫛を入れた。火鉢の灰をほぜくつて見ると、ピンポンの球位な火種がある。炭團なるかなだと感謝する。——感謝、これは決して誇張でも何でもない。自炊する身は、朝に火種のある程嬉しいことはない。

早速火種を七輪に移し、炭を加へて煽ぐ。炭は火花を散して、赫々とおこる。例の如く御飯を焚き、お汁を煮る。お汁は根深汁。飯米は今朝で盡きた。買はなきやならん、兎も角、渡邊さんが歸られてからの事にしよう。

大根おろしを食べたいと思つて、拵へやうとしたが、おろしが見付からない。見付からないのではない、無かつたのである。走つて行つて、陶器製のを求めて來た。價金二錢也、お安いものだ。總て人間と云ふものは比較的高價なものは用意するが、極めて安價な日用品は買ひ惜んで不自由をするものだと、馬鹿ばかしく思ふ。

一人で拵へて、一人で食べる御飯はおいしくない。匆々に食べて、否無意識に口に搔き込んで了つた。あゝ滿らなく御飯を食べた。

などと、精細に叙記するのです。これが、まだ一日の全體を示したのではなく、朝飯を終つた處で筆を止めてありますから、夜の就眠までの事を記したならば、隨分長いものになるでせう。併し、第一の叙記法は幾ら長くなつても差支はない、唯細大洩さず精叙すれば可いのであります。

作例第二

次に第二の叙記法ですが、これは「家庭日記」ならば、

◎三月四日。宿雨が、からりと霽れて、くさ〳〵した氣も晴れた。風は少しあるが、暖かな日です。庭の梅が咲いてますから、龜井戸の梅も最う盛りでせう。

今日は、敏雄の第三回の誕生日です。正午。赤い御飯に聊かの料理を整へて、親しい人々を招きました。五歳になるお隣の照ちやん、千駄木の姉の子の五郎さん、住友の芳ちやんなぞが見えましたので、敏雄は嬉しがつて、覺束ない足どりて驅け廻る。危いよ〳〵と云つて、後から跟いて行くと、きやつ〳〵と笑ひ乍ら驅けて行くのてした。眞個に能く運動しましたよ。

二時頃には、お客さんや皆歸られたので、敏雄は乳房を含みつゝ私の胸に寄つて寢て了ひました、疲れたのてせう。その儘そつと褥に寢かしました三時半頃に、敏雄が目覺めて「照ちやん、照ちやん」と呼びました。「坊やは知つたてせう、照ちやんは最うお歸りになりました」と言ひ聞かせましたら、「諾」と云つて物足らぬやうな顏をしましたが、父ちやんが書齋から出て被居つたものだから、「父ちやんに抱つこする」とて、快く起きて行きました。敏雄のにこ〳〵して居る顏の美しさ、私は心底から可愛いと思ひました。

夕飯の時、敏雄は突如に「たがも」と云ひます。何の事か一寸分りませんので、「何の事てムいませう」と父ちやんと顏を見合すと、父ちやんは「これだらう」と指されたのは卵です。敏雄は得意の眼を瞶つて「諾」と云ひましたので、「はゝあ卵か」と云て笑はれました。「たまご」の發音は難かしいと見えて、幾遍敎へても云ひ得ませんてした。第四回の誕生日には、甚麽に成長して、甚麽ことを云ふてせう。

とやうに、其日の出來事や感想やの中、特に記して置くべき部分だけを精叙し、他は省いて了ふのです。

この「家庭日記」の三月七日の條は、小兒に關した記事で持ちきつて居ますが、その次の日には飼鳥に關する記事、又その次の日は食物に關する記事と火事に關する記事と云ふ風に記すのてす。この叙記法ては、却て小題を設けて叙記し、その文の終末に月日を記入、

するのが便てあるかも知れません。

作例第三

第三の叙記法は、前の二法とは全く違ひ、其日その日の出來事や感想やの全體を略叙するので、之が普通一般に用ゐて居る日記の書き方です。例へば、

○三月九日。晴。軟風。

母上は遠き親戚がり行きて留守なれば、静かに籠り居て、ヴァイオリンのお浚ひ、讀書などす。

猫は暖かき椽に、背を圓くして眠る。

井戸端に出て、襦袢を洗ふ。愛嬌よき隣のおかみさんも洗濯し居りて、よもやまの話をなしたりければ、いと面白く洗濯を終へぬ。

晝過ぎ、蕾がちになりたる福壽草を庭に移して、沈丁花の鉢を卓上に据う。『明治詩集』を取り出て、「春の曲」を讀む。夢静かなる春の日の心地、嬉し。

北海道の友子さんより郵便來る。稀有の大雪なりとあり。暖かき日に居て、寒き空を思ふに堪へず。唯無事におはせと祈る。

灯ともしごろ、母上歸らる。お土産には瀧の川の名物煎餅、櫻餅など。今日のお話を伺ひつゝ食ぶ。籠り居の淋しさも忘れて、話にうち興ず。

夜は早く鎖して、寐ねたり。

の如く、その日の事の全體を略叙するのであります。併し、略叙すると云つても、徒らに要項を摘記するに止めず、趣味のあるやうに書くのです。でないと、彼の日誌なぞと何の選ぶ所がなく成て了ます。此處が日記をつける人々の三たび思を致すべき點で有うと思ふ。其は、練習してゆく間に追々と呼吸が解て參ませう。

趣味の向上

練習と云つた處で、學校なぞで作文を習ふやうに、特別に練習するのではなく、毎日々々、注意して日記をつけるのです。之が軈て、非常に有効な練習で有ます。

この不知不識の練習は、日記を書く事が上手になるのみでなく、文章が上手になります。加之、冥々の裡に思想が涵養されて、趣味の向上するに至るものです（拙著『日記文作法』參照）。

して見ると、日記に依つて得る所の教訓と利益とは多大なものであります。私は親愛なる本誌の愛讀者に向つて、日記の趣味を解されんことを望むと共に、趣味ある日記を書くことを御勸め致します。（完）

She kept off the main roads as much as possible, and walked steadily on. When night came she slept in a sheltered place, with the precious note inside the body of her frock. She was on her way again early next morning, but she had not gone far when she was overtaken by a party of English soldiers who suspected she was a messenger from the enemy's camp, and she had to go with them to the nearest town. The road to the town was long, hot and dusty, but they reached it at last; and Emily was taken to the English colonel, who told her that she must be searched. The woman whose business it was to do this took the poor girl into a little room.

"Sit down, please," she said "I will be back in ten minutes." The instant the door closed and locked, Emily looked round. No carpet, no curtain, no fire she could get rid of her letter. She took the note from her bosom, then tore it up in tiny pieces, rolled them up and swallowed them, every one. Of course the matron when she came back could find nothing for her pains. The girl was released and so she made her way to General Sumter's camp, and delivered her message.

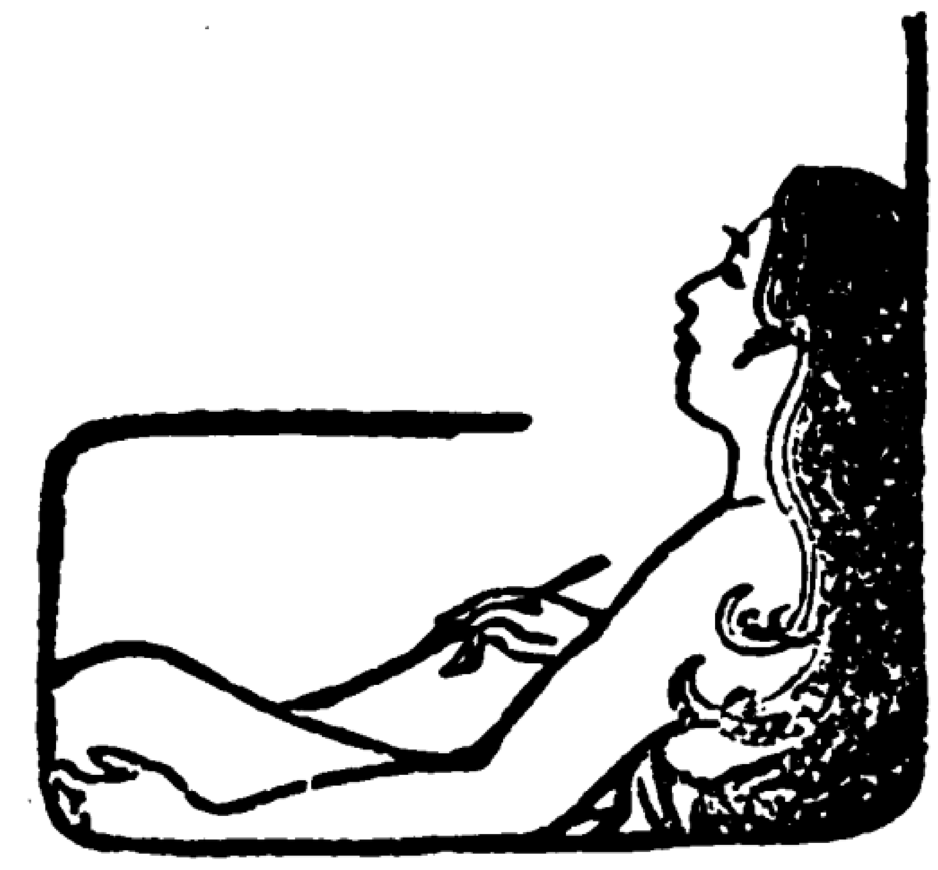
可成表道路を通らぬ樣にして彼女は息憩せずに先を急いだ．夜になりし時，人目の付かぬ隱塲に休み，大切なる書翰を衣服の極く中に挿入れ，翌朝早く旅行を續けたが，未だ幾里も行かぬ中に，英兵の一隊に追付かれ，敵營よりの使者と疑はれし爲に，終に近い一邑に伴れられて行く事になつた。其路は長く，暑く塵垢甚しくて，非常に難儀であつたが，漸くして到着しエミレは英國大佐の前に引出されて，身體を調べられる事になつた．此檢査員なる婦人は，彼女を別室に伴れ行き，

「一寸坐つてゐて下さい，十分程で參りますから」と，云ひ捨て，戸に錠を下ろして立ち去るや否や，エミレは四方をよく見廻はしたが，布物，窓掛，暖爐は愚，なにも彼の牒書を隱す塲所はない．其處で懷中より其牒書を取出して，切々に引き裂り，丸めて，少しも殘さず呑込んで仕舞ふた處へ，元の婦人が歸り來て調べても何の益にも立たず，小女は放免されて，旅をつゞけ，終にサムトル大將の陣營に達して，彼の使命を完ふしたのである。

英 文

(第四年第六回)

女子英學塾講師 河井道子



The Faithful Messenger

During the Revolutionary War, an American general wanted to send a message to another general. To his great surprise, he found that no one would take the important message, saying that the country to be passed was full of English troops.

As he was walking off to his tent, in a very bad temper, a young girl followed him.

"General," she said, "if you will let me, I will take the message to General Sumter." The officer stared in wonder.

"Who are yau? And are you ready to take a message through a dangerous country?."

"I am Emily Geiger, and I am ready to go, sir," was the simple answer. The general did not like to accept the girl's offer, but he know that every minute was of importance, so he wrote a short note on a small shut of paper; then he made Emily learn it by heart, and handed her the paper.

忠實なる使者

北米獨立戰爭の時，某米將が他の大將に軍信を傳へんとしたが，此大切なる使命を達さんと欲する者一人もなきに驚いた。兵士等は，通過すべき塲合には敵なる英國兵が充滿して居ると云ふのである。

大將は怫然として，自分の天幕に歸へらんとする時，一處女が彼の後について來た。

「若し御許可下さらば，私がサムトル大將へ御使に參ります」。

大將は愕然彼女を熟視して，

「一體御前誰だ？危險な土地を通つて，使命を傳ふる氣が本當にあるのか」。

「私はエミレガイガルと申します．唯，早速に參ゐられます」との飾なき返事。大將は斯る處女の申出を受納するも不本意なりしが，併又一方より云へば，一分と爭はれぬ大切なる塲合であるから，短文を一小紙片に書き，エミレに暗記させて，然る後に其書狀を渡した。

當選繪畫（其八）

山中古洞先生選

(1) ふみきり　（二等）　小野きく
(2) 運動會　（三等）　佐貞子
(3) お話　（四等）　きよし
(4) 路行く人　（五等）　坂野よね子
(5) 足場　（五等）　神戸まさ子

牛込區富久町六〇藤澤方
名古屋市押切町七丁目淺井方
茨城縣結城郡菅原村
京橋區南紺屋町七



美文



編輯局選

▲規定　本欄は他の各欄以外の一般の文章を採錄す、二十四字三十行以內、用紙は半紙又は罫紙、一人一章に限る事、投書締切は每月十五日、賞品は甲種懸賞規定に據る。

二等　○春雨の一日

山形縣西置賜郡豐川村字小白川　杉　薬女

指摘定すれば彼岸すぎてより今日は丁度七日目、いつも今日當りは雪が人通り筋ばかりも消えて仕舞ふのに、未だ二尺餘も積つて居る、去年の日記と對照して見るに、去年の今日は荷車が通つてあつた、此の分にては稲蒔の期節は後れまいかと心配される、朝より降り出した雨が氣魂よく降り續く、鬱陶しい、ハッキリと夜が明けない、橇の往來する處を見れば師走頃の樣にも見えるが、土塚の上からホヤ／＼と息の立つのを見れば、全く春である、木の梢まで霧がかゝつて天地がまるで狹くなつた樣な心地がする、頭が重い何んだか寢む氣がさして來る、あゝこんな時友達でも、尋ねて來て呉れるとよいと思ふが誰も同感だらう、道行く人も絶え／＼である、二三日前お隣りの兄さんから、借りて來た小説を見る、字の容や黒い白いの區別は感じられるが、さつぱり呑み込めない、好きな畫報を出して見る、同じだ、お馴染の女子文壇を披らいて見る、これも同じだ。

面白い日には何んでも面白く、見え聞えするが、今日の樣にどんよりした日はもう駄目だ、眠つた方が宜からうと思つたが、それも出來ない詰らない日だ、心のうちでは何も彼も、仕度いやうに忙しく思ふが、事に當つて物臭い忌やな日だ、雪がだん／＼強くなる、鬱陶しい、障子をガラッと明けて見る、同じ事だ、雨垂れがせはしく垂る、フト軒端を見上げると、うるんだ樣な露の玉が並んで下つて居る、今垂つた雨だれを見下すと、雪を穿つた一直線の穴が、まるで地獄までも通つて居たかと思はれる。

濕つぽい風が吹いて來た、忌やだから障子を閉ぢる、外には鶺鴒の聲しか聞えない、一日太陽の光りが見えない、朝から晩まで同じやうな光線の日だ、こんな空には木も草も太陽も詰まらない日だと思つて居るだらう、川の音が高う聞える。

嫌な日が能く表はれてゐる、も少し深く書いて、感想のゆらぎを表はしたならば、おもしろい散文詩が出來たであらう(評)

三等　○太平洋の見たい人

函館區元町七十一　藤本鳥羽子

私が小學校に行く頃姉樣や妹等と、よく離れの三疊で日大地圖を擴げ、一番先に自分等の居る處は此處だと言つて毎も山陽道の西の端山口縣を指すのでした、それから隣縣の廣島こゝには懷かしい從妹の家があるので直ぐ此邊が靜さんの宅だと、姉樣が言はれる、すると妹は愛らしい眼をまるうして叔母ちやんのとこはどこ、と問くので私は伊豫の今治を指して此所だと敎へるのでした。

姉樣が山陰道の方の海をさして、これが日本海で、又そちらの廣い〳〵海が太平洋だと敎へられた、あゝ太平洋、そんなところを私は一生の間に見る事があるだらうかと思つた、それから私は毎も地圖を出す度に、太平洋てどんな廣い海でしよう、と母樣に尋ねると、それは眼も霞むばかり廣い〳〵海で、內海と異つて島も何にも見えぬ、常に荒い山の如な大きな波が打つて物凄い恐しいとこださうな、と母樣は言はれた、けれど私は何だか　物凄い恐しいとこが見たいものだと思つた。後には私が毎も太平洋が見たいと云ふので、「太平洋の見たい人」とそれが私の假體名詞となつて了つた。

それが妙なもので十年昔に地圖で見た太平洋を今は眼前に朝夕ながめて暮す身となりました。

然し姉樣や妹は今も昔も太平洋は、やつぱり地圖で見るばかりです。

兎に角、眼の着け處が、まるて他の人と違ふ、天晴好き才を持つた人てあらう(評)

四等　○更けし身

羽前　紅波

花ゝ咲かねば香もなくて、都のそれに比べては、眞に寂しいものながら、さすがに馬小屋の隅までも、搖曳たる春の氣は溢れてゐる、藁を捨てたやうな枯草の根本が青ばんだのにも、峽ごとに殘る雪の色にも、言ひ知らぬ長閑さがある、それに緩やかな波の姿、彼方の五津の島の殘雪が輝くことはあつても、鷗を遊ばせて漁舟を浮べて、緣によせて白く碎くる波の色は如何しても、春の色である、此處北國の一僻村にも矢張り春は來たつた、春は何處にも平等に來たのだ。

妾のやうな身の上でも春といふ名を聞けば、どこが暖いやうな感が起る、ましてや得意の人は‥‥‥噫、妾とても樂しい春はあつた、快活な夫人さんと呼ばれた春もあつた、花にも浮かれ月にも歌つたあの頃、は妾とても人並みの情は燃えてをつた、而して世の人は睦まじい夫婦といふてくれた、あの頃と今の佗居とをくらべて果してどちらが幸福だらう、あの歡樂も一年とは續かなかつたてはないか、今の方が矢張り幸福といふものではなからうか、優しい先生、花のすきなど

アノの上手な先生と、村の人に尊まれて、可憐な小國民のお守りをしてゐる今は、虚榮も何もない都ぶりを我から捨てゝ、野の人となづまんと心懸けてる妾、「先生は何といふ御綺緻よしだらう二十六なんて如何しても見えない水道の水で磨いた人は違つたものだ」などゝいふて、やれ今日は何處の振舞だから髪結ふてくれの、いつ婚禮だから手傳ふてくれのと、思へば笑止しい程の今の妾、田舍娘の色が黒からうが、肌はごそ／＼してゐやうが鬼も十八花の盛りを、紅の襷をそろへて、立て矢の字に締めてやつたも一二度ならず、其度毎に不問語る、飾り氣もない僞り氣もない淳朴な田舍の氣質の何ぼう懐しく我も何故田舍娘と生れなかつたらう、なまなか、勵何等などゝいはれる家に生れたのが却つて……噫と歎息したのも幾く度、唯今よりは今よりはと、僅かに殘つた憧憬をさつぱり捨てゝ美事田舍のお婆さん株になつた心意の妾、おぞましや春の氣にうたれて、また都を戀ふる今日此頃、思はじとすればいよいよゝなほ、上野の花、隅田の川、扨は辛らかりし人優しかりし人、みな儚のみ幻となりて眼前に現はれたるではないか。



晴れ衣裳　名古屋　鵜飼蓮子

波の音の能う響く六疊に豆ランプ幽かに、獨安らかに眠る今よりも、矢張りあの頃の虚榮一方な生活が戀しいのか、おのれ、やれ女心の淺ましさと、罵れどされどなほ、……十疊の寢室、床は仲よく二つ並んでも、一つは常に空であつて一つは常に涙にぬれてゐたてはないか、今宵こそはとお寢卷きを溫めて十二時までもお待ちしても歸つて下さらぬ情なさに、女中の竹に當り散らした事もあつたではないか、それがあの床しい波の音のする此處より戀しいのか、男に賴らじ人に倚らじと浮世の絆を斷ちし筈なる我、まだか／＼、あれまで玩ばれて、刻まれてもなほ空な榮華が戀しいのか、名のみの夫婦が羨ましいのか、空踏まれた草さへ花が咲くとは誰が謂ひしぞ、我は早や旣に、根こそぎ捨てられて踏み躙られた身、それでも花の咲く機會があらうか、無い！無い！決してない、若しやあつたにしても、それは無駄花、色も香もない不具な花、おゝい

や、そんな花より、常盤堅盤に綠な草の葉になつて暮した方が遙かに心地よいではないか、徒に物に狂はしむる我春は、早く去ね、早く去ね、我は春を呪ひの唱歌を、あの打ち寄する波に流しやりて……。

今まで幾度も此種の文字に接したけれど、此篇などは最も痛切に、斷る女の上に同情を催ふさしめる（評）

五等

○父母の家

大分縣直入郡玉來町二百三十番地　安倍たま子

私はつい此の春小學校を卒業した者です、誠に年月の經つのは早い者で、此の間入學したと思ふ間に、早や八年間を夢の如く過ぎ去て、今は戀しい學校や、懷しい御友達にも、涙を流して別れました。親しい御友達の中には、遠方の學校へ行かれ、此の頃は長閑な時とか、百花開き亂れ何々と玉章に認めて送て被下ますが、私の心はまるで反對、學校を退た後は宛然世界でも異た樣な氣がして、悲いやら淋いやらで、今迄の如く樂しい感じは起りません、唯御友達が羨敷くて、何うかして上の學校へ入學し、勉强したいと思ふ氣が頭から去りません。夫で御兩親へ此の由を語りました、母上は哀れと思てか可愛想だからと言て私の顏を見つめましたお前も早や十五と云ふ歲になり、家の貧しくて人並の事の出來ん位の事は知らう者に、外の子供四人と言ふ者は皆な尋常科で退したのにお前許りは末子でも有り、尚女の子故何んな御宅へ嫁に行くか知れん爲め、苦しい中から高等までも長の八年間通はせたと、御慈愛な御言葉、私は是を聞きまして愁然となり、唯涙がわく斗で前後もわからず母の膝へ顏を當てました、父は傍で舌うちし、ほんとうに子供氣で仕樣が無いと一口、私は夫で色々考へて見ますと、實に兄樣等にも濟まん事で、女に生て小學校まで卒業した親の慈悲に感じ、今迄の望みを鎭め、御兩親へ以後憂苦しみの御心を安めんと、誠に濟まん事を申上ました、望みは思ひ切りましたと言つたら、父も大に喜んで今迄の月謝代りに每月金三拾錢使はす故、女子の爲めに成る雜誌なと買て宅で勉强せよとめうがに餘る御情で夫が緣で先月より女學世界と女子文壇拜見致す事に成りました、内には皆樣方の御作の美しい文やお伽噺を讀て心を晴します今迄で敎科書より外に見た事の無い私には何んとも言へない愉快な感じが起りました。

眞の事を書いてある文章と云ふものは、何處か人の心を引きつける力がある、上手下手は別として余は此種の文章を愛す（評）

秀逸

○花守

攝津　つゆ子

温室とやら、蘭科植物とやら、まだ見た事はない。わたしの守るのは一畝歩の水田のあやめ、はたけの百合、垣の牽牛花、其外四時の草花で、世にありふれたものばかり。

それも慰みや榮耀で培ふのではない、父子二人がたつきのしろ、花開かずば、咲かせずば、いのちを繋ぐ術がないのである。

生れながらにして私は花に衣食を得た、時しも菊の咲き始めて、一株二株、切つては鬻いで私のうぶ着や、乳の粉とかへたとやら、去年なくなつたおばあさんの話であつた。

二つの春母にわかれて、温い情の懐を覺えぬ私はいかばかりわが園の花によつて、寂寞を慰められたであらう、或時は此陰にねむつて、つく／＼ぼうしの聲を母の子守唄ときいた事もあつた、或時は涙を流してつらい思ひを花にのみ語つた事もあつた、もしそれ物心もおぼえてから、欲しいと思ふ帶を揃へたり、すきな簪をかつたりするのは、みな花の咲くおかげである。

思へば私が花を守るのではなく、花が私を守るのである。

まだ父さまの足腰達者で、水をやつたり手當をしたりする頃の、花を見廻つた私は、ハラリとさげたぬか髪で、はな屋のつうちやんと云へば、陰氣な、ひよわな、さびしい子であつた。

それが兎も角も十七といふ年を迎へて、島田に結つて、病む父にかはつて、此園を世話するやうになつたのを、祖母や父について優しかつた花は、きつと喜んでくれるであらう。

さう思へば近ごろ、花も大きい、色も濃い。

私をはごくんでくれた花は今我父をみとりして居る、輕からぬ病ひに冒されて、醫藥の料も少からぬを、こと缺かぬもみんな花のたまもの。

美しい花よ、情ある花よ、我父をもいやせよ。

かういつて私が園を見廻り乍ら、風や雨にさいなまれた葉や莖のくるしみを見つけ次第、いたはつてやると花も頷くやうに風のまに／＼動くのが、心あるやうに見えた。

同じ花守を書くにしても、以前の思想とは餘程調子が違つて來た、時代の變化は恐しいものである（評）

○修學旅行記の一節

豊後　陶山きよ

香椎より。

宮守は一時間餘りに略三韓征伐の御有樣を語り終りて息をつぎぬ、古りし世の事思ひ出られてなほかにかくと問はまく思へど、行くて急げば厚く禮を述べてこゝをまかりぬ。

右に見し池を左に見て、元來し道をたどり行くに、空いつしか曇りて、行く雲の姿たゞならぬと、見るまに風さとふけば雨まじりて袖おほふまもなく、はら〳〵と音してふり來りぬ。 野路の村雨風情あれ共、濡れなば髮のほつれやせんと人々ひた走りに走りて、定められたる家につく。

濡れたる衣打ちおほひ、少時やすらふ間に、後れたる人も集りぬ、豫定の旅行を終へたり、目的は達したればとて、午後三時〇分の列車にてかへり見がちに此所をたつ。

松の村立ほの見ゆるはやがて博多の近づきしならん大松小松の砂より出でゝをどるもあれば、舞ふもありて、おぼろにかすむ月夜の忍ばれては、千代の松原優なりや。龜山上皇日蓮上人の銅像は後ろよりなればよくは見えず。

幾百の心々をのせたる列車は、林をこえ山をめぐり畑を過ぎ、吉塚博多は夢のまにて、新たなる客は加はり、又加はる、天拜山は常に右にて、いたゞきの松のみ高く雲をつけり、左の方には大なるアルカリ肥料廣告あり、 昨日見しあたりまで思ひ出られて皆一時に「菅公」の歌をうたふ。

「鳥栖、鳥栖、八代線行のりかへ」驛夫の聲に心せかれてのりかふれば、あはたゞしき旅もをへぬと是れよりや、のどかなるらん。

筑紫次郎は風寒く、おどろおどろしく鐵橋をこゆれば、夕映え西に消えて畑に立つ農夫、妻をよびて鍬かつぎつゝ歸り行く、其姿彼方の森にかくれしが、しばしして表はれ又再び見えずなりぬ。

いよ〳〵夜の幕につゝまれたる世間はさすがに寂として、山のみ黑う空と別れたり、田原坂は暗に眠りて昔を語らず、春ならば「落花の雪」を歌はんに等つぶやく内、車の進み遲々となりてやがて止りぬ、池田驛我が熊本につきしなりけり。

どよめきをつくりて起る學友のこゑに、我を忘れ人を忘れて一散に迎へ給ひし師の君友の傍に走りぬ。

さきくませしか師の君、なつかしかりしよ我友。

まだ宵ながら星冴え〳〵て見なれたる眼にも此のあたりの景色物新らしき心地しつゝ、かたみに旅の物語などに打ち興じつゝ歸り行く。

元來修學旅行記などは無味乾燥のものが多いが、之れは亦頗る興ある書きぶり、おもしろくよんだ（評）

○ある夜

本所　田中久子

秋霧の如な雨が袷の肌へヒヤリと當つて、蛇の目の柄が濕つて厭な氣持。 夫でも姉樣を思つてやつと此處迄來たのだが……。 湯屋の角から右へ曲ると左側はずつと材木が暗い夜の目に恐ろしく峙つて、夫に續いて汚い小屋が鼻の先へ崩れかゝつた如に見える。右側の

ピタ〳〵戸の閉まつた長家の一番先が豆腐やで少し開いた戸の隙間から灯が明く流れ出して終日の雨にぬかるんだ路を光らしてゐる。夫がずうつと薄れ乍らも向側の小屋の戸まで照してゐる狹い道である。私が持つてゐる提灯の灯との外には何もない眞闇の晩、私はかうして此處迄歩るいて來たのだが……。

豆腐やの前を通りがてに中を覗くと、よく垣間見た事のあるお婆さんが丸まると向ふむきに座つて、釣ランプがホヤの上まで油煙を高く吐いて居る。何といふ淋しい……と思ふと又、姉樣の事が氣に、かゝるので足を早めた。

もう其處は野。なつかしい姉樣の御門の燈をぼんやりと果てに見通す廣い〳〵野なのである。

妙に胸が躍つて動悸が咽喉まで上るやうに思はれたが、かまはず急ぎ足に左手から斜にとほつた――

青草に埋つた間へ人が一人、漸く通れる巾の路が提灯を上げるとずつと行手まで白く續いて、あとはふつと闇に切られて了ふ――其路をせつせと歩いた。

霧のやうなのが風に卷かれて冷く當る、顏へも手へも、冷く冷く當る。

潮干狩　三河　白井かめ子



眞中に堀があつていつも材木が、油の如に澄んだ水の中へ浮べてある。夫が鉤の手に曲つて中程には少さな橋が架つてゐる、荷車の音が夏だと雷のやうに怖しく響く橋である。夫を渡るともう姉樣の御門は眞直。

茨の垣がずうつと闇に消え込んでゐるのさへ、目馴れたせいかぼんやりと見えるやう。

此處まで來ても私は何だか、まだ姉樣が氣遣はれてならない。今日の晝、逢つて話して夕方車でおかへりなすつた姉樣がどうしても私には氣遣はれてならない。つひうしろで人の歩む氣勢がして夫が私の留ると一緒に留るのが何とはなしに恐しく胸に響くもの……。野はつきた。もう御門はつひ其處。

妙に胸が騷ぐ……御門をは入つて明るいお玄關の格子をあけた時、いつものやうにきつと姉樣が出て被入るにちがひない、とは思ふものゝ矢つ張りどこかで胸に囁く……『姉樣は死んだ』……と。

「姉樣は死んだ」と云ふのが餘り突飛で、勿論斯んな感じのする時はあるに相違ないが、前に何の伏線もないから突飛に感じる、行く道々のありさまは例に依つて上手に書いてある、一作每に手があがるや

うに思はれる（評）

○演説の練習

本郷　朝井松子

春日會と講習會とが聯合して催す藤浪先生の送別會に春日會の會員總代として是非共私に演説せよと主幹よりの御命令、實に身に餘る譽の程嬉しとは思へ共、とても未熟者の及ばぬ事と、再三再四御辭退したがどうしてもお聞き入れ下さらず、不得止お受は仕たものゝ、未だ嘗て經驗の無い然も訥辯の私にどうして今日の大役を立派に果す事が出來やうか……。

華やかに飾り立てたる演壇に登つた時には屹度皆さんが拍手を成さる、するとバッと赤く成つて烈しく動氣がする……聲が震へる、おまけに詞の順でも誤つた日には……吁もう考へれば考へる程厭だ、けれ共時間の迫つて居る事だから、ぐづ〳〵仕ては居られぬが……ウムこう仕やう一通り述べる主意を書き立てゝ夫を悉皆暗記して蓄音器的にずら〳〵喋つて了ふ、アアそれがいゝと直樣筆を取つて思ふが儘に走らせた、オヤこれでは續きが惡い、こんな事は此處で云つてはいけまいと棒やらインキやらで大騷ぎ仕て居る内にいつか十二時に成つたと見へて、お孃樣御飯でムい升」「ハイ」「房さん早く被入いよ」「只今」やつとの事で書き上げてお膳に向へど何を食べたのやらさつぱり解らずに只胃袋へ詰め込んでお茶の冷めるのさへまどろしく立ち上つた「マア一寸お待、アノ今朝吉住先生が被入つたそうだが……何か御用が出來たの」呑氣なお顏して母樣が「エヽ大變な事なのよ母樣、實はこれ〳〵云々」と大體をお話して、直に暗記に取り掛つた、がこれも先よしと思ふ時チーンと一時を、會へは二時迄に行けばいゝのだから後三十分丈練習を仕やう夫には兄樣のお書齋がよからうと二階へ登つてピタリと襖を閉てゝ、中央へテーブルを引き出した、て自分は隅の方からすつ〳〵と姿勢正敷、丁度小笠原流のお稽古でもする如に歩いてテーブルの前で一禮した、ら……言葉が詰つて了つた、是ではいかぬと又出直して今度はどうやら支へ乍も述べられた、てモ一度と同じ事を繰り返して「實に先生の御恩は……」「ウフ……」「オヤッ」と四邊見廻せば、マアいつの間に來て被在たのやら兄樣が後の襖を細目に開けて、「アラいやつ兄樣」と疊に突伏して了つた「アハヽヽヽサ、もつと遣れ僕が試驗仕てやらうハヽヽ何だ怒つて居るのか、馬鹿な奴だな……よし僕が敎へてやる、サこうだよく見てお居て」と肩聳やかして「諸君よ滿場の諸君」「ホヽヽ諸君だつてホヽヽ」「ウム諸君ジャア無いのかでは」と聲色替へて「御列席の方々」「ホヽヽ」「何を笑ふハヽヽヽ」「ホヽヽ」「房子々々」母樣がせわしく呼で「何を仕て居るの……

モ一時三十分過ぎましたよ早くお仕度成さい」『アラモウ三十分過ぎて？』喫驚して立ち上つた時、お玄關の方で「お待ち遠樣」と車夫の聲が……。

筆が輕く、苦なしに動く、事がらもおもしろい（評）

○鄙の樂み　岩代　泉花枝子

殘の雪の上、崖の緣、まだ水の冷たい澤の流、峰から麓、此所から彼所と跋涉して、馴れぬ山路に、早も可なりに勞れた。しかし、ふつくりと綿暖かさうなぜんまい蕨、淸香得ならず芳ばしい、白魚のやうな獨活、いつか籠に一ぱいになつて、心嬉しく自然足の運も輕く、薄暮烏の音に送られて、いそ〳〵と、歸ると、『おやまア！』『こんなに澤山！』『大層な手柄だこと。』『翌日は降らねば宜いが？』などゝ、籠を覗いての品評會。それをお母樣にお任せして、風呂場に駈込んで、まづ一浴。

小窓を開けると和かな月の光りが、湯の上に照り、キラキラと波に美しく碎けて肌をなぶる。肩のあたりにぢやれつく。『ぬるいかい？』『可い加減ですわ。』濛々立騰る蒸氣が馥郁とかをる。庭の紅梅が匂ふのだ。向の丘は霞んで、睡つたやうにうつとりして、寺の燈火がぼんやりと杉木立の間から見へる。源如節の聲がする。『美い聲だこと、作太兄さんか知ら？』思つて耳を澄ますと、歌は止めて、ハイ！ハイ！ドウ！の音がゆつたりと響く。『ぬるくないの？』『大層よいわ。』暫時すると、オホヽヽヽアハヽヽヽと、茶の間の方で華やかに笑ふ聲がする。氣も心も溶けるやうな心地に成た。『姉さん！背中洗つてやるか？』弟の聲だ。又どつと笑ふ。何だか擽つたいやうな心地がする。『今上る所だから可わ。』すいと立上がると、ふら〳〵と眩暈がする。拭ひ乍ら『今日は雜誌が來て居る筈だが？』と思ふ途端、亦弟の聲で『姉さん！作文が出て居た。』

うらやましい境外（評）

○悲しき日　鳥取市　上山千重子

屛風のかげから立ち昇る香の煙が、すうと窓をのがれて、しめやかに音も立てぬ春雨の中に消えて行く、かくて可愛い富美子の魂も、あの小さな體からはなれて、遠い〳〵幽かな處へ休息に行つて仕舞つたのだとおもふと、今更流れ行く煙の跡の、おぼろなのが恨めしく、なつかしく、はては捕へて懷にでも入れたいやうな氣持もして、うつゝなに椽に立つと、折柄軒端の紅梅の咲みだれたのが、一ひら地に落ちた。雨にぬれた鳥がちゝと軒に來て啼く、何となくあはれが深い。さりながら死んだと思ふ彼が、あの可愛い眼がぱつちりと開いて、姉ちやんと我を呼ぶことがありはしないかと……、こんな空想に我を忘れて佇んで居ると、不意

に後て御母樣のうるみ聲がする、「綾子、富美の死出の髮あげておやりよ。」と富美子のかみはいつても私が結ふのが例であつた、夢から醒めたやうに私は御母樣の後に從つて富美子の傍に坐ると、乳母やとお隣の內儀さんとが涙かた手に彼を抱きあげる、二櫛三くし、つげの小櫛にさら〳〵と黑髮を梳つて、いつものお下髮に結び、ばらの花一輪かざしてやる、アヽ物は言はねど昨日のまゝなる姿を見ては、如何して之がなき人と思はれやう、堪らないほど悲しくて「富美ちやん」と呼びさま、氷のやうな彼の冷めたい手を握つて見る、若し私の溫みが彼に通ふならば、彼は再び此世にかへるかもしれぬ。が何の感じもないにがつかりして、聲かぎり泣いて〳〵泣きつくした。兎角する內人の出入がはげしくなつて、四五の人が果實や草花を持て來るアヽ死出を裝ふた愛子を永久にかくす時も近づいたらしい、春雨が咽ぶやうに降つて居る。

死出の髮を上げることは誠に悲しいこと此文悲みは表にあらはれないが、內なる悲は却つてはげしい（評）

○お産

大阪市　渡邊みね

今日は陰氣な朝だと思ひながら、外へ出て見ると、煙草の粉の樣な、雨が降つてゐる、誰が出したのか、水道の水の音が、どう〳〵と、寂しさが倘增す、いやな日だと思ひながら栓をして顏を洗ひ、奥へくると、お母樣ゝ少しお腹が痛いからとて寢て居られる、私は重いのではないかしらと案じながら、流しもとで用事をして居ると、奥からお呼びになるので、いつて見ると何やらお産の氣がついたらしいから産婆さんを呼びにいつて呉れとのこと、聞いて私は何とはなしに、胸がどきつとした、此由をお父樣にも告げ、すぐ走つて出た、恐い樣な後ろから何かついてくる樣な心持になつて氣が氣でない。出來る前には男であれば好いがなどと思つてたが今はそんなことは何處へかいつて了つて只々重くない樣になどゝ心で祈つてゐる、やう〳〵お宅へ行くと御飯を上つて居られたが今行くと云はれたのを聞いて歸るとすぐお湯を沸した、小供が騷がしいので皆二階へ上た、とかくして居る內におぎやあと奥の方で聞えた、お祖母樣は奥から未だお出やないかえとお聞きになる、立つても居ても耐らなくなつたので又々草履はいて走つた道で遇つたのですぐ歸つて來る沸したお湯を盥へ入れて居ると來られた、早速洗つてもらつた赤子を、用意の衣服にてつゝみ寢させて漸々のことで片づいた、小供に騷いではならぬといふのに躍つて喜こぶ、お産は幸ひにも輕るかつたが出來たるは女の子だ、でも出來てみると又何だか新らしい血がわく樣で嬉しくつて耐らない、私は兄弟六人あるけれど、何人あつても好いものである、と私は例も思ふのである、折から雨は上つて、お日樣が赤々と障子に

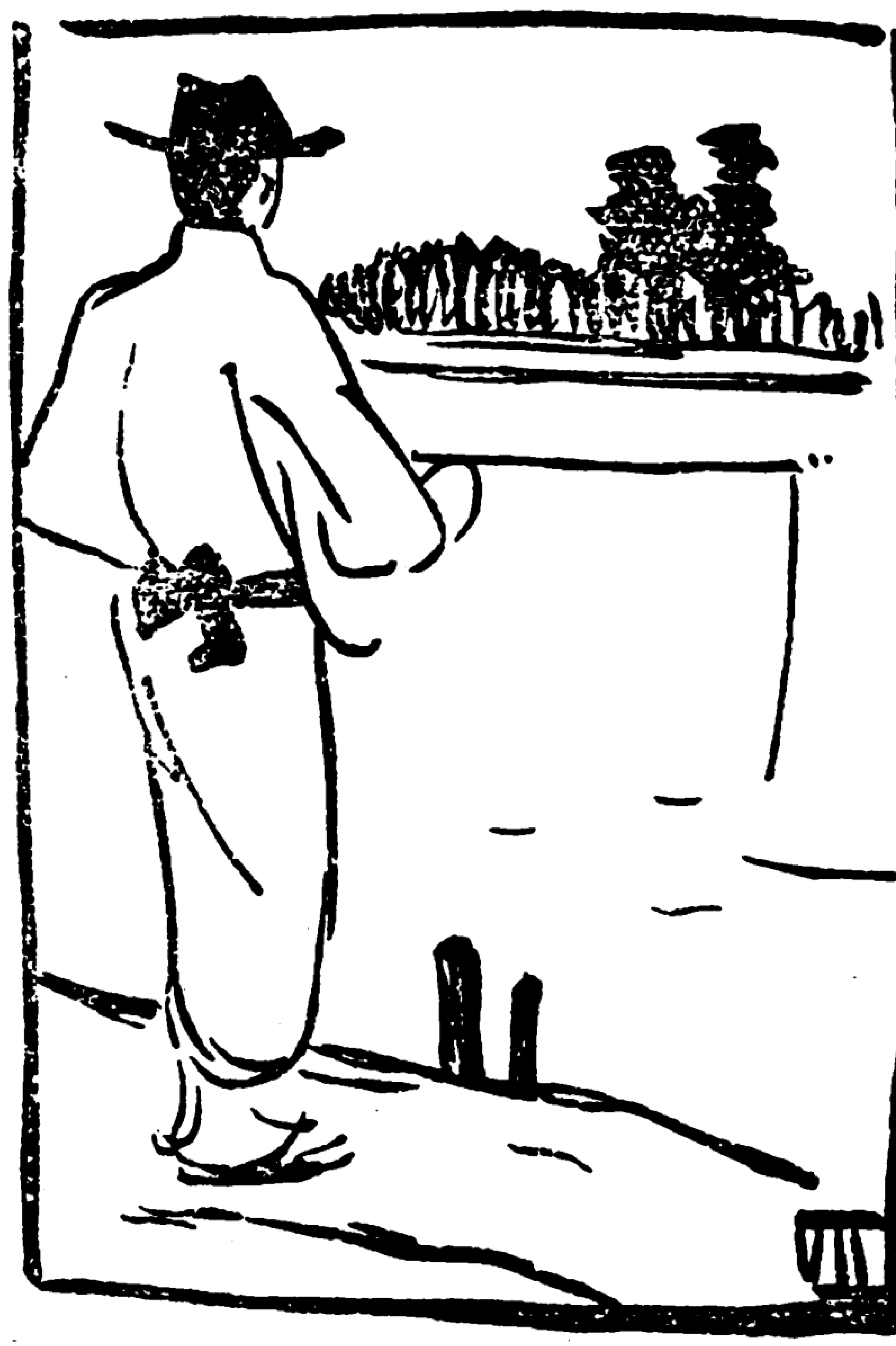
映り室内は活氣に滿ちてゐる。

好い姉さま（評）

○自習時間

大分縣　病葉

地理の先生が病氣で缺勤の爲受持時間の多くは自習となつた。今日の始が地理なので話の花を咲かせやうと喜こんで居たところが、國語の先生が來て何かお話をする事と給仕が云つて來た。いつも乍らよう氣のつく校長さんよと皆んな云ふ。しかし又面白いお話して下さるかもしれないと、心の中では待つて見たり來ないやうにと祈つて見たりして居た始業の鈴と共に先生は○○論と云ふ名さへむづかしい本を持つて來られた。此時間はこれを朗讀しやうと云ふのだ。つまらないきつと自習だと獨きめて、買ひたての夏目さんの虞美人艸重いのをがまんして書物の間に忍ばせて來たんだもの話も出來ず書物も讀めない事となつてしまつた。それでも初は神妙に聞いて居るがいつの間にか氣は外の方へうつゝてしまつた。教室は二階の殊に壁ぎはだから通りがよく見下される。がら／＼と頭痛がするやうな音をさせて腕車が來た。車上の人はと目をうつせば丸まげのくつきりと色白の奥樣が、お里歸りかだらう、嬉しさうに笑こぼるゝ口元を色の好いショールに包んで居る、未だ初々しい奥樣だ。足跡の少ない砂の上に轍の形を殘して車は去つた。どこから來たのかならずもののやうななりをした大男が、四人勝手なことを云ひ／＼去つてしまふしばらく人通はとだへる皆樣はどうなされてかと、ふり返つて見る誰れも／＼まぶたが重さうだどこからかぽとん／＼と機織るをさの音が夢の國へ皆樣の心を引いて行くやうにゆるう聞える。眠くなつたと思ふと足音がはげしくきこへる。ぱちつと目が開いた見るとどこへ通ふのか女工らしいやうなまづ子を負つてない子守風の女が四人北の方から來る、何やらさはがしく話して居るそして話の相間々に袂から何か出しては食べて居る。時間の經濟だらうが何と云つても女らしく



釣する人　茨城縣　小堀みち子

ないやつぱり素養のないものはだめだと思つた若しか私が男だつたら、否男でなくしても他日工場でも建つるやうなことがあつたらお仕事させる傍、女工たちに一寸でも行儀作法やいろ／＼なことの、極お手輕なところを敎へてやり、決してこんなみつともないざまはさせまいと、あられもない大きな／＼聲を考へ／＼して居た。終業の鈴はいつなつたやら、手帳閉づる音がたがたと机をなほす音に驚かされて、はつと思ふと先生は出て行かれた。皆さまがあゝつと云ふ聲と一しよに今までの空想は夢のやうに海嘯のやうにきえてしまつた。

存外、急所を衝いた書きぶり、初心の方にしては望みがある（評）

○去り行く里　播磨　桃の花

妾は今うら／＼と暖かい春の日をうけて、爛熳と咲いた花かげに、無量の感慨に沈んで居るのである。

あゝ明日からは此なつかしい土地――十幾年も住みなれた此故里と別れ行かねばならぬのである。

別れ！別れ！悲しいものである。ましてこれが言はゞ永劫の別れだもの。野に一面今を盛りと咲いて居る花、森や林や村てちぎれ／＼に流れ行く川、遠くに山を包んだ霞、皆無心に私を送るのだらうか。

咲いた花は散る。逝く水は一刻も止まらぬ。又山を包んだ春霞は夏になれば消え失せる。けれども／＼散つた花は又暖かい春が來れば、今と同じ境遇で美しく咲く、流るゝ水とても永久に流れてしまつたのではない。然るに一度此里を散つて行く私はもう再び今の境遇で歸つてくる事は出來ないのである！又歸つて來ようとも思はぬ。

丁度私の身をたとへて見やうなら、風のまに／＼南洋の故島を出て行く耶子の實の樣なものである。

しかし女と生れた身の一度は必らず遭遇すべき境遇だもの、私の終生事へる夫はほんとに奈何な人であらう、涙ある人であらうか――暖かい人であらうか。冷やかな人ではなからうか。此耶子の實が潮のまに／＼漂ようて、自分がもと住んだ樣な熱い島へついたら、また盛んに繁る事が出來やう。が、寒い／＼寒流に漂流した時には、此罪もない耶子の實は死んでしまふのである死んで、死んで、――精神(こゝろ)が死んでも、まだあはれな形骸は冷たい流れに幾十年も弄ばされねばならぬのである。

も少し經つたなら、つゝじも咲く、藤も咲くだらうおうアノ無邪氣な子守唄が戀しいなど、思ふと、熱い熱い泪が冷たい頬に流れて、後ろには眞闇な黄泉(よみ)の扉が開いてゝ自分は其中へひいて行かれるやう。

あゝ明日の吾身は闇である！

ハラ／＼と頭上の櫻は散つた。

○眼を病みて

筑前　椎野さつ子

「遲刻しては先生さんに叱られる、と、健さんは鞄を肩に、雨の降るのも厭氣なく勇ましく登校した。

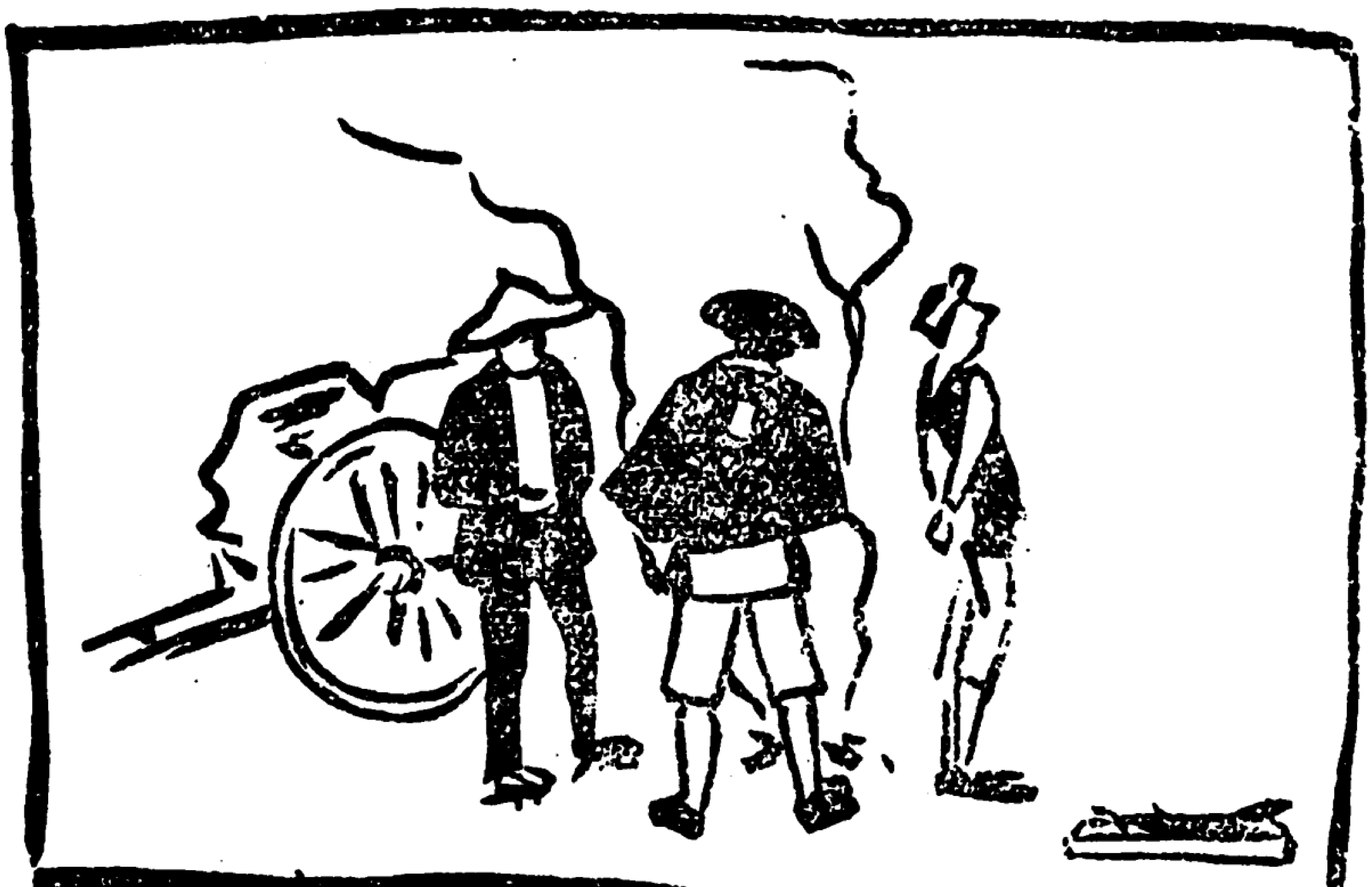
妾は、その後姿を何と無く樂しく嬉しう見送りて、朝飯後の片づけを終り、冷き藥瓶片手に提げ、東町の清澤眼科院に通ふ。

今朝も例の通り玄關を上りてすぐ左側、藥室の一隅なる前棚に「一より一〇、一一より二〇、……」と五列まで、きちんと順序よく重ねてある受付け番號札をとり、醫務室に持ち行きテーブルの上にかたの如く重ね置く。

他の係員は、まだ一人も見えぬが、院長さんは早や前面の椅子に腰下し、巻煙草の煙、室内に棚引かせ、音なく降りつゞく春雨をガラス越に眺めて居られる。

今、妾の御辭儀したのに氣付れて、後の棚から初診の日、くはしく調べられた容體病名など記しある診定書をとり出して、また外景色を眺めて居る。

たき火　京橋　神戸光子



妾は少し早かつたよと思ひつゝ、かたへの三號控室と記しある六疊の室に、無言のまゝ入つた。室には五六人の患者、炭少き大きな火鉢を中央にとり巻き、つれづれにいと静かに、診察の始まるのを待つて居る。

繃帶で目を抑へ俯向ける、幼きより病に苦しむ可憐の少女、何事か物語らんとしては、瞬きのみに忙しき婦人、痛みに泣く子を膝にのせ一心に賺す婆さん……など皆、早くからの御顏馴染で、今は其の泣く子の聲も、そを慰むる婆さんの聲も喧しからず、共に〳〵哀音深くして、靜寂の感一層身にしみ〳〵と迫りくる。

「病みては、人の病めると聞きて嬉し。」との言の葉、きゝたる時も、あれど、眼前に我れも同じき病に泣き苦しむ人々と遇ひ見ては、嬉しきなど愚、只々皆々の不幸の程、己が身も忘れて人知れず同情の涙に兩袖を潤すのみ。

雨はます〳〵細く霧の様に降りつゞき、隣の二號控室のストーブは、冬の名殘を止め、佗しげ

に人影も見えず悄然としてゐる。

折から醫務室の柱時計、チン、、、と五つの室内に響き渡つた、やがて診察施術が始まるのでせう、先刻より二人の看護婦は、それ〳〵準備にいそ〳〵と立ち働いて居る、藥室の方にても、外來患者の挨拶聲がさはがしく聞え出した。

◎蛍捕り

備後　中山八千代

「サア今夜はシッカリ捕れるぞ、うまい！」と云ふ、兄樣の聲に引き入れられて私も今夜の蛍捕りに、連れて行つて頂く事にした、明るい中から松明やら籠の用意をして、兄さんが手網で私が松明弟が籠といふ役割で、重い松明を振りながら前の川へ急ぐ、おや何だらういやに冷い者を踏んだと思つて、松明を差上て見ると栗が一株落ちて居る、川岸へ着くと兄さんと弟は柳の間からスッと川へ下りる、續いて下りようとしたが何だか恐しいので躊躇つてゐると、姉さん早く〳〵と弟が川の中程で呼んでゐる、思ひ切つて柳の枝につかまつて下ると、ツルリと辷つて倒れかけたのを漸く踏み止ると、手に持つた松明が搖れて火屑が水に落ちてヂュンヂュンと、云ふかと思ふと直ぐ暗い川下へ流れてしまつた、どうかすればぬかり込みそうな川の中を、妙な足取をしながら火を照して見ると、流れるわ〳〵澤山の蛍が横さまに這ひ乍ら流れて來る、兄さんは一生懸命とつては入れとつては入れ、弟は走り廻りながら「やあ兄さん此處だこゝだ、痛いつめつた兄さん早く〳〵いや逃げるわ」と叫ぶ、其聲に引附けられて走つて行くと、兄さんが「馬鹿！火を持つて行つて見えるか、持つて來ないか」と叱られる又あはてゝ引返す「おや兄さん此處にも居ますわ、あそこにも、あら、あちらへ廻らねば網へ入らないでせうに、健ちやん早くお捕へないやよ逃がすのだもの」と云ふと「いやだよ、姉さんだつて得捕へない癖に」と頬を、ふくらして籠の中から上つては出かける蛍を手で落してゐる、弟の顔を見てると吹き出し度くなる、暫は無我夢中漸く心づいて見ると松明がそこにもこゝにも、見えて騒いでる人聲が聞える、着物は袖やら身頃やら松明の火屑で焼けて穴がまあ澤山……。

お伽噺

巖谷小波先生選



▲規定　新しきお伽噺を創作すること、投書は總振假名つきにて二十四字詰八十行まで、用紙は前同斷、締切は毎月十五日、一人一章以上を許さず、懸賞は甲種の規定に據る。

三等

○蟇と鼠

金澤市野田寺町四茄子野利吉方　茄子野しげ

太郎は、猫が大嫌いでした、それで家中に惡がしこい鼠が澤山すんで、毎晩庖厨に這り込んで、食物をぬすみ道具をこはし、其損害はお話にも出來ない位でした。太郎も之れには大閉口して、止むを得ず、平生大きらいな猫だが、近所から一匹貰つてかひました。所が此猫奴大そう敏捷く、毎晩のように鼠をとりました。こんなあんばいですから、鼠共は大そう驚き恐れまして或日猫が來ないとき、家屋中の鼠どもがあつまりまして、猫の害をさける工夫を相談しましたが、別段よい考へも出ませんて、皆な主人の不人情を怨んだり、猫のひどひ仕打を罵りました、つまらなく歎き悲しむばかりでした。所へ一匹の年經つた蟇が床下の方から徐徐と出て來まして、鼠達一同へ挨拶しまして其場へ座りました、これを見た鼠どもは、異口同音に遽しく、「蟇君蟇君、君は何故此會場へ御出なさつた、私達の爲めに旨い御考へでもあるんですか」と問ふた、所が蟇は次の樣に答へました。

「否々僕だつて、別に良い工夫はないのみならず、僕は君等とは少しも緣引のある譯でもないが、斯うして同じ一軒の家に棲息で居る以上は、如何して君等が一家一族の皆ごろしになるのを、高見の見物が出來やう出過者との御憤怒はあるでせうが、一寸御話し致しませうほどに、暫時諸君の耳を貸し給へ、君達の一家一族が此頃慘禍に罹るのが澤山なのは、彼の恐しい猫奴が居るからだ、彼の猫奴が大敵だとの御思考からして一日も早く何か計略で其侵害をさける御相談中だといふことは、內々承つて居りますが、世間に此れ程間違つた相談は二ッとあるまいと思はれます、君等は猫猫といつて、猫ばかり怨むが全く君等の口の中に大敵が潜んで居るのだ、其を御氣がつかずに、他を怨むのは抑も間違のもとだ、で口の中の大敵と申上げたのは外でもない、即ち君等が皆持つて居る二ッの牙の事だ

君等は此牙で、什器を毀ち、衣服を嚙み、晝夜人家の害をすることは、今更僕が改めて言はずとも分明つて居る、全體此家の主人は、猫が大嫌いだ、から、若し君等が矢鱈無暗に此牙を用ふることがなければ、主人だつて如何して斯う不人情なことをして、快よく思ひませう。して見ると、君等が取り除くべき大敵は僕の考へては、其二ツの牙だと思ひます」

と語ると、一同は大いに感悟して、

「モシ〳〵、蟇君、君は平常暗いとこに隱居して居つて、如何して如何んな本を稽古して、そんな理屈をおぼえたのです」

と問ふと、蟇はすましたもの



で、

「否々僕だつて、未だ本などは讀まないけれども、素より君等の樣に目前の利益ばかり食つて、輕々しく跳ね廻るのは望ましくない、唯々平常愼む上にも愼み、動くべきときを見て動き、踏むべき地を察して踏み、食ふべき物を撰んで食ふばかりだ」

此談話を聞き終つて一同は猶尋ねたい事があつて、モ暫らくと袂を抑へたが、蟇は少しも頓着せずに、のそりのそりともとの床下へ這ひ込んでしまひました。

（評）文章がすら〳〵として居るのは敬服の外ありません教訓的お伽噺としては先づ成効した作です。

四等　○あざ

北海道旭川　名もなき小草

北海道の山の中に、雪ちやんと云ふ、優しい少女がございました。お雪は尋常一年生で、學課もよく出來ますが、可哀相な事には、左の頰に、大きな〳〵「アザ」が有るので、お友達の意地惡やは皆な除け者にして遊んで呉れません。或日の事、お雪は例の如くシホ〳〵と學校に行きますと、お墨と云ふ自分より年上の少女之は學問は出來ませんけれど、お金持の娘で、容貌もよく、其上美しい着物をきて居る物でございますから夫れを鼻に掛け、級の中で一番我儘をして居るのでございます。他の少女は意地惡と知つてゝも、美しい着物と、其勢とに恐れて、一緒に成つて雪ちやんをいじめて居ります。今も今とてお墨は雪ちやんを眼早く見付け、隣の小女に耳打を致しますと、やがて其子は又一人に耳打を致しまして、皆一緒を聲を揃えて「ヤアイ〳〵お雪のあーざアーおゝ恐い」と、くり返し〳〵申しまして、ドッと笑ひました。お雪は忍えてはゐる物の、子供心に顏を赤めて、涙を眼に一パイためて居ります。大抵の子なら、こんな樣子を見ては氣の毒とやめて仕舞も致しませうが、お墨はかへつて面白い事に思ひ、「雪ちやん、お前の着物は大變汚いのねえ、私なんかは、お藏の中にドッサリしまつて有る事よ」と、さも意地惡相に「イゝ〳〵」を致します。最前から悲しさをヂッと堪えて居りましたが、今は一時に胸にこみ擧げてワッと云つて泣き出しました。

家に歸ッて母樣に「もう私學校に行くのはいや、是からはお山に薪を拾ひに出てもよくッてよ、學校だけは何卒勘忍して頂戴な」と泣いてお願ひ致しました。母樣も、いとしいと思召しましたが、お心をはげましなされて「是れ雪や、お前はきゝわけの無い子ですねえ母樣はこんなに苦勞をして、お前を學校にやつてるのも皆なお前をえらい人にしてあげ度いばつかり、例へ何程他の人が意地めなされても、神樣は惡い者にはいつか罰をお與へに成りますよ、おとなしくさへして居たら、きつと善事が來る物です、わかりましたか?」と、優しい中にもきつぱり申されますと、雪ちやんは、むックり起て「そんなら母樣、私が心棒して學校に參りますと『あざ』も取れるの?」と、無邪氣に尋ねました。吁、母樣が其時の御心中は、まあ、どんなでございましたろう「吁、そうですよ、おとなしく學校にさへ行

けば、きつと全快ますからねえ」と、云ひ聞せ遊ばしましたから、此度は、イソ〱と學校に參りました。跡を見送つて母樣は、可哀相にとソッとお泣きに成りましたが、否々、こう力を落す物でもない、是は神樣のお力をお借りするより仕方はないと、ソッとお針を片寄せて、寒い中から鎭守樣に詣られて、毎日一心にお祈りをなさいました。丁度今日で三七廿一日めすんだのに雪ちやんの「あざ」はもとのまゝで全快りません。夫れでも尙お祈りを致してをられました。

月日のたつのは早い物で、其年も暮れ、雪ちやんは三年生となりました。丁度今日は寒い日で、他の子供は炬燵にても入りこんで、母樣に甘えてゞも居よう物を悧發い雪ちやんは、一人の母樣がお風をめしたと云ふので、隣村までお藥を買ひに參りまして、今歸りでございます。丁度鎭守樣の前まで來掛りますと、忽に空模樣が變つて參りまして、ピユーッと吹きすさむ雪は丸で巴の樣に、トヾ松もエゾ松も寒相にウン〱うなつてふるえて居ります。松でさへ此通り、如何して少女の堪える事が出來ませうか、遂々雪中にこゞえて終ひました。暫く立ちますと、四方に音樂が聞えて、優しい美しい聲で、お雪〱と呼ぶ音が致します。吃驚して顏を擧げて見ますと、生れてから未だ一度も見た事の無い夫は〱奇麗なお姬樣が、眞白なお着物をお着し遊ばして丈なす黑髮を美しい六花で飾ッてお出になります。お雪はボーゼンとして見とれて居ますと、ニッコり遊ばして、「是れお雪、お前は私を誰だと思ふかへ、私は此村を司どり遊ばす神の使、名は雪姬と稱ふぞや、そなたは何事も堪忍強く、其上親に孝行の心に愛で、今日こそお前の『アザ』を取てあげませう。是處より西方に五里行くと、白髮の翁と云ふが有るから、其處へ行ッて紅の雪輪と白の雪輪とをもらひ、翁から敎ッた歌を三ベン唱へて顏をなでよ」と仰しやるかと思ふと搔消す樣に御影は見えずなりました。ふと夢から覺めて見ますと、今迄の雪は何處へやら身内も暖かになりましたから、急いで歸つて母樣に申上ますと、其は日頃信ずる神樣のおつげと大喜びで、早速白髮の翁を尋ねに雪をやりました。お雪はまるで身に羽でも生た樣に、飛が如く道がはか取ッて、遂々翁を尋ね、紅白の雪輪を戴き、歌を唱へて顏をなでました處、見る見る内に、さしもの大アザ、影もなく見ちがへる計り美しい娘となりました。

さて意地の惡いお墨はどうでございませうか、これは

又不思議な事には、お雪が全快りました時から、左の頬に大きな〳〵アザが出ましたとサ、めで度し〳〵。

（評）教訓的お伽噺としては難のない作で御座いませう。

五等 ○愛姫

遠江小笠郡川野村丹野　山本ます子

或る所の王様に南正と云ふ人がありました其の子に三人の子供があつて兄は蟻丸と申され誠に身體が小さくて中は櫻丸と申し日に一ッ宛のさくらんぼうが無けねば生活して居られませんてした末は可愛らしい女子で愛姫と云ひました。

さて愛姫の生れました時は丁度父の南正王は病氣であッて快心殿と云ふを館になッて其處に居りましたが愛姫が生れたと云ふ報知を得て大に喜び直行ッて見ようと云ふと臣等が止めて、

「王の病氣の快ねば決して行ッてはいけません行くと愛姫は此世には居りませんから」

と諌ました。

けれ共南正は自分の丹誠でどんなに可い兒が生れたか見度て見度てたまりません、が、臣等が大に諌めるから表には、

「誠に汝臣が朕等父子を思ふ忠言なりさらば‥‥‥」

と復床に附きました。

けれ共よせと云へば見度くなるは人情、夜に入ッて私に床を出で抜足指足忍足、家臣に見出されては大變と奥間に入り仕度をしました亦もや床に近づき秋水をとりて何やら手をパット打つとハタ〳〵〳〵と眞白き鳩が下りて來ました南正は徐ろに其に乗りますと今迄小さくあッた鳩が見る間に一丈餘りの大鳩となり南正を乗せてヅート空へあがりました。

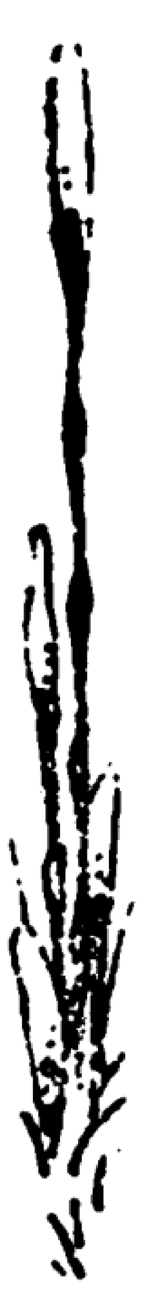
其はさておき愛姫の方では蝶よ花よ愛姫と手に手へ乗



嗚哭　駿河　溪園女

せて樂しんで居ります、が、十一時頃より非常に泣き出しさては顔色が替り羽が生へ出しました。
さあ大變今まで樂しんで居つた母上も御側臣も皆んな上へ下へと驚くまい事か一人娘の此の有様……遂には愛姫は姿も憎き天狗となりましたそして目を怒し一躍バツト飛びあがり白雲の内に消へました。
母の歎き止むる事が出來ず物の當り次第に飛び掛り
「愛姫はどこだよこせ愛姫やあ〳〵返せ」
と狂ひ廻りました忠臣は悟してやり度いとギク〳〵して居るばかりで何とも致方が有りません。
先に鳩に乘つた南正は「ソラ速げ近いぞ速げとダヾモダして居ります鳩も一生懸命走りますよと漸く一里ばかり來たかと思ふ頃ザア〳〵ヒユーーと風を切つて眞一文字に此方に向ッてやッて來るものが有ります、そも何でありますか。
夜の事故能は了解らないが弦月の光りに透して見ると豈圖らんや恐ろしき大天狗が嵐を起して來るのでした六丁五町と近くに隨ひ前に青光を立て其の中より、
「コラ父南正か何是忠臣の言を容れざるや愛姫も是の如き姿になりしぞや改心して歸れ〳〵。
と太聲に云ふから南正大に驚きゾク〳〵と股栗へ、
「愛姫か吾は姑息の……」
「父改心せしか」
「今に至て豁然……」
と云ふかと思ふと今迄恐ろしき姿の天狗、フハリ姿消へ後には愛姫ニコ〳〵と笑ひながら、
「アラ父ちやん」と下りて來ました南正夢かとばかり喜び、
「愛姫か」と初めて吾に歸るといつか故郷の御殿が見へてワイ〳〵愛姫と云ふ聲は聞へました。
目たく内にスート御殿の南縁に着ました御殿の中ではそら愛姫君が南正王と來ましたまあ天はと喜ぶ事が限りありません愛姫は母ちやん皆さんと嬉げに元の美しいお姫様となりました南正は又パット手を拍と白鳩はスート何處へか消へましたそれからは南正も心を一洗して何事もなく國が安穩に治まりましたとさ。
めでたし〳〵。

(評)佛説からでも出たのでせうか、なか〳〵面白くよみました併し言葉が熟練てないのと文字が亂暴なのは御注意を乞ふておきませう。



新派和歌

與謝野晶子先生選



▲規定　新興の短詩と稱せらるゝ新派の和歌を募る、原稿には新派和歌と明記し、半紙に認め一人一首限り、原稿には本名を記入すること、締切は前同斷、懸賞品は乙種に據る。

二等

幾萬天の星てるごとくにも優にひらきぬ山梨の花

下總國成田町南日吉倉　三橋芳枝

三等

亡き父の御魂すぐると思はれて夕野の霧をすかし見しかな

鳥取縣　桑本きさ子

四等

少女とは木草の根かや土くれの中に日を見ず寂しさに居る

鹿兒島市加治屋町、一六二　山下敏枝

秀逸

○いと小さきさればみ給ふ神の名を木魂と云ふと母の教へぬ

上總　四之宮淩子

○やまず人を思へば野なる鳩の來てほろ〱なきぬかなしき聲に

岩代　甚野蝶子

○春の雲そこはかとなくわが魂のさまよふかたち中空にうく

弘前　佐野てる子

○山ざとの伯母がりとへばからたちの垣ねに啼きぬ鶯の聲

伊勢　杉田たか子

○小鼠のある夜小琴をふむに似て調はなさねうたに興わく

上總　鈴木梅子

○夏木立若き女の黒髪の香思ひぬさすらひ人は

大坂　今西こゆき

○なつかしき海のあなたをすかし見ぬ東雲近き紫の靄

後志　橋本千草子

○山黑く水紫の朧夜にほのかに琴をひきし家ゆゑ

舞鶴　邦子

○眞夏ふと火のけしの花朝あけの戶に咲くと見て人戀ひそめぬ

山口縣　松岡きさ

○しら珠はいま火の渦に舞ひ入るとほゝゑむ人をうらめしと見き

佐渡　浪子

○奈良の代の三十一文字を優にかき君はたまひぬそのはじめの日

女子師範　きよ子

○春の日や加茂の祭を見るやうに我琴の音に集ひし人よ

伊豫　賤子

○月姬の御座のもとに百合咲くと空をおもひぬ夕ぐれの星

鹿兒島　山崎秀子

○朝ぼらけ靑き柳の露ちりぬ川ぞひみちを君とあゆめば

美並　鶴子

○　安房　浪子

人の身に宜しき風とよき水と花と鳥ありよき春の節

○　岐阜縣　日野歌子

鶯の啼く聲かるうこだまして青葉すゞしき深山路に入る

○　齋藤元子

ゆく春の窓に眠りて雨の音を佐保姬あゆむ音ときゝぬ

○　喜惠子

椿落つるあたゝかき晝何事か想はむとして夢路に入りぬ

○　信濃　吉川たみ子

春霞大き涅槃に入るごとくうれしさおぼえ君とゆく野路

○　千葉縣　西村いつむ子

春の朝君と戸により鶯の梅の立枝に諧ふ聲きく

○　播磨　桃の花

稲妻の雲より雲に通ふごと君にさゝげぬ見えぬおもひを

○　越後　眞柄廣子

嵐きて散りし櫻や池の波白き花びらたゞよはせ居る

○　尾張　櫻井峰子

此夕あやしくおつる涙かな昨日のことはわすれたる身に

○　上毛　元子

美しや昨夜の嵐の蕾きぬる落花の模樣うかびぬ池に

○　茨城縣　小松崎なを子

戀もすて世をもすてにし戀人の草の庵めぐる蔓ぐさの花

○　信濃　伊藤利子

あゝ古沼われとおち行く運命の悲しき道のはて思ふかな

○　南豊　藤の家瑠璃子

泉水に櫻うつりていろくずも花の梢をくゞりて遊ぶ

○　青森縣　川村美惠子

さら〳〵と文讀む窓におとづれぬ衣摺れのごと夜半の春さめ

○　大坂　由井不二子

春雨の小窓音なしある夕君とかたりしわれやみてある

○　神戸市　加藤富美子

瑠璃瑪瑙黃金の鈴のなかに秘めうちふるごとき初夏風よ

○　上總　山口興志子

なげくときいともかなしく家をめぐりしめ〳〵ふりぬ春の夜の雨

○　豊後　松岡こうめ

朝の日の青葉若葉にかゞやきて夏の使女野をはするかな

○　名古屋　吉田なみ子

今しづむ夕日は丘の君が家のしら桃の花ほのかにそめぬ

○　讃岐　すみ子

夏の月稲田を過ぎて垣越えて青き簾に光を投げぬ

○　盛岡　四戸節子

むれに湧く若き思を如何にしてしづめむとしも涙すわれは

○　下總　みだれ子

現身の常とは知れどなつかしき君とぞ別る春の夕に

○　香川縣　橋本霞子

遠近にたゞよふ船のかずあまた見えかくれして夕日沈みぬ

○　岐阜縣　村井春子

とり〳〵にいとうつくしき百人の少女に似たり五月の花は

○　千葉縣　いわ子

歌へどもきく人あらぬ夜の室の我が聲を吸ふ灯ぞとさびしき

○　岐阜縣　村井かれ

架の藤によりたる夢さめて人をおもへば蜀魄啼く

○　札幌　宮増喜艮久子

はな園の桃紅に咲初めて朝日輝くわが家のさま

○　千葉縣　秀月女

窓によりて思ひ亂るゝ此の夕何のしるしぞ星西に飛ぶ

○　耶馬溪　勝子

春ながらまだはだ寒き如月の月は宿りぬ君まつ川邊
○　長崎　松尾れき

いと清き川の流れにこのごろのうきわがおもひ流さしめたろ
○　大和　我澤素枝

吾がゆくて幸多かれと祈るかなやみます母の心おもへば
○　紅波

波の音は人を戀ひれと聲たてゝ少女にかたるごとくおもひぬ
○　丹後　福丸浪子

我胸の若き血潮の色褪せて冬の世界に徜徉ふ心地
○　静岡縣　朗子女

さくらちりしづ心なき夕さへ山紫に星あらはれぬ
○　京都　岸村秀子

やさしさは少女に似たりうつむきてほゝ笑む如き谷の白百合
○　越後　哲子

南國の薫ろ霧ひく森かげや頬うつ額うつ紅燃ゆる花
○　神戸　雅子

淋しさは大海原を只一羽海鳥飛ぶに似て悲しけれ
○　山城　梅の子

強き事いひて別れしふるさとの人さへ戀し雨降ろ夕
○　蛇田村　駒澤きく

うららけき春日に野邊の小草つむふりわけがみの君を見しより
○　山城　村田まさ子

梅の花庭のみ雪にうもるとも香をたづれ折らましものを
○　遠江　原木松翠女

薗ながくのびにし里の小川にて若鮎釣らん友と一日は
○　岩代　香川榮女

[illegible]の[illegible]とり　大坂　今西こゆき



山ざくら花やいかにとおもひれの枕しづけき夜半の春雨
○　下野　梅澤哲子

寃の神をことしく射て悲しめる世の人濟ふ力ほりすれ
○　三河　富美子

夏の日や七色の虹薄らぎて雲の峰こそうかびいでけれ
○　豊後　菅原芳子

わが心晴れし日を見ず雷のあまた集まり雨雲をよぶ
○　松山市　勝山みどり

春雨の柒の花道を行く人のすがたけぶりてくれゆく空よ
○　下野　瀧澤睦子

流れこし花の一片手にすくひ何ものおもふ里の少女は
○　丹後　衣子

にび色の行く雲低しかゝる日にうれひの人はぬかふせてある
○　大坂　山内渓子

朝の鐘霧の中よりひびき來ぬなしの花ちる野に吾れ立てば
○　東京　野澤光子

晴れ渡る春の朝の山櫻堤三里は白雲なびく
○　石見　ちどり子

人戀し亡き君戀しなにゆゑのことはりもなきよそ人なれど
○　伊豆　桃郁女

月を見て君何事を思うらむわれはかなしき後世おもふただ
○　上毛　伏島納尾

夢の如幻の如み姿の我眼に入りぬ櫻ちるとき
○　羽前　白烏雪枝

美しきとき洗ひ髮背に垂らし春の日に立つ君が姿よ

短篇小說

小栗風葉先生選



▲規定　純潔清新なる短篇小說を望む、凡て振假名つき二十四字詰八十行以内とす、用紙は半紙又は罫紙を用ゐ一人一篇を限りとす、締切は每月十五日、懸賞品は甲種規定に據る。

三等

○歸國

本所區外手町六十一番地　田中久子

一

「どうも彼からは薩張り寂れて了つてな」と客はポンと煙管を擲いた。額のツルリと禿げ上つた男である。

吸殼をふいと灰吹きへ落してから「さうでさ、もう二月にもなるかな、銀行の向側へ矢つ張りお店と」と鳥渡顎を突き出して「同じ商を初めた者があるんです、今ぢやあどうも强勢な繁盛でな」「繁盛……？」お光は持つてた急須を下へ置いた。喫驚した如に大きな目をむいて「口惜しいね」と自烈たさうに云ふ。

亭主の甚三は袷の膝をきちんと揃へて片手に疎らな頰髯をつまみ乍ら何も云はないで居る、「さうですかねえ」お光は又感心したやうに云つて「貴方さ」と膝を搖つて口惜しさうな顏をしてみせた。「何ね甚さんは餘りお人好すぎるからね」と客は愛想らしく笑つてみせる。「さうなんですよ夫に貴方、もう一月も辛棒したら又どうにかならうからつて私が甚麽に止めたか知れないんですよね、同じ店がさう繁盛するんならね貴方、又此方にも夫だけ未練が起りますあね」「さう、さう」と客は頷いて甚三の方を見てゐる「本當に意氣地がないから」お光が白い齒を合せて甚三を見た目がハタと逢ふ、矢張りお光は强情に見詰めた儘てゐると甚三の方で直ぐとそらして了ふ「既いゝ加減にしなさい」と小聲で云つて無理らしい咳拂ひをした、そして「龜さんは御酒を上るね」と分り切つた事を云つて「仕度でもして來なさい」とお光に云ふ。お光は返事もせずに立つて「口惜しいね」と云ひ〳〵厭な顏して立つて行つた。甚三は八王子で名高い老舗の織物問屋の主人だつたが人はさう見えない、と云ふ。破布でも着て花の稽古にでも歩きさうな町の若い者が噂をしてゐた。人のいゝ男で例も女房のお光には負けてゐる位な方で東京へ來てからはなほ更の事。朝から晩まで、外廻りの掃除、庭の草むしり等に暮してゐるのをがみ〳〵云

はれる。苦しいには違ひないがさて會社へ出る、銀行へ通ふ、といふ事も厭だ、商買するにも資本が入ると云ふので到々半年許りを無駄に過して店を賣つて來た金も段々に減つて行くといふ心細い今の最中である。臺所でガチャンと何か毀れる音がした、「彼だもの」と甚三はわざとらしい笑をして客の前へ莨盆を押した。梧桐の葉ががさ〳〵と鳴つて落ちる。

二

亀さんが八王子へ歸つてから「來るなら來い、先の店は未だ空いてる」と意味を三日泊つた禮手紙に書添へて寄越した。お光の心は益々燃えるやうに苛々する



「其麼東京者なんぞに伊勢甚の名を蹴ちらかされるが口惜しかないかね」と朝に晩に迫め立てる、「何故彼時もう一月も辛棒しなかつたらう、口惜しいぢやないかねえ」と終には狂氣したやうに怒鳴りつけて三人の子供達迄がみ〳〵と叱り付ける、「ちと靜かにおし」となだめても駄目だ、或日「夫ぢやお汝さんどうか收入の道でもつけて呉れないぢやねえ、子供は多勢だし、もう家財も賣るやうな物はなし持つて來た金だつてもう無く成つて了ふ許りだものねえ」と例のお光に似ない語で櫛卷の頭を簪の先で搔きながら云つた。甚三の胸にはまだ小學に通つてる

る小さな子供達、と四十を越えた妻の淋しい姿がありありと映つて其晩は堪らない苦しさにまんぢりともしなかつた。そして翌る晩も〳〵其通りで時々はお光の寢言も聞く。店の客へ挨拶する言葉などを聞くと八王子の老舗の女房だつた其時の事も思ひ出して堪らなくなる、そして は其夜もとう〳〵寢ずに明ける、といふ風で夫が又毎晩のやうに續いた。

一週間許りしての或る朝、俄の發議で持つて來たまゝの行李支那鞄、夫に簞笥が一棹と皆荷造りを初めた。子供は學校を休み、お光は實家へ金策に行く。

翌朝はどんよりした陰氣な日だつた。飯田町へ七時について夫から再び八王子へと汽車に搖られた。一度敗れた身がもう我旗の立つてゐるでもない陣屋へ他人の盛んな旗風の下をくゞつて戻る、誰も自分を迎へて呉れる者もない淋しさを思つて、何日か土藏の建ましの最中、東京から歸つて往つた時の事等を比べて心細い念に亂れてゐた。

お光は甚三が靑い〳〵顏をして目を睡り肘を行李についたまゝ汽車と一所に搖れてゐるのを見て歯がゆくてならないといふ顏をしていつまでも〳〵見詰めてゐるそして時々面白がつて騷いでゐる子供達をがみ〳〵と叱りつけてゐた。

初秋の風が曇つた勢のない空氣をぬけてすうつと袷の肌に冷く當る。甚三の目にはよくあつた今日の如な暗い日の横山通りの光景がまざ〳〵と浮んでくる、そして漸々と身も衰へ氣力もなく成つて了つた自分が、之から彼軒並びの大きな店の間へは入つて一度倒された店を果して挽回出來やうか、といふ不安の念がむらむら襲ふて來た。するともう〳〵人にも顏を逢はしたくないといふ弱い氣も出て來て此まゝ東京へ戻つて行つて了ひたい氣にもなつた。

お光は今、ふいと窓の外に顏を出して、今だに彼麽大きな店へははいり手もない、といふ此間の龜さんの話を思ひ出して是からは又自分達が行つて昔のまゝの風を吹かしてやらう、そして東京から來た奴なんぞは追ひ出してくれる、なぞと考へ乍ら心の中でほゝ笑むでゐた。

汽車は徐々に八王子へと近づいて行く。

（評）此の作者はすぐれた觀察と技倆を有して居る。每月の投書する小說に、少しもそつがない。今月のは殊に際立つてすぐれた作品である。お人好しの主人、勝氣な主婦も好く描けて居る。他人の店の繁昌を羨んで「口惜しい」と云ひ、主人に對してブリ

ブリする所に、主婦の氣象が偲ばれる。殊に、東京を立つて汽車の中での、二人の心持ちが面白い。二人の氣性を對照してハッキリと分る。好い作だ。

四等　○憧憬

靜岡縣　わかば女

「阿父樣如何して呉れます」冴へ〱とした凉しい聲はてな矢絣の羽織を着て艶々しい毛を前髪高う結ふて蝶々形の紅い緞を挿した頗るハイカラの義江は黒球勝の愛らしい眼を瞪つて父を見つめた。

「疇昔の己だと其れは又お前の云ふ事も許容いてやれぬことも無いけれ共、今の家の有樣、財産は無し女房も死んで仕舞つて若しお前が出家なると實に困るからのう」年頃は五十八九、温和相な其丈世間の荒浪に動もすれば乘られそうな、分別は有つても思切つた決斷力の無い一口に云つたなら先煮切れない佛性らしい人物、火鉢の前に胡座を組んで手焙に片肱突いて斯ふ云ふたのは義江の實父善八である。

「阿父樣は克疇昔々々と仰有るけれども何も昔でないつて氣一つで如何にもなるんじやありませんか妾が遊學する位……」と義江は稍不平らしい言振り。

善八は置洋燈の淡い光を見つめ乍ら、

「さうお前は親の心が輕々しく見てをるから不可ない現今の己には最早其麽餘裕が無いのだから……」

「と云へば其れ迄ですが其處が阿父樣の氣一つなのですから……」義江は一寸膝を捻り語尾を繼いて、

「兎に角阿父樣將來を考へて見なさい學問の世でしよう學問の無いものは人に排斥せられて徒らなく終命るのですよ、妾が東京へ遊學つたとて僅か三四年の間ですもの！而して卒業さへすれば立派な婦人でさ……其で名譽の月桂冠を頭上に戴いて錦を着飾つて故郷へ歸つて來るのですさすれば家門の譽勿論阿父樣の名譽じやありませんか……」

醉心地で流暢な辯を弄し才女らしい眸を強く父の顏に向けて注いだ面は美しいものだつた。

「將來は學問の世だからつて女子は左程學問は入用じやないよ己は其名譽とやらも何にもいらない早くお前にお婿でも貰つて安樂に世を送るのが一番己の希ふところだ望むところだ、學問に箔を付て安い女が高價くなつたつて其れが己に何だらう、お前も今年十八少しは親の身にもなつて御覽、夫れも全然何にも知らないのなら未だしもの事高等女學校迄卒業したのではないか女子は最早お前位やれば充分だ、之からは家に居て

裁縫でも勉强して……」
「あら彼麼不明ない事を！私が何が出來ます地方の高等學校を卒業した位で、二十世紀の今日ですよ之位の學問が何の役に立ちませう社會は一秒一秒毎に進歩して行くのですもの、」表情の强い義江の瞳子は眞珠の樣に輝いて憧憬の烈しい魂は彼女の語調を引緊るのだ、
「己は此の節の事は何にも知らないから理屈では適はんが聞けば同然お前の樣な年頃の娘が東京へ遊學に出て墮落とやらをして遂には妙な病氣をしてかして華嚴の瀧へ身を投げたりする女達も澤山あるそうだ、萬一して間違つたら大切な一生の取返しが付あしない國三寸は闇だ、大切な娘一人を手離して先の知れない學問……浮雲ない話しだ　己は到底やる事はならんよ、お前が學問をしたとて己を安樂に養ふのは覺束ない話だ、己は如何してもやる事は出來ない、喃義江其れよりも親の身を思ふて好い婿の相談でも……」
「エッ」意外の言葉に義江は眼を瞠つたが亦默念として頭垂れて、自から問ひつ答へつ何かの影を追ひ求むるので父の其れからの言葉は少しも耳に入らなかつたらしい。

* * * * * *

伊豆の下田を出帆した汽船太陽丸の船室、夜の更け行くと共に靜かとなつて騷々しかつた船客の聲も今は鼾と變つた、此の森閑たる中に不斷着のまゝに手荷物とて無く瞳子を上げて當所なく四邊を視張つて高い憧れの影に醉ふのは義江である。
轟々と浪を切つて進む音も我が榮ある希望の囁きか樂しい運命の響きではないかしらんと胸の血の騷がしさふと一人殘した物悲しい父の事も思ひ出さないではなかつたが、胸の裡には薔薇が包む薰の樣に我と我が醉ふ嬉しい思ひ、溢れては漲ぎつては五彩の虹と身を取繞いて其處に書かれる、……苦學して後の才媛の名——聲——それからそれと美しい戀も書いた榮達の夢も現乍ら見て居た……。

（評）生かぢりの學問して、都會の女學生々活に憧れ、遂には一人の父を捨てゝまで出奔すると云ふ、今の時代に有勝ちな、若い女が些つと描けて居る。船に乘つてからの心持ちも自然だ。が、篇中父親との會話は古い。

五等　○友

陸奥紅ゆり

ブランコよテニスよと、遊ぶ友を他に覓先月三年生になつた、芳子と秋子とは、校園の片隅に坐つて、しみ

じみと話して居る。暖い眞晝の光は頭から照りつけて、二人の膝の邊ぬぎ揃へた草履の邊からも、ちらくかげろふが立つて居る、秋子は編みさしの栞を膝に置いて、今菫の一莖を摘まうとして居る、芳子のほんのり紅をさした頰の邊をつくく見て、（芳子さん、貴女胸は苦しかなくて？）芳子は細面の優しい顏をあげて、（少と計り）（そう、咳は？）（出るわ）（そう、あらつ醫者見たい子！ホ丶丶）（ホ丶丶）秋子は笑ひながらもぢつと友の頰をながめた、あ丶！お可哀相に、故何しよう……芳子さんも肺が惡いんぢやないだらうか？でも私と同じく胸が痛んで咳が出る、きつとだわ！お可哀相に、お母樣は肺を病んで竟先度お死なりなすつたので木下さんや林さんなんか、あんなに芳子さんと仲が善かつた癖に、お母樣が肺だつたからうつるといけないと、何も知らない芳子さんとふつ丶り遊ばなくなつた、不人情なあんまりな！私も肺が惡いんだが、未だ何方も知らないからい丶樣なもの丶、今に

やつれし人　　伊豫芳枝



知れたら芳子さん以上嫌がられる事だらうあ丶！と思ふと、日頃の氣丈に似ず、ホロリと一滴熱い涙が膝に落ちて、海老茶の袴に汚點を出した、ハッと氣がついて、芳子を見ると、友が如何事を考へて居るか知らずに、餘念なく菫の花束をこしらへて居る、（まあ美麗子！）そつと涙を拂つて斯樣云ふと、につこり笑顏を見せて、「貴女に上げるの、御氣に入つて？）（え、い丶わ子！私も何か上げますわ）編みさしの紅色絹糸を取り上げて、白い指にからんでさつくと針を動すと、（秋子さん、貴女毎日美麗なの編んでるわ子！私も明日から、糸持て來ますから教へて頂戴）あ丶！何も知らない芳子さんは、又しても私を泣かせる、それは實は芳子さんに上げる積りで編んでるのに……一昨日故郷へ手紙を出したから、明日はもう返事がくるそうしたらもう私は、歸らなけれやならない、それで若しくこの儘、病氣が重くなつて死ぬかも知れないから、せめて紀念にもと編んで

るのだに……(編まなくとも、私皆貴女に差上げてよ、芳子さん！若しか私宅に歸つて、此地へ來られなくなつても、貴女私を忘れて下さらないでしよう？)芳子は眼を丸くして、(まあ！歸るつて)(いゝえ、若しか)(私驚いたわ！それやたとへ、お歸りになつても私は忘れないわ、一生忘れないわ！小學校からの仲善の林さんや木下さんが見向いても呉れないのに、貴女許りは妹の樣に可愛がつて下さるんですもの、私忘れろつて云つても忘れないわ！)(芳子さん有難う、私もそのお言葉一生忘れないわ！)堪へ切れずホロ〱と泣く、芳子も美くしい眼からハラ〱と手に持つた花束に熱い露をそゝぐのであつた。

＊　＊　＊　＊　＊

今し、人々に押され〱て、漸々汽車に乘つた秋子、窓から半身出して、窓下に居る芳子と見合してにつこりした、七分停車と告げてから早や三分ばかり過ぎて、後四五分で別れねばならぬのだ、お辨當におすしビール〱、新聞々々又騷々しく初まつた。芳子はぴつたり窓によつて、(秋子さんお體を大事にして早く癒つて、そして成る丈早く來て下さいな、てないと私、淋しくて……)(有難うよ、貴女もお體をお大切にネ！お手紙屹度待つて居ますわ)(え、貴女もどうぞネ！秋子さん早く癒つて下さいな、彼地は海邊ですから成り丈よい空氣を吸つて早くよくなつてネ！)まあお可哀相に、私が今行つたなら、芳子さんは……初めて仲善になつた時の樣に、あの、運動場の窓によつて、皆の面白可笑く遊ぶのを、無言つて淋し相に見て居るだらう、(芳子さん淋しくとも、堪へて下さいよ、私は必ず快くなつて來ますから、これにこりて貴女お體をネ！)後は云ひ堪へず、頰の活々しく紅いのがさて氣懸りな、(私なんか如何でもいゝわ！秋子さんお名殘り惜しいわ、もう四時三十五分よ)淚もろい芳子はもう泣いて居る、するとピーと發車の汽笛！(あつ芳子さん)(秋子さん萬望お大切に……左樣なら)(左樣なら…………)ゴト〱〱汽車は軌り出した、芳子はもう、孤島に一人殘された樣な氣がして、ワッと顏を掩ふと、過ぎ行く客車々々の窓からは、不思議相に見下して行く、今一目と顏を上げた時は、秋子の顏はたゞ白く小さく見ゆる計りて、それらしい白い半巾が風の爲にひらひら……。

(評)　肺病になつて故郷に歸る、親しい友との別れ、取材は古い。然し、此の作者の作は、どの作を見ても眞面目なのが嬉しい。此の作は、さして、すぐれた物ではないが、女同志の親しい心持

ち、それに別れの哀愁も好く現はれて居る。しんみりとした感のする作品だ。

秀逸

○あらぬ縁

本所　秋山欣子

「美輪、お前はどう思ひなさる、先様は理學士で金満家結構な縁とは思ふが、喃、縁は異な物と譬にもある通り」と伯父はちらと、お美輪のうつむいた顔を臨き込んで「他て思ふ樣には不可んて、俺はどうかう申さんから、お前の心に訊いて見て喃、成程と合點が行つたら嫁くも好からうし、好ましうないとなら、まづお斷りする許ぢや、お前の事ぢやから、未だ〳〵よい話が澤山あるぢやろ、年ぢやとてまあ二三年は盛ん――やさしげな咳をこん〳〵と續け樣にして、あはてゝ茶簞笥の横の、たんはきを取上る。

お美輪は、茶船の中の九谷燒の大きな湯呑を起して、ちやつと玉露を注いで、默りて進める、夫でも咳き入つてゝ止みさうにもしないので、靜に後へ回つて、そろそろと糸織のねんねこの上からたゝいてやる。

「オヽ、忝ない、もうよし〳〵、フムこれは〳〵」と、湯呑を取りあげて、一口すゝつて、漸と落ついたといふ風で、

「それ、その茶簞笥の上の折に、「三笠山」がある、いい味なそうぢやて、お前お毒味をせんか、」

「否、私只今午飯を戴いた許ですから、後に龍也樣ても御歸校なすつてから、」としほしらく辭退するお美輪は、伊勢崎の地味な飛白に、お對の羽織を、なで肩の恰好よく着流して、頭は艶のあるしな〳〵したのを無造作に束ねてる、粧らない處に何處か意氣な品が有つて、横顏から襟足のすつくりした快さは、亡い父母が唯一の誇だつたとかで、

長火鉢を圍んで、向側の伯父は、半白の額際から眉間へかけて斜に一痕の太刀あと、弓矢た挾んだ昔の面影を見せて、米琉の着物の上へ、糸織のねんねこを羽織つて、群内の大蒲團へどつかり。

妻は疾に失せて子といつては、今お美輪が噂した龍也、國學院にいつてる――許なので、お美輪の父、弟に當る――が連發銃發明に腐心した結果、健康を害して失せ、續いて母も失せた十三の春、引とつてから茲に五年、優しい性を殊に愛して、實子の樣に、否、行々は實子にと思つて居つたのかも知れない。

が、勝れた容色は女學校當時から諸方で囃がれて、卒

業と同時に持ち込んだのが十口程、からなると伯父も默つては居られぬ處から、小許は危ぶみ乍ら――大丈夫お美輪は我物――教育もあるから恩も情も知らない事はあるまい――の一點張に、さし當り先口のを洩した今日の仕義、「伯父樣」、突然、力ある聲で、「伯父樣、私を何卒そこへやつて下さいまし、」明確といつて凝と伯父の顔を見詰るお美輪の面は、如何したのかいやに青く、黑い瞳には何物かの影が現れてる、「はーて」伯父はいかにも吃驚したといふ樣子觀察力の強さうな眼を思切あいて、お美輪を今更らしく、見たが、暫らくすると、何か思ひついたかの樣に急に晴々した調子で、それでもどこか淋しい口調で忙て氣味に「眞個かね美輪、迷ふまいぞ、俺は何も進めた譯ではないに、かう、何か間違へて探つてくれては不可ぢやが眞實かな、いらざる義理は立てまい、」「嫌なら嫌と遠慮なしにいふがよし、俺は子の樣に思つとるぢやて、ならば、」いひかけて意味ありげに口をつぐむ。

「あれ伯父樣、私は遠慮なんか」

「フム夫なら何故考へなしにそんな事いふ、美輪、轉んで後の杖は間にあはんといふ事を知つて樣が、」矯る樣な口態、「でも私は、」例のお美輪に似ない、迫らないしつとりと沈着いた調子で冷やかに伯父樣をみながら

「私は父の心を次ぐ積りですから」

「フム相良信雄の名を現す爲には、」と伯父樣は鋭い、

「理學を修めた方に仕へて、共に研究して、いつか一度は精巧な連發銃を發明して、犧牲となつた父を安心させ、國の爲にもなりたいと考へますから、」

「――」

「其方は大變理學に通じて被入るそうですから、伯父樣是非私を御遣し下すつて――これ迄の御恩は如何ぞ致して御報し申しますから、」きつぱりいつて、消え入る樣にうつむく、伯父はたくましい兩腕を組んで、大きな眼を閉ぢて凝つと思案してる。

「美輪、御前は何といふ健氣、よし嫁け、信雄も定めて」喝と目を開くと、つゝぷしたお美輪をあかず見入つて「美輪、改めて祝ふぞ、相良家の爲に、したが喃、お前に往かれたらこゝは定めて、火の消えた樣になる事ぢやろ、龍也も妹を一人失す喃、彼は泣虫ぢやて――と、ふつと押し默つて、「アハまたこんな愚痴ぢや、私も最ういかい事年いつたて、」思ひ出した樣にスルりと頭を一なで、戸端に、置時計が三つ打つ。

「オヽ三時か、龍也も歸つたろうに、オイ松、龍也は

未だか、何疾に歸つた、早うよべ、」いひつける。遠くの方から力ない足音がしてやがて襖がすつと開く、制服の儘の龍也が血の氣のない顏て入つてくる、お美輪が進めた座蒲團を一寸會釋して片隅へ押やつて、
「お父樣何か御用、」不安の眼光をして父をみる。
「フム、龍也喜ばしい事があるのぢや、」「はあどんな?」
「芳野理學士、貴樣知つて樣が、」
「はい私と同窓て、」
「フム夫が美輪の夫と決まつたのぢや、」語尾はふるふ。
「えつ、」青天の霹靂、龍也は險しい目に屹と、お美輪の顏色をうかゞふ。
「それて貴樣もよく祝つてあげるのぢや、而して今宵は内祝に一盞して、貴樣の不手、ではない高砂てもきかうか喃、、、、」さすがは武士の果、態とらしい笑も厭味ではない、龍也は恭しく手をついて、
「美輪樣おめでたう御座います、僕は、僕は――」呼吸がはづむ、目が眩む、お美輪はうつむいたまゝ。
「これ、龍也、何だ、そんな顏はよせ、會へば別れ、別れゝば遇ふ、浮世の運命ぢや、喃そうではないか、、、、、や、なにしろめでたい、めでたいといへば龍也、伯父樣はうらどふ積り、貴樣も近くあやからうか喃、
「否、私は一生學問をして、」
「馬鹿な、なう美輪、いゝのがあつたら世話してやつてくれ、あたら好丈夫、獨り住は惜し…」
「お父樣」恨しげな、龍也の顏、思へば我一人の爲に、恩ある父子の心を終生空虛にしてしまふとは、何たるおぞましの我が身、我が心――快活の底にいひ知れぬ悲哀を包む伯父の顏、凜々しい眼に多大の恨をいはせる龍也の顏、見競べてお美輪は斷腸の思。


お花見　下谷　鈴木たか子

(評) 材料も古い。描寫の方法も古い、併し、如何にも能く整つて居る。之れだけのアートを以て、今少し新らしい材料を描いたら好いものが屹度書ける。惜しいことだ。

○しまひ風呂

麴町　三輪葉津惠

藤治は、くすぶつた「なてしこ」の紙袋をひきよせ

て、煙管へつめてみ乍ら。
「逸雄はもう大阪へ着く時分だなあ」
とつぶやく樣に云ふ。
「そうか、もう大阪へ？」
と目を見張つて、手仕事に餘念のない母親が、合槌をうつ。
藤治は、しみ〲今の寂寥に堪え兼ねた樣に、大きな吐息をついて
「逸雄が居らぬと靜なものだ」
と小聲で云ふて、妻を見る。妻は乳房を含む兒を抱えたまゝ、沈とランプを見る。
通常てさえ暗いランプに、吐き出す煙草の煙がたちこめて、乏しい油を吸ふ音が冴える。
母親が、風呂へと立つた跡て、藤治も、むせびつゝ
「風呂へ行くだ」と表へ出た。
歯抜けになつた邸の跡の、菜の花が眞盛りだ。月がぼんやりと、寂しい村を照らして居る。
風呂屋へ入ると、無愛相に、
「札は明日の晩にもつてくるて」
と風呂番の爺に云つて、元氣なく湯舟の方へ行く。板塀一枚隣の女湯に喧しい話聲がする。藤治は聞くともなく、體を擦りつゝ耳を傾むける。
「能うやつたなあ、そんな遠い所へ」
「…………」
「え、百里？へえ」
「えゝ、ドウせ大きうなつても、眞實の親の樣には行かんてな」
「その方が彼の子の爲にも善い」
「逸雄も元氣よう行きましたてな」
母親の聲だと思ふと急に腹立たしくなつた。
先妻が死んだ時、自分は如何しても後妻は迎えぬと誓つた。後妻を迎えたら逸雄が可憐相だ。と頑張つたが、叔父と母親とが、火のつく樣に、
「若い身で後妻が無けりや、心棒が出來ぬ。惡いことは云はぬ云ふことを聞け」と聲を涸らしての催促。それても二三日は、頭を横にふつたが
「先方は人が善いのぢや、隨分苦勞もした女ぢやて」
と進退ならぬ手詰に、進まぬ乍ら、
「諾」
と返事をしたのだ。
女房位あつても無くても善いものだ、とつぶやき乍ら湯から出る。

表へ出ると、更けた夜の空氣が、そゞろに冷めたい。潔く停車場で別れた逸雄の姿が、明瞭と藤治の眼に浮ぶ。
「活潑な奴だ」
と大きく叫んで、月に向ふた眼に、一ぱいの涙。
地藏院の十時の鐘が、かすかに聞える。

（評）極く疎描てある。特に父親の心持ちなど、立ち入つて描いてはないが、而も、子供を旅に出した父の淋しみが能く現はれて居る。

○平和

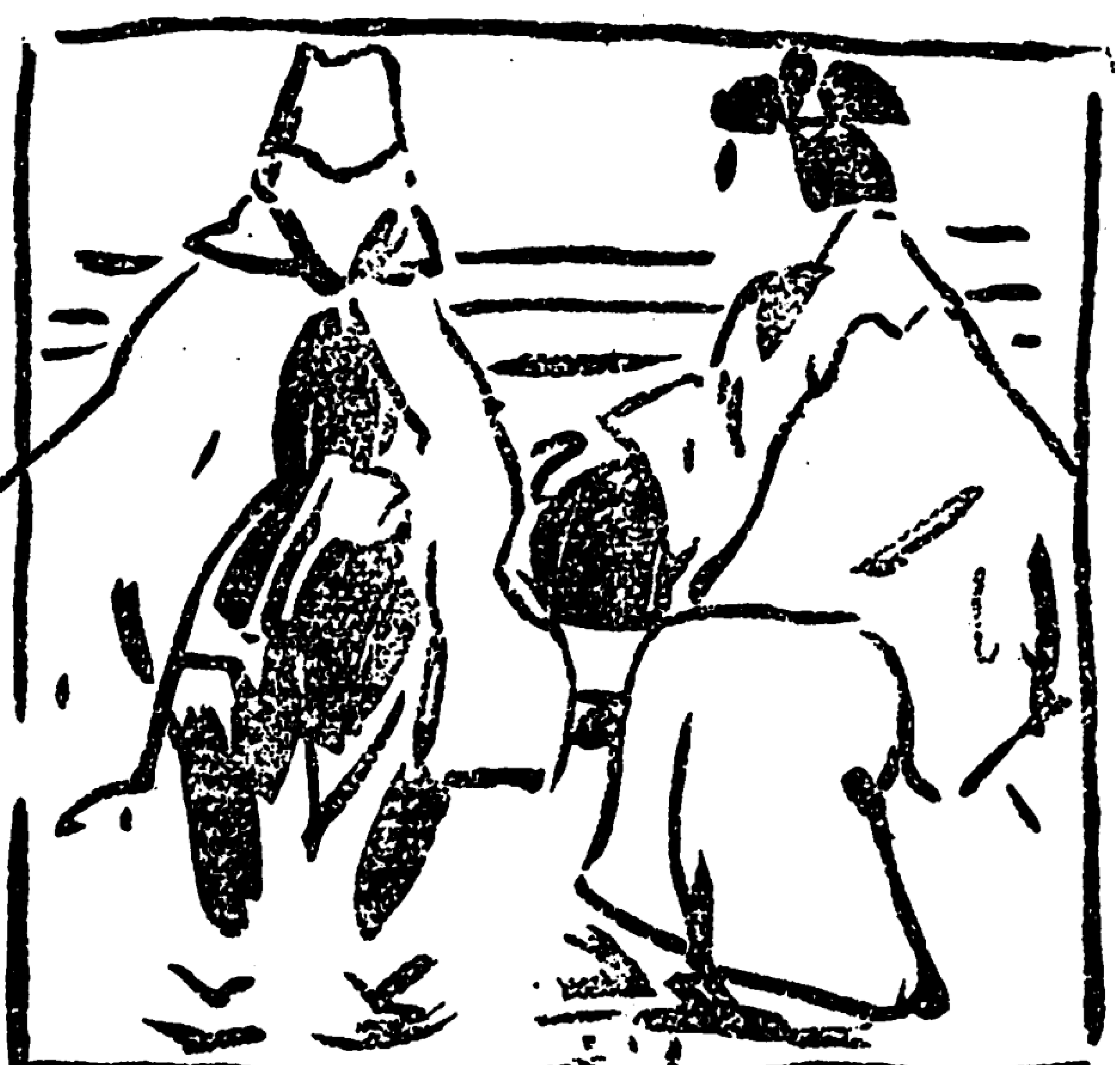
横濱　鈴木菫子

住めば都の片隅なる、本所長岡町の偶ある新道を曲れば、軒並み間口一間に奥行九尺の長家の幾棟かがある。此ぞ所謂いろは長家又は改良長家と云ふのである。

間口一間に奥行九尺！、疊敷にしてたつた三疊のところ、内三尺を土間にすれば正味殘りは疊敷で二疊に過ぎないので、大の男が寢轉んで一つウンと伸びをすれば隔の壁を突き拔いて隣家へ頭を突き出さなければならない筈なれど、住まつて見れば左のみ狹いとも窮窟とも思はぬのか、又どこかに縫込みてもあるものか、親子夫婦幾人と云ふ一家族が、此處に臥て起きて飲んで食つて、覺束なくも形ばかりの生活を營んで居る。之も其數に洩れぬ何號の第何番かを、哀れ己が根城として覺束なき生活を營んで居る一家族がある。主は毎日車の梶棒を握つて稼ぎに出るので、留守を預る女房は、子供の守りの片手間に稼ぎも細い糸繰りを内職として足らぬ暮しの足しにして居るのであつた。

今日しも傾きかゝる黄昏の日足に糸繰る手先を一際早めて居ると上り端に寢轉んで何か惡戯して居た六つばかりの男の子がムックリと起き上り、母の背後から獅嚙み付いて、「おッ母あお飯あ……」
母は五月蠅しと身體を一搖り搖つて振解き、
「まだ爺ちやんが歸つて來ないじやないか」

冬　牛込　佐野良子



「だつて俺らお腹が減つて仕樣がないんだもの」
「何？今しがた錢を遣つた癖にやかましい」
突慳貪にたしなめられて、詮方なしと諦めたか、又候そこにゴロリと横になり、仆し兵士を抱き起し、耳に口あて名を呼ば、ニッコリ笑つて勇ましく、萬歲唱も口の内トコトット：」手足でばたく拍子を取ながら、空覺へのラッパ節を謠ひ出したが凡そ同じことの五六遍も繰り返した時又もムックリ起上つて、
「ねえお母あ爺買つて來るかしら俺らの着物？」
母は力を入れてウンと頷いて、
「あゝ買つて來るだらうよ、往きに買つて來るつてそう云つてたから――」
「本當に買つて來りやいゝな、俺らもう此着物じや暑いぜ、もう單衣ものぢやなけりや……」
我子に斯く訴へられて母は今更ら詞もなく、只管貧しき暮しの敢果なきを喞つのであつた。
斯る間に暮れかゝりし日の容赦なく、廻す手車の一廻は一廻りより四邊は暗くなり增して、今は糸繰る手元の覺束なくなつたので早やこれ迄と仕掛けし物を傍へ押遣り、其處此處散ばりしもの片付けながら、
「どうしたんだらう、最う歸つて來さうなもんだが？」
我にもあらず呟くを子耳に早く聞挾んで、
「それじや俺れ迎ひに行つて來ようか？」
「まあいゝよ――屹度何だよお前の着物買ひに廻つたんだよ」「そうかい、ぢや尚早く歸りやいゝな」
親子は只管主の歸を待ち佗びて居る折しも路次の方にてガラくと軋る車の音。
「お母あ父歸つて來た！」「おゝ本當に――」
親子諸共立出る門の口、出合頭にヌッと頭差入れしは待ちに待つた主である。「お前さん大層遲いね」「買つて來た？俺の着物！」
左右から取つく如き女房を、主は迭に打見遣り、携へし包を投げ出せば、子供は手早く抑つ取り結び目解けは、バラリと出たは己れに似合しい絣の筒袖。頗る恐悅の體で頭の上から引つ冠りイソくと廣くもあらぬ座敷の中を飛び廻つて居る。

（評）形容を誇張した所があるので、厭やな感がする。だが、文章は如何にもきびくして居る。それに、母親と子供――貧しい家庭の樣もかなり描けて居る。

今回集つた應募小說數は例月に比して夥しく數は多かつた。然し、數の多い割合に、例月に比して總體として劣る。寧ろ佳作は少なかつた。一層、諸嬢の奮勵を望む。（選者）

日記文

中村文學士選



▲規定　文體は問はざれど日記に限ること、實際の日記其儘にても可なり、二十四字詰三十行以內、用紙前同斷、一人一章限り、投書締切毎月十五日、懸賞品は甲種規定に據る。

二等　○續新歌謠日誌

福島縣河沼郡野澤町　泉　花枝

○四月三日。金曜。戶每軒每國旗濕風に翻へる。途上には、晴着華やかに飾れる少女兒達群れ集ひて、嬉々として餘念なく遊ぶ。實に今日は田舍にては桃の節句也。されば春まだ淺くして梅さへ綻び初めず、田圃は殘んの雪鹿の子斑にして、野蒜のやう〳〵芽ぐみたるのみなり。夜孤燈の許に、父君健に世に在せし頃の幼かりし俤など、そゞろに偲ばれて春怨いとゞ深きを覺えぬ。

雛が媒介少さい女夫、桃の白酒汲み祝ふ。

○四月四日。土曜。空よく晴れて暖し。終日道行く男女の晴やかに賑はしきは、節句禮者の歸路也。夕方珍らしくも馬の蹄の音す。續いて男女のさんざめく聲す見れば新花嫁の一群華々しく練り行くなりき。萬に羞らひたる馬上の美しき人、流石にあはれなり。

駒は春出す紅鞍おいて、乘せて斷く花嫁娘。

薄暮、追分節の聲音美しく流して、夕霞に消えゆく炭燒女を見る。名書に對するが如き心地す。

主は木を切る妾しや火を焚いて、炭は燒けども氣は妬かぬ。

○四月五日。日曜。遊學の爲め上京し給ひし絹子の君より無事着京の便りに添へて、都の春景色細々と報じ越しぬ。飽かず幾度か繰返して、針持つ手もそゞろなりき。

梅の雫を硯にうけて、筆に含めた春の消息。

草深き山家、世の開明に後るゝ田舍、流石にうら若き胸の血潮の沸きたゝぬにはあらねど、されど甲斐なき身を如何にせむ。幸薄き運命を如何にせむ。唯、野に埋もれ山に朽ち果つとも、一意向上の念を失はざれば……など、自ら斷念め、自ら勵まし慰めて、獨り心やりとなす。何となく心細き日也。

天を仰げば五彩の烟、賤の伏屋を出て騰る。

（評）謹嚴老熟の筆致、重れて入賞せしめざるを得じ。

三等　○逝く春の記

丹後　衣子

六日、小庭の飛石に櫻花白う散りしきて、おぼろの月さへ出てぬ、なつかしき夜なり、今宵を名殘に明日は都の人となり給ふべき姉樣のお仕度に、罵しり騷ぐ人

の聲、幾間を隔てゝ夢のやうにきこゆ。

あゝ淋し、悲し、姉樣は御胸躍る嬉しさに、病の床に姉樣を慕ひて泣くこの妹を忘れたまひてか、否忘れたまはじ、されど〳〵、今幾時間の後には、我家の門を出でたまふべきに。

さばれかくて徒らに獨り待ちわびんよりは早く御別れの時來よかし、其時こそは姉樣此の室を訪れたまはむ、嬉き悲しき思ひのかずかず、み情深き御胸に額あてゝ泣かむ、めでたき門出に不吉の涙とは云へ、深くもとがめ給はじ、泣きて泣きて、涙に袖も朽つるまで泣くが、せめてもの我が喜びぞ。願ふは御名殘を惜しむ其瞬間の、千年よりも永かれと……。

心なき時計の音に、我れはお別れの時近づかむ事を、半ば嬉しうなかば悲しう、そゞろに待ちこがるゝなりき。

我が家の春は今宵ぞ逝くらむ、花も散りそめて、姉上も去りたまはゞ、わが宿のさびしさげにいかなるべき。老ひたまへる母君と病める我が身と。あはれ。

（評）冒頭の詞のうつくしさに添はぬ結末こそかへす〳〵も惜しまれけれ。

四等

○女教師の一日

埼玉縣入間郡川越在　船津ゆかり

四月五日　今朝は國語なので教科書持つて教室に行つた、そして出席を呼んで鈴木さんと云ふ時にいつも勢よい返事をする子が缺席である、「如何したのですか」と聞くと一人の生徒が「鈴木さんは先生御病氣です」つて、私は思はずまあと口から出て了つた、あの中で病氣、さぞ困つて居るだらう、お醫者にかゝつたかしらとても其の力はあるまいに、お氣の毒な、と思ふと涙が自然と湧き出る。

午後は遊戯なので輪取をした所が生徒が大喜び、鈴が鳴つたのに「先生今一度〳〵」とせめる本當に可愛い今日は家に歸つても何だか變に鈴木玉子の事が氣になつて作文の點付けをして例もより早く床に入つた。

四月六日。授業が初るとすぐ教室に出て生徒を見廻した、一人の遲刻者もないのに鈴木さんは又見えぬ今日も缺席かしら、今朝は修身なので貝原益軒先生のお話をした、生徒は音一つもさせずによく聞いてくれるので又なく愛ゆく〳〵堪まらない、二時間目に郡視學が來られた、そして室内が好く整頓して居ると賞めて行かれた、何だか子供の樣に嬉しい、二時に學校が退けたので玉さんの家を訪ふた、今迄隨分ひどいとは聞いていたがよもやこれ程ではと思ふ位、軒は半傾いて壁は崩れて足を踏み入れる餘地もない其の中に可愛い可愛い玉さんが薄いふとんに小さな夜着かけて臥て居たが私の訪ねたのが意外の樣子で「まあ先生が」と云つて汚れた夜着の衿に顏うづめてすゝり泣きが聞える、母も涙に咽んで「先生樣が」と幾度も繰り返す。私はど

うしても泣かずに居られなかつた。
今夜は如何しても寝られぬ、破れし家に病み伏すあの可愛い顔が目先にちらつく、更け行く夜を流して行くあんまの笛の音がいつもより一層身にしみ渡る、あゝあれも玉子の様な悲惨な暮しの家の子か。
(評) 清く美しき一幅の活畫

五等 ○春風日記

伊豆國下田町 廣岡一三七　鈴木やす子

三月二日
春めきて静かなので後山に上るそして未だ芽をふかぬ櫻の木の下に横はる小綺麗な石に腰を下して何とはなしに耳をすますと霞の奥に雲雀の聲や雀の聲、はては鶯の聲もいと細くまじりて聞えた、山麓の田には子供が凧を揚げてゐる、何處やらから百姓の野良歌が長閑に聞える、叢道づたひに後山を降りて里の畑の邊に出る、菜畑や麥畑唯青々として菜の花は未だ咲かず。
三月三日
戸を開けると後山の鶯聲美しく啼いた。
竹野山の南には薄鼠色の雲一片動くとも見えず浮いて居る、庭の櫻の梢にゐた鴉一羽悠々として霞棚引く田面を低く舞ひて杉多き彼方の村に行つた。
午後小さき弟に習字を教へる「い」の字のまがり角、思ふように曲らず妾を困らすことと夥し、けれど今年七ッの弟は別段なんとも思はず鼻をすゝつて居た、高等一年の妹は時々首を縮めてクヽと笑い母はやきもきせらる妾達も一度あつた事と思へば可笑しなものである。
夕暮から風俄かに寒い、妹の干せし習字帳に危うくさせる初春の夕陽、日影淋しく冷やかである。
三月四日
今日も好天氣、心地よき日あたりの南椽に布團など干しそこを背に日記帳賄帳などこしらへる、午後横濱の洋服屋より誂らへしコート小包にて來る、母と包を開き見しに思つたより美しく着る日が待ち兼ねる。
(評) 是といふふしなけれど作者のやさしき心の様忍ばれたり。


日和　大坂倭文子

秀逸 ○雨の寄宿舍

麻布　静江

ぬか雨しと〱と心重き日なり。
「折角の休日を」とかこたるゝ友君多し。同室の愛子様

は叔母君がり行かれて我は只一人殘さる。爲す事もなき儘に疊紙等とり出しつ。小切れ片附くるに、そが中に色よき友禪見出でぬ。我が七つの祝に祖母君の給ひしなり、幼かりし昔思ひ出でゝひとりほゝゑまれぬ。先の程より御部屋の飾付けに御餘念なかりし、お隣の文樣の「靜江さんよく出來ましたから見て頂戴」とのお言葉御自慢なされしだけになか〱立派なり。晝食後、室に歸れば入口に、小包あり、宛名は正しく我なるに飛びたつ許りの心强いて靜めつ、母上の日頃のお言葉思ひ出して、丁寧に繩ときて打ち開けば、古代紫地に、袖、裾の摸樣は、雪被ぎて枝振りよき梅の下、首傾げて立てる鶴の姿美しき晴着、明後日の式に着よとの御心か。常より長き袖の丈に、そと探れば、なつかしき母君の御文あり。日頃健かなる我身をさへ、案ぜられて「隨分と心してよ」と細々の御言。「四日の後の卒業式には、祝詞讀むとやら、落着いて、誤らぬ樣」と、我が事の樣に、御心配なさるゝ有難さよ、着物は氣に入らぬか知らねど、下着は伯母樣と相談の上、紲無垢はうつりよからずや、袖も二尺の上八寸あれば、背高其許にも見苦しくはあるまじ其の他、封入の栗納豆は、其許の好物故送る、同室の皆樣と共に」と、何から何迄心配られし勿體なさ、只涙ぐまれぬ、それ〱片附け終りて、明後日の詩の暗誦、テニソンのキングアーサー口誦さめば「お上手ね」と聲して澄樣立ち給ふ、音なき雨はいつ止むとも見えで、愛子樣は未だかへりまさず。

（評）佳。

○花日記　福岡市　浪子

四月一日

しろがねの絲のやうな雨、霏々として降り、庭の草木も小さき黄金の芽を吹く。

二三日前から盛りのやうにした源平染分の桃は、まだ一片も散らない、毬の如くかたまつた花は悉く水晶の玉をちりばめて、それも容易に落ちさうにない、えもいはれぬ風情である。

昨日習つた琵琶の復習をして居ると、歸着されて居る兄さんが例の小督所望、今日は思ひの外上出來の方だつた。

京都の雪子樣から繪葉書の奇麗なのが來た、終りに奈良に遊んで居られた時の一句が添えてある。

朧くむ家に訪ひ寄る奈良の鐘

四月二日

昨日の雨は全く晴れて、櫻の車がへし迄が蕾を破つた。昨日來なかつた小鳥が、今朝は早やくから花より花に渡る、渡る毎に露の玉がゆら〱と搖れて、やがて落つる、一しほ崇高い。

今日は久し振りに生花の先生の所にゆく、よし子樣の病氣も稍々よい方だつた、御全快の日がまち遠い、歸に琵琶の御稽古による、イヤな人が來て居らつしやつたので、直ぐ歸宅した。

夕飯後散歩を終つて書齋に歸つたら、なつかしい今月

の女子文壇が机の上にまつて居たので、しきりと讀んで居ると、妹が新派和歌なんと洒落れて一首をもつて來る。

子安貝ならべしやうに雲浮かせ
　夕潮めぐる春の島かな

一寸面白いやうに感じた。

思ひ出したついで京都の雪子樣への返事を書く、相變らず呑氣なことばかし並べて。一陣の風がゆかしい花の匂を吹き込んだ刹那、向ふ野道を下る横笛の音が、平和なる夜の氣に幾多の波紋を描いて洩れた、主は誰だらう。

（評）輕健。

○時雄日記

攝津　石神露花

二日。朝起きると私はソッと產室へいつて見ました、すると姉樣と並んで毛の濃い紅い顏を柔い枕ぶとんへのせてスヤスヤと眠つて居る嬰兒、たまらなく可愛くなつて小聲に時雄さんと呼んで見ましたすると眠つて居つた姉樣が細目に瞳をみひらいて眞白い頬にニッと笑を浮べました、いつたい未だ名はつけないのですが生れぬ先に兄樣がかうお極めになつたのです、男ならば時雄、女ならば小枝子と、ですから時雄に相違ないです、私も待つてたやうにニッコリしました。



月の出　岐阜縣　度會智惠子

三日。伯母樣のとこやお友達から立派な產着は幾かさねも貰ひましたが常着には勿體なしそれに新しいものは赤兒に毒だといふので、妹樣と私の一ばん紅の少い長襦袢を一枚づゝこはして着物と胴着とじゆばんに仕立直しました。

四日。昨日はお針に急がしくて一んち染々覗きもしませんかつたので、今朝は顏を洗ふとすぐお化粧もしないで行きますと、姉さんに抱かれて乳をのんで居る處でした、薔薇の蕾よりも美くしい唇でチウチウと音をたてゝ甘さうにのんでる愛くるしさ私にもだかせて頂戴と手を出せば、お落しでないよと渡してくれましたうれしくつて嬉しくつていつ迄もはなしたくありませんでした。

五日。私はいつぞや兄樣に頂いた大人形の衣裳を其儘此時雄に着せたらば、どんなに似合ふだらうと思ひついたので、姉樣の眠つて居るまにコッソリ抱いてきて

黒地友禪の上着と洗朱縮緬の下着をそつくり、ガラス箱の人形を裸にしてきせました、するとシックリ體にあつて一段可愛いので、嬉しくつて夢中になつて頰ずりして居ると頭の上で、「馬鹿な」と大きな聲がしたので、びつくりして見ると役所からひけてきた兄様が、聲ては叱りながら顏はくづれさうにして立つてましたが果はワハ、、、、と笑ひだしました。

(評)無邪氣の日記。

○思ひ出日記

本郷　朝井千とせ

三月廿九日、今日は日曜なのでいつもよりは一時間計後れて起きた、そのせいか何だか熱でも有るやうていやに頭が重い、なま暖かい空氣を呼吸し乍ら濕ぽい土を庭下駄に輕く踏で裏の廣場に出た、空はどんよりと灰色絹を張つた如に明らけき日のみ姿は見えぬ、去りとて降るにもあらねど、花い〳〵とチャキ〳〵鋏の音させて來た爺さん呼んで、吉野櫻を求めて胴流しにと挿けた、思ひの外工合よく活つたが惜しい事には自然咲のやうな薫が無い、午後から母様と女子職業學校の展覽會へ行く、今日はもう終の日なので餘り混雜しては居ない、第三(と思つた)の休憩室へ這るとそこにはねじて廻る大きな臺の上に十二ケ月に仕組だ少さな人形が澤山並べて有つてそれがぐる〳〵廻つて居る、其のお細工の巧なのに感心して見て居たら側に腰を掛けて居る漸く十か一位のお孃さんが餘念無く見とれて被入るのでふと私はこんな事を思ひ出した、丁度十年計昔で有つた、母様と叔母様に連られて淺草の觀音様に行つた時何とか云ふ勸工塲の入口に飾つて有るぜんまい仕掛の人形がぶらんこや機械體操をするのが如何にも面白くてつい欲しく成つた、で「母様私にこれ買つて頂戴な」とお袖に縋ると側から叔母様が「あなたがお嫁に行く時叔母さんが買つて上げませうね」と仰有つたら「叔母様眞實によ」と念を押したのでお二人が顏を見合せてお笑ひなさつたつけ、屹度此のお孃さんも矢張あんな心持で見て被在るのだらう…今と成つて考へればまるで夢のやう、「サ行きませう」と母様に促がされて室を出て一寸振り返つて見ると未だお孃さんは眺めて被在る…御迷惑相なお祖母様には一向お構ひなして。歸るさ東明館へ寄つて國元の叔母様へ送る買ひ物をして黃昏頃家に歸つた。

(評)當らずといへども遠からじ。

○桃の節句

伊環　曉子

三月二日。宵節句なり。あさの程何時もの花賣呼び入れて桃の花の白きと紅きを一枝づゝかひとり、ひな段にかざす。ひるまへ芳、頭重しとて宿にひき下りたれば一人にていり〳〵菱餠重詰など何くれとなくしつらへて立ち働きつ。夜の九時頃までは目のまはる程の忙はしさなり。隣の順様と指折りかぞへて今日を待ちし六年七年の昔の樂しさに思ひ比べて、思はず「アヽつ

まらない」とひとりごてば「女はかくして長き一生を終ふるものぞ」と折から奥へ來られし母上ののたまふ。臺所とりかたづけてそと後園にぬけ出づれば、月なき空には星のまたゝき美くしく、吹くとしもなき夜風に紅梅の香さと漂ひ來ぬ。星あかりに二三輪とりかへりて文とともに高崎病院なる順様に送り參らす。あゝ順様は思ひ出多き此宵をいかにすごしますらん。

三月三日。夢路半ばを妹にゆり起されぬ。お下げにモール入りのリボンを結びて、袖の長きをきせてやりしに大よろこびにて隣りの春ちやんを呼びかへり、二人にて白酒汲みあひ重詰ひらきなどす。小六の金屏を後ろに蛤と櫻をそめ出せるまくの奥より四段につめる内裏様五人ばやしさては官女などさまざま美はしきに見とるゝ二人もまた血の通へる人形のごと愛らしと思ふ。

ひるすぎて笑子様來られ明日高山へ花見にゆかんかと約して去らる。ひとり琴かきならすほどに宵すぐる頃より糸の雨霏々としてふり來りぬ。恨めしき雨や。

春雨　豊橋　白井津奈子



○島の家居

靜岡縣　橘多賀子

十日。雲少し晴たり、今日は表濱の高網見に行かばやと主人の君誘はせ給ふ、病の身の歩みだも思束なきを舟ならばと强て出でつ、松子様千代様と四人のみなり汀淺瀨なりければ、船を離るゝ事半反ばかりなるを主人の君水に入り脊にて渡し給ふ、何となう心恥しう頰のみ赤らみつ。あはれ懷しき人の脊を離れてより早幾年ぞや、戀しきものは昔なりしなど思ひつゞく。

表濱は遠州灘とて、山の如き荒浪の碎けかゝるに身も心も消えぬべき心地して、網見物も心ならず、只歸りのみ急ぎぬ、夜晝のつかれにや熱出でゝ苦し。

十一日。暖なり春雨の音、しめやかに窓の扉罩めたればさらでだに重き頭もたげかねて物も食べず枕につくを、千代様蜜柑の小兒の頭程なるが、いと美しう熟みて露したゝる許りなるを持て來給ふ、高き香の咽ぶばかり室を罩めたるに、熱に渴仰ける唇も淸々しうなりぬ。一房毎に裂きては含ましめ玉ふ事のあまりあるお情と辭みまつれど許させ玉はぬに、流石に似通ひし亡き妹が面影も思ひて人の心の嬉しきに泣きぬ。夜熱少し下りたれど、汗烈しう流れて夢なら

ず、まつはる髮の毛の煩に粘りつくもうるさう、明日はつとめて髮結ばんなど思ひつ。

十二日。曇りたれど風もなければ、南の椽にて千代樣に髮結うて頂きぬ、餘り脫毛の多かりしと宣ふに、やがては尼になる身なればなど笑みつ、椽近き桃の大方こぼれたるに、今は椿の白きが四花五花殘りたるに、舞ひくる蝶もなければ、花に乏しき島の春は淋しう暮れ逝くかと哀れ深し。午頃母上のみ文來りぬ、繰返す御情の中にも「あまり淋しくば知多の浦なる昔の乳母呼びよせて遣すべし」とあるに、嬉しさ懷しさに胸おどりて、母上樣々々と拜みまつる、急ぎ返しの筆とりて椿の花散らん頃までには是非呼ばせ玉はるやうと申し送る。

○田園日記　伊賀さよ子

三月十五日。折々風は叫び雨横に降りて、御火桶捨て難き日なり、お化粧中の梅の姫君、嘸やつらからん、鶯の殿御の聲も聞えず、俥轔々泥を蹴つて急ぎ往くは月瀬の里か、さても浮世の人の恐ろしや。信さんの袷を縫ふて上げし御褒美にとて、伯母より半衿たまはるお節句に島田に結ふて此衿を。

夜に入りて雲ちぎれたり、燈かゝげて編物すれば母上の風ひきはせぬやと氣遣ます心の程ぞ忝なき。

何處よりか、尺八の音響きて思ひ出多き夜なり。

三月二十日。ポカ／＼と暖き日なり。麥はのび菜の花咲き初めて、愛らしき蝶の舞ふあたり詩の神や宿りまさん、雀は巢に忙はしく、隣家の庭には姉樣冠の花嫁樣洗ひ張りに急はし。午後落梅集抱へて裏なる川べに出れば、椿の花流れ來る、さても川上の春を知らしつつ何所までゆくらん、花は語らず聞く由もなし、橋の袂にて舊師の君に會ふ、五つ位のお子樣小松を負ひて力強さを誇り玉へり、庭木とりのお歸りなりとか。伊勢參りの土產にとて、草餅貰へるを舌打して頂たく物珍らしくて。夕、東の山々に山燒を見る。

○日記より　京都　西村ゆかり子

三月廿一日。晴。朝、名古屋なるお峰さまより美しき端葉書來りぬ。「春戀し、都戀し、君戀し、おん玉章もがな」と水莖のあと見事に。返しにとて淸（弟の名）のかきたる端葉書に春の京の有樣をしるしつ。

お晝すぎ四條の伯母樣お出でになる。今日はお彼岸のお中日なれば、伯母樣と、母上と淸と一緒に、淸水寺に參詣しぬ。ほこ／＼と暖く、空、コバルト色に晴れ渡り、そこゝに梅薫れり。舞臺より見れば、京の町、春の氣あふれ、西の山々は遠にかすみぬ。家に歸りつきしは灯ともし頃なり。

伯母樣と晩餐を共にして、おかへりになるを五條までお送り申しぬ。

夜、家の人、皆集ひてお話をして、十時に床に入りき。



新體詩

横瀬夜雨先生選



凡て振假名をつくること
懸賞は甲種の規定に據る

三等 ○白日夢

阿波　長曾我部菊子

流るゝは涙なりけり
火の如くほてる額や――。
目をつぶれば朱なる花の
くるくると渦き咲くに
身を挺きて逃るとすれど
「幻影」は終にはなれず。
岩蘿ひきかきむしり
雑草を踏みたたらかし
木がくれゆまびさしすれば
恐ろしの迷眩きえて
行く方は青葉のさやぎ
白アカシヤ凉しき花の
蔭により
浮足なして
歩み入る大森林に
いづこともあり方知らぬ
遠ひゞくあやしの音の。
あら、凄き物のひゞきや、
白ぎぬに尸おほひて
おぞましの荒くれ雄ども
釘さして柩打つらし。
辿り行く青葉の奥に
日の光線の細う流れて
人こそあれ――紅梅染の
袖のそゝゆれ。鳥啼いて
森は寂寞に。
心誘かれの目をあげて
をのゝきつゝもい向へば
あな、見かへるは
光うるめるまなざしの
君なり、一のわが希望！
合歡木の花散る木柵に
白翅の蝶の瞳映げに
息づき憩ふ夢よわれ。
鞦韆による羅の裳
ま白きを翔しては流し目に君を見る
思へば戀に裂かれし魂の
置き場は君が胸なるをと
かけよりてみ手のぬくみに觸り見て
泣くとは覺えし……
遠野の人を憧れの
愛に巣籠るわれは少女子。

五七にも七五にも調子なんぞに頓着せずして、大膽にやつてのけるところ、たのもしき詩人肯といふべし。難を言へばあまりに夢幻的にして、幼き戀を回顧したのやら、現在の想思をうたうたのやら、分らなくなつてる事だ。原作「…少女子の・苑の小草

に涙せし、白日の夢の今ぞさめぬる」とあつたが、さめずに泣いた方が詩は美しいてせう。

四等　○ゆあみ

東京　野村光子

湯煙立ちこむる新湯殿。
木の香は奇しう身を包む、
玻璃窓斜に吾胸へ、
金蛇墜ち來と怯ぢ心、
か細き指もておしのくれば、
そは陽炎の日の光線。

清らに澄める眞白湯の、
うちに半身を沈むれば、
乳のあたりまで浪よせて、
波紋しづかにひろごりつ。
湯氣あたゝかく肌をむし、
我は音なく浸るなり。

ぬくみし腕風呂ぶちへ、
爪紅てそさゝぬ紅の、
指よりおつる滴りを、
美し、色と眺めつゝ、
双乳押へてつと立てば、
髪はばらりと肩を打つ。

壁へ正しくかけられて、
鏡の面模糊として
甲斐より出る晶玉の、
晶き光をおもひやるかな。

しまひの方て詩の神さんがあらはれて、天來の想を裸形の美人に賜はるとになつてゐた、事實かも知らぬが、處女の純潔を誇るに止めた方がよい。

五等　○怯え

上野　大沼そめ子

たゞ一人森のさすらひに、
胸の扉のさゆらぎや、
ひし／＼と迫り來る、
木の精に弱き子は、
誘惑と憂欝の、
戰ひに我れをあざみ、
魔神の犧牲にもと、
つと佇みぬ。洞ろ樹のかげに。

蒼穹みれば、ゆく雲は、
大いなる神の手に、
ひかれ行く——一つ一つ
愁ひおびしづ／＼と、
廣ごれる樫の葉を、
音もなく辷りおつ、
宛然や、裸形の男の子。

夕べなり、——太陽は横に幹を射て、
湧きのぼる薄き靄、
木と木はた影と影は、
走り來て人やあると、
かきさばく姿——に、
弱き子の胸の扉は、
ふとわなゝけり——（刹那の怯）——
寂寞の森の運命よ——。

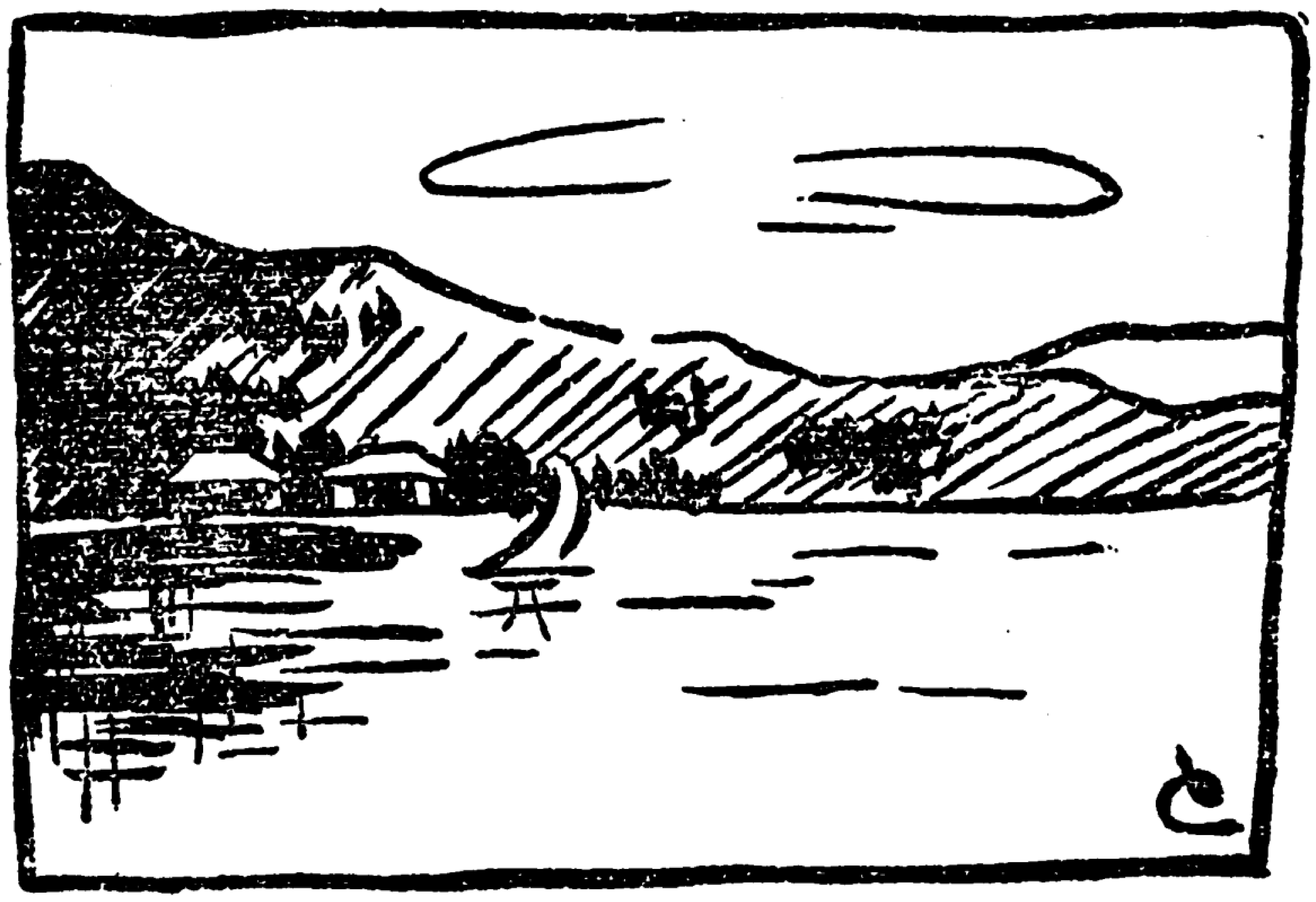
壯厳なる森に入りて刹那の怯えに戰慄す可憐なるは人の子なるかな。

秀逸　○溫室

信濃　伊藤とし子

戀燻り春の香蒸して
驕樂の熾りの園に
夢心地かげを慕ひつ
恍惚と辿る無何有邊
繡珍織、元祿模樣
窓帷のきぬづれさゆら
佳き鳥のなくかと許り
層たゝむ五彩に醉ひぬる、
温室の棚の隈々
幻のこれや華かも
柑子、柚子、蜜柑、橙、
若君は黄金造りの
太刀佩きつ冠いたゞき
碧瑠璃の葉かげに忍び
何事か囁き合へば
牡丹姫海棠姫は
天翔ける大き花瓶の
對なせる七寶の座に
濃艶の十二單衣や
言もなくうなだれがちの
いと若き耻羞ゆゑに
えもたへてほろとかつ散る。

二十句位ではよいのは駄目ですわれ、との御不足音を添へてある。温室に稀珍の窓かけをかけるのは小石川の植物園でも見かけなかった。



湖水　茨城縣　小堀とし

○若きなやみ

兵庫　筧　露子

樂しと笑める老の義母、
面映げなる良人の姿態、
燃ゆる許りに頰は熱りて、
消えも入りたき醫師の前。

高き所へ手もあげな、
蝦蟹類は食べなと、
實家の姉より文そへて、
生絹八尺とゞきしか。

紅き摸樣の布切あつめ、
小さき衣縫ふ南椽、
何とはなしの物怖ぢに、
ホと吐息する懷妊の身よ。

「面はゆげなる」は若い十七の奥さんの形容でなければならぬ「事なく母となるや否」とあつたが案ずることはあるまいと思ひます

○愛子

東京　かしこ

青葉若葉に　風もなく
夕もやこむる　初夏を
いとしきあ子が　うぶ聲の

しどまやぶりて　ほがらかに
乳なき三夜を　泌々と
眼とざして　涙しぬ
すゝれど乳の　冷さに
母を慕ひて　泣かるるに
林檎むくにも　面赤み
ものはじしたる　つかのまの
われも少女の　名のみして
母とはなりぬ　みどり兒の
風をしいとふ　ふところに
ふるゝ乳ぶさは　あたゝかく
花のおもはの　すや／＼と
うぶ毛は黒く　父に似て

御覧なさい、こゝではもうお赤飯をたきましたよ。生れたてだと見えてお乳のつめたいのには困るけれど。

○夏野

京都　大草　淺子

われはゆくよ夏野夏草の
ふかき香たづねて憧れぬる。
われはゆくよ夏野夏草の
夢にも似たる姿にし偲びつゝ、
泉涸れては見ぬ瑠璃いろの
水の滴りもとより汲むべくもなく、
空燃えたる眞晝燋くる胸の炎、
かつて觸れし戀の喉堪へず。
われはゆくよ夏野夏草の
茫としてはろばろのうちへ、
熾なる日や、いづく戀の領土
甘きに醉ふべき木の實あらず。
夏なりき、さなりわが戀の夏の
あつき試みをなむべく、

われも往かん、彼の夏の野へ。こゝに生長ありこゝに繁茂あり、草青うしてわが魂は夏の野にこもらむ。

○くもり日

丹後　中澤　衣子

終日の己がつとめに萎へし日は
にび色のうすきよこ雲從者にして
ひくき山根の谷の峽に
たゆたひ入らむ刹那の時
ふと思ふ――
ありし昔の春の野に
夢に見し面影人に慕ひより
ひた走り、み袖とらむとしつる時
……つとすりぬけて
入りしか彼方のもやのかげへ。
今、落日の影を見れば
涙ぞおつる心寂しく。

くもり日のくもり日たる所以がどこにも説明されてない、且落日に對して、袖を拂うて去りし人を聯想するのも無理であらう。

○夕づゝ

大坂　荒木　貞子

胸に思ひはあらねども
暮れ行く空を悲しみて

ひとり巷をさまよへば
光りも若き夕つゞの
西のみ空に現れぬ
君よとばかり呼きて
袖に面を蔽ひてし
戀知る少女羞るごと
光はいまだ若けれど
望ぞ多き夕づゝよ
宵々ごとに現はるる
汝の光を仰ぐとき
消えて望も悲しみも
憂ひもいつか忘られて
新しき世に蹄るなり

金星の光は千萬年にわたりて新し、君が詩の何ぞふるき。

○たゆたひ

佐渡　本間きよ

たゆたひの朝なり――細き針の鈍り
赤き弱手を風の嬲ぶる、
見よ、いたはしや惡熱黑く、
夢の花片小さく燒けて、
漂ふや――其、高き香り、
腕の運びの重くなやむ。
たゆたひの夕なり――見よ、白き薄き、


笛の音　陸前　黄川田安喜

日の御光の空に淀み、
創もつ右手の寒き慄ひ、
あゝ戰きて今ぞ、斜に、
落ちても行くか――靜けき夢、
濃き鈍色の雲ぞ蔽ふ――。
我が夢はか深き森をつなぐ糸の、
もつれ合ふ如、なやみの澱、
冷たき殘り香夢と冷えて、
まろぶか――白き露の小屑、
殘月の野に淋しき笑み、
今、はた落ちて長き恨み、雲
を呼ばひて遠く走れ――。

君は秀才文壇中學文壇などにてよく見かける本間某の假名であらう、もしさうだとするとちと人柄がよくはあるまい、それでなくばきよしといふたり、きよ子と號したり、瑞枝と名つたり涙子となされたりする必要は無いはずである。

○たき火

信濃　依田芳枝子

わが胸の眞闇こめたる爐の
はたを、
何者かうかゞひよりて
ひそ〳〵とつぶやきつ、
あたりの樣をとみかうみ、
力手つよくソダ折りくべ

くべては吹きつ、
打ちもやす——あな
燃え盛る炎の華のすさまじさ、
見よやわがゆらゆる血汐わき立ちて
くれなゐの想の蒸氣ほどばしる、
力手つよきものゝかげは
心足らひを夢見しか——そは
空なりき、窓に不安の風吹えて
吹き入れば、惱みのはてか
はかなしや、くづをれて
たき火ははたと消えはてつ、
くらやみ深き胸を、爐を、
むなしき灰のおもひてか——今
見れば、あゝ冷き血汐のどよもしの
あざれたる其の絶望のこき匂ひ
得堪へじなかげなるかげは常闇の
涙にすみて——。

常に新しみを加へんと努力して居る作者の熱心には心動けど、まだ深からず大きからざるをうらみとするのみ。

しめ〳〵と低ふ這う
夕暮の空は曇りて
霞のかげ雲にや入りし
森越えて聲のみ聞ゆ。
一はけの紅き夕榮
雲にのみ落日は照れど
みかへるも我が影あらず。

○春愁　長野　瀧澤さはよ子

青春き匠が憧憬の、
少女が笑みや、
こよ無き醐ひ、微笑みて、
笑みて描きし戀の花、

胡蝶の舞ひのひら〳〵と、
春の御園の美しに、
身は流轉して花瓶は
人に買はれぬ。

戀の花、葉末には——
憂あり涙あり、
頸垂れて、
戀失ひしさびしらに、
若き瞳に涙ぐむ、

○春の海　白萩子

光の征矢か白銀の、
砂をはなれて地に充てば、
春、遠海に音高く、
湧きて漲る新潮よ。
五百里の涙に香をのせて、
靜かに來寄る春の海、

かの龍神がかつぎます、
それか亂るゝ神馬藻の。
新らしき香をまくらして、
磯邊の岩に臥しぬべう、
午日をみなぎる新潮の、
蟲きをしも聞かんかな。

○蔦　東京　松本翠子

春たけて蔦は萌え出ぬ冬の木に。
なつかしみ、森と抱きぬ枝に幹に。
なよ〳〵の百手優しく緑葉の
衣掩ひし、あゝ床しさよ——。
「語らずや我夫よ、去年の睦言。
思はずや去年の戀しみ、秋の別離
一季の冬は逝きけり眠る間に。
風の音は打絶えて、微風は
栽培——の御宣示めしぬ野に山に。

あゝ我夫よ——。
妾は生ひけり、自然の育くみに。
今よりは君が御胸に抱かれて。
常世盡きざる自然の美き香に。
ひた醉ひて歡樂の夢を語らん。
いとし我夫——。

○追懐　越後　川島わか葉

見めぐる峰のふところに
雲と山とのさゝめごと
朝の清き戀見れば
流石にそなた丘つゞき
花も昔の色に咲く。
香てはめてし花なれば

○五月野　福島縣　坂内　銀鈴

五月野は若葉の香り

手向し萩の音もなく
しをるゝ夕は何となく
身にこたひある思ひ出の
いたみもしみて覺ゆるよ。

あゝ風なくて掾まとふ
蔓一ふさのゆるぎには
面影失せる八千草の
下に朽ち行くなき君の
聲を聞きたる心地あり。

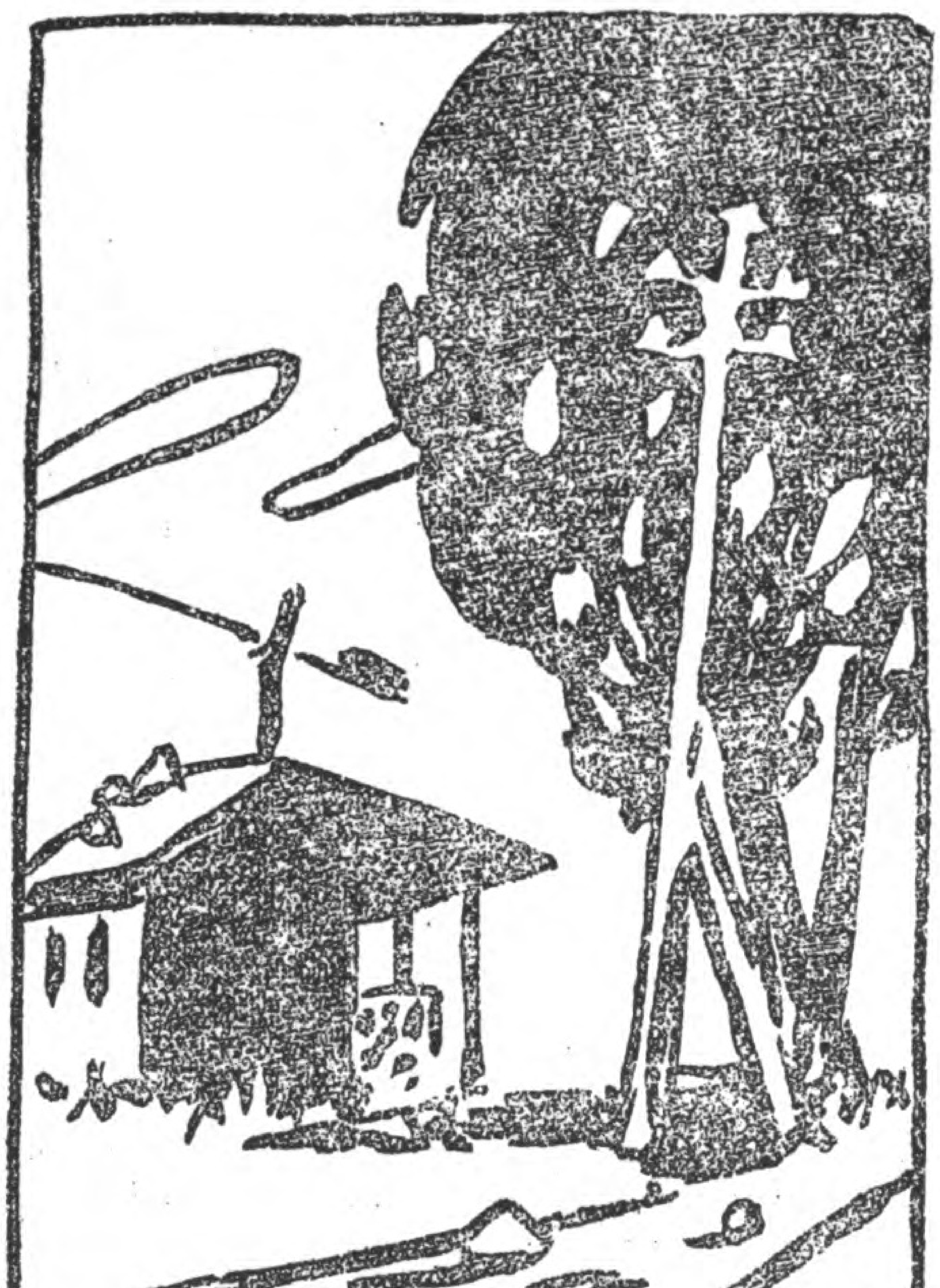
かの森透いて夕照の
たゞよふかげにさすらひて
もだしに沈む人あらば
誰が思ひ出の一筋に
かばかり落つる涙ぞや。

○暮色

静岡縣　富永朗子

鈍色の雲あか／＼と
西へ西へと流れながれて、
黄昏よ、眷きさらぎの、
薄むらさきの、山やゆかしく
白く光れる、川うつくし。
夕榮の天、一層赤う、
暮雲は金色の縁して、
唯深紅なり。
黑み行く大御空、
指環に似たる星一つ、
彩雲の上に輝く。
黄昏は次第に過ぎて、

眞畫　南多摩　中島縫子



夕榮のいろどり漂れ、
紫の山黑ずみて、
美しき川の光りも消えて行く。
唯大空は、
星姫の數かぎりなくをどり／＼て、
星の賦を歌ひやすらし。
天の川、
唯しら／＼と、
西北より東南に流れ、
夜の幕は、茲に下りけり。

○涙の人

長野　小岩井民子

寂寥行く、夜大空の、星にふけりて、
たゞ一人、語らふ詩の、人もなく、
無量の想像胸に、秘め、詩の人もろき、
涙あり。
飛ぶ、小雪の冬の路、桃色あせし、
罪衣やせたる内、脊き手に、
車ゴトゴトものうげに、囚人、
涙あり。
鐵路鐵船六千里、故郷をじして、
歳五つ、夢うつゝに、故郷を思ひ、
或日うれしき、雁の音に、他國客に、
涙あり。
枯野の冬の、夕まぐれ、魔神の黑き、
舌もて我世の、豐をなつくし、
吹風寒き、杜の中暫人ひとり、
涙あり。
枯葉から／＼土の、上に風に追はれて、
南にかさ／＼と、飛ぶ、午後の冬、
道分かれ行く、山の原旅人こゝに、
涙あり。
病の神に、はこばれて、病床二百の、
日を送る、…あゝ若き子の、常業の、
文まなぶべき、すべもなく、病人常に、
涙あり。
「燐寸」、に「煙草」に、「新聞」「新聞」に、
「燐寸」、
「煙草」と、人あししげき、停車場、
我よき人を送り來て、發車のをり、
涙あり。
暮行く夕、門にょりもつれし髮を、
改ひつゝうすき眼瞼をかろくとじ、
黄金の夕陽、身にあびて、戀の少女子、
涙あり。

○わが戀　上總　四之宮凌子

一夜さ　紫匂ふ碧梧、
花摺衣ならに姫を現じて、
殘る香なづみ乳を戀ふ稚な心に、
懷こげ眸めてみ空にあこがれ抱きぬ、
白羽ゆめの羽、かろらに人を魅ひつゝ、
色なき波の音深う胸をうちて、
私語そゞろにほのに血こそ通へ、
優顏まぶかに、うばら、匂ひ寄るよ、
ふと、もえし夢小草紅小花の、
かげ似るあこがれ――己がすゞろ心地、
培かふ手も無く乾びてさゝら實の如も、
かすかに落ちぬ、波なき水涯、
わがこひを後に立ちて靜にのぞまぐ、
よう似たるゆめの跡、あはれいいづく、
ほの白のなきがら葬れる塚は
薄靄ゆらぐ風情に――

○濕地　常陸　小松崎なほえ子

野なる藁屋の荒壁の
千割にまとふ蔓草や
曇り日ざしのてりはゆる
懇しき色の障子窓
羽よはき蝶はなよ〳〵と
とぶに力のもろきかな
みよ我が胸は濕地
うれひの艸のいや茂る。

○夏の雲　相模　鍋田靜子

獅子形の雲東に流れ、
象形の雲後を追ふ、
船形の雲又象形の、
雲を追ふ面白や、
夏の日の雲鬼ごとか、
はた戰か。――
雲と雲追ひつ追はれつ、
かさなりて空に疊、
流しゝが如雷どろ〳〵、
たちまち雨のふり來り、
百戸の小村、
泣く子の聲高うわめく。
たちまち雨はれ束の、
空より山に虹の橋、
子等は集ひて笑顏戲。

○雨蛙　讃岐　白ばら

裏の稲荷の　華表際
紙の赤旗　狹きまで
褪くちたる　杉木立
粉糠雨ふる　そが中に
雨能りなく　雨蛙
文に飽きはて　庭に出づ
空は曇りて　氣は重く
眠催す　鳩の聲
小池の中の　浮草に
キキと雨呼ぶ　雨がへる
草ばにすだく　秋虫の
聲變へて　秋更けて
桐の一葉に　霜ぞおく
帷やせたる　柿の木に
吊されし　雨蛙

○行く春　甲斐　勝村もりよ

からたちの、とげに牡丹の、花さして
惑はしの色をつくりてありければ
夜は朧、花紅ければ、少女なれば
よりそひぬ、いばら垣根に、わが額は
かき破れ、血汐流れぬ、頬傳うて
あゝされど
神やはらかき御手もておさへ玉へば
わが傷癒えて、痕もなし

○妾や越後の花賣女　越後　大森春子

妾や越後の花賣女、
雨て紙衣がぬれたとて、
脚半の紺があせたとて、
籠の緋桃が薫り候。
馬鹿にしやんすな亂れた髮を、
何んのリボンが欲しかろば、
園にや五色の雲ゆるぎ、
天使黄金の羽をのべて、
花があいたか妾戀しいか、
晒手拭に蝶一ッ。
馬鹿にしやんすなボロ着たとても、
風通お召にや薫りがあろか、
妾のゆかたは花から醸た、
蝶々よはせる味酒の
露て淤み出た花の模様。

新論文　編輯局選

▲規定　論文と云へどむつかしき事に限らずやさしき議論を歡迎す、同じく二十四字詰三十行以内、半紙又は罫紙に認め一人一章限り、投書締切は毎月十五日、懸賞は甲種に據る。

二等　○農業と投書

靜岡縣　貞水孤讀

農業は樂しいものだとか田園生活は神聖な樂園だとか隨つて希望も煩悶もないように、ほんの手の先に有る物を取つて來て食べて、何事も思はず體に任せて働いて心はまるで遊んで居るかの樣に此頃の女子文壇の投書に時々見えますが、こんな事を御投書なさる御方は農家の娘ではなくて、萬一農家の御方なら豪農の御孃樣で、遊樂半分、お針やお料理が三部、鎌鍬持つのは其中二分か一分で、時折の慰みに野良へ出る御方が御投書なさるのでせう。何か珍らしく書き並べて文壇誌上に人の目を引かせたく、工風に工風を凝らして面白くもおかしくも、變にも奇にも組み立てゝ投書なさるてせう、さすれば誌上も賑かになつて至極面白い。けれ共田園生活はそんな、木に餅のなるやうな鹽梅式ではありません。田舍もなか〳〵薄情であつて、互に掻き込む工面ばかり考へてる人々の有樣ですもの、ニタニタ笑ひして居れば迚も生活が出來ませぬ。物價は騰貴して諸色は沸騰した。皆樣は農民の艱苦を御存じてすか、之も我子可愛や、我家大切よと思ふ心から僅々五十の短命と知りつゝ、晝夜あくせき働くのです、如何程豪農でも勘定は勘定、猶更酷い、まして中以下の農家でどうしてそんなうまい暮しが出來ましやう、年百年中雨風に曝れて、襤褸を纏うて粗食で勞働して、手足は鬼のやうにふしくれ立て、六十以上になれば若夫婦には憎まれて、涕水を垂らして死んで了ふかと思へば、まあ妾等は百姓は厭だ、どうしても厭々、何か外の家へ嫁きたいと思ふ時が常中です。けれども農家の文壇愛讀者たる妾達多忙で疲れた寸暇に一生懸命作つたものを投書して、日夜忘れず待ち兼ねた月末の本誌を夢中で搜しても掲載してない、あゝ又もや沒書だ、と我に返る時の失望、落膽、口にも筆にも云はれたものでない、若しそれが末班でも掲載してあつた時の其得意、嬉しくて堪らず、其後、日々、我文は何度も〳〵繰返して讀んで見る。願くは女子文壇の記者樣、妾等の如き勞働の夜中、疲れた寸暇に苦作して投書した作文こそ、見落し給ふな。

思ひ切つて能く實際を述べました、如何にも田園生活の神聖など云ふ

事は嘘でせう、繪に描いたお姫様の若衆揃じやあるまいし、さう〳〵きれいごとでは田園の生活もなりますまい。此篇の文章はこども〳〵してゐるが、眞の情緒が現れて居ます(評)

三等　○現時の結婚觀

紀伊國海草郡　木下春子

私は本年の四月、試驗休みで歸省して居て、近隣(中流以下)の娘が、他家へ嫁ぐ有樣を見て、思はず長大息を洩らした。先づ媒介人の言を聞くに、田地が何町何反、相互當人の容貌の善惡、色が白いとか黑いとか、丈が高いとか小ぶりだとか、持參金が何十圓と、決して當人の敎育性質、家風習慣などには注目しない。媒介者旣に此の如くである、しかも其當人親族などに至つては、更に言ふに忍びない。着物は裾模樣、帶が何下駄が何、腰卷が何、似合ふ似合はぬ、うつりがよいわるいと、心配するに足りぬことのみ心配し、敎育が足りないとか、己が性質習慣が少しよくないから、注意しようとか、最も心配すべき事は毫も心配しない。而して又其兩親や親族も亦此弊を脫去する事が出來ない、否寧ろ其子女を益々此弊に引入れつゝある。其貰う方でも其通りで第一持參金の多少、第二に容貌の美醜、第三に支度のよしあし、などを注意し、敎育の多少、性質の善惡、などは毫も念頭に置かぬ、實に痛ましい、現時の結婚は、人間をくれるのでない金をくれるのである、着物をくれるのである、人間を貰ふのでなく金を貰ふのである、着物を貰ふのである。金や着物をくれたり、貰つたりするのに、大切な箱入娘をだしに使ふのである。私はむやみに、よい着物を着るなとは言はぬ、勿論相當に飾るべしである、が餘り飾るのはよくない。見よ今日絹の羽織に三ッ紋を付け、高い帽子に八の字鬚の、旦那樣、意氣揚々さもお金のありさうに見せかけるが、他人の見ない御膳の上には、其に比例すべき滋養物が列ばつて居るか。あゝ大切な食物をへらしても、お金持の風がして見たいのか、蓋し一寸見て立派な旦那樣と思はれたいからであらう。同樣に一寸見て、立派なおよめさんのやうに、見えるから、財を投じ非常なくめんをしても、立派に飾りたがる。

現今の仕方では、身支度に少なくも百二三十圓はかゝる(中流以上は敢て言はず)、之れ丈けの大金を以て、敎育したら、立派に普通敎育位、なし得られる。

人間をくれたり貰つたりするのに、持參金が何の必要であらう、此れを以て有益な書物でも求めたら、充分に智識を開發することが出來る。

此の如くしたならば、何も六ッかしい事はない、敎育は益々發達し、結婚なるものも、金や着物のやりとりでなく人間のやりとりになり、卽ち眞の結婚たる目的を達する事が出來るであらうのに、悲しいことに、世

間一般の風習、さう急に改めることは出來まい。

むきになつて憤慨を初めたのは甚だよろしい、平凡な陳腐な問題でありながら、地方などては未だなか／＼舊習が除かれないやうてすから先づ諸嬢自らが革新の先驅者となつて鬪ひたまへ(評)

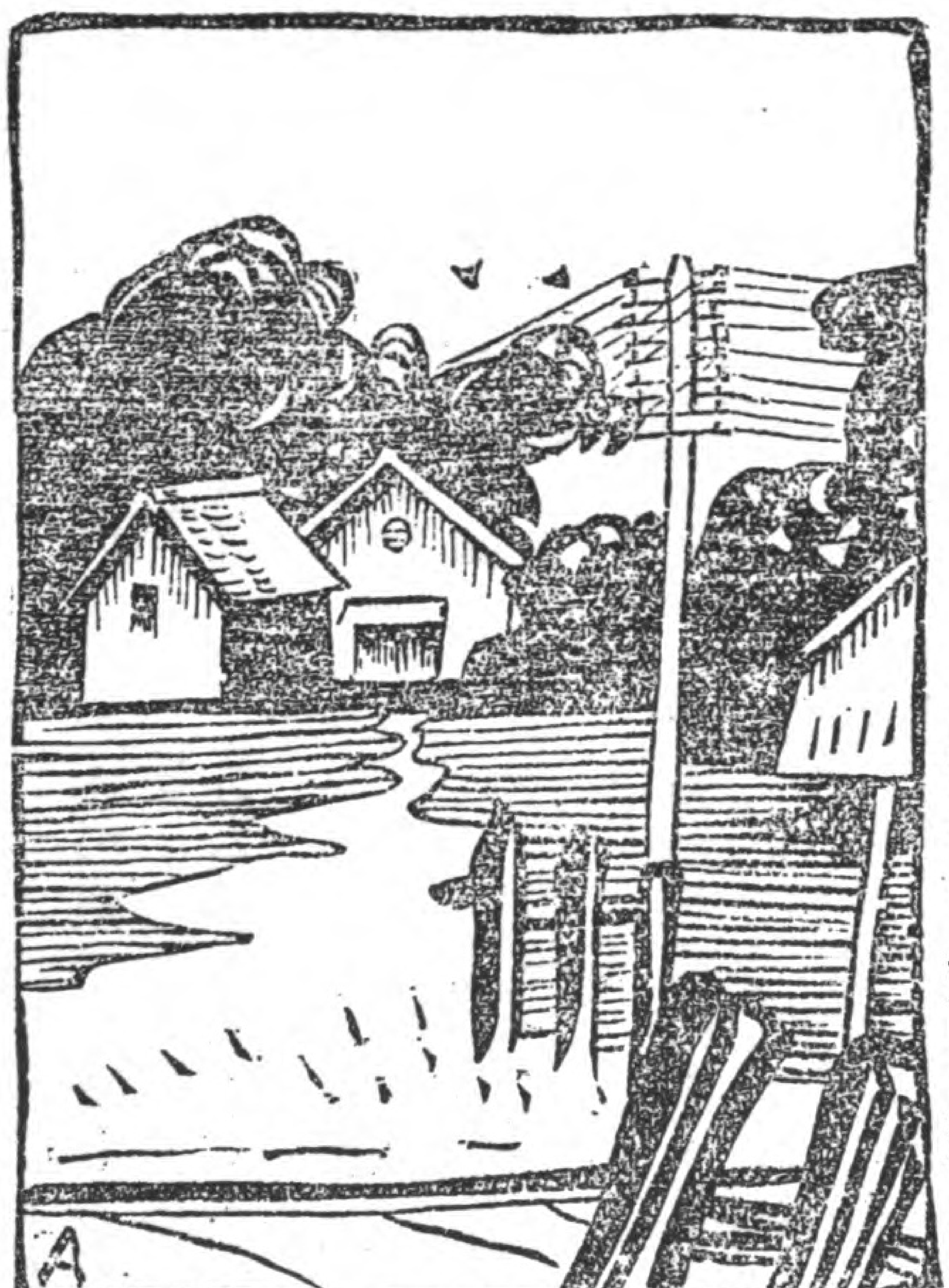
四等

○容貌の美醜

備後沼隈郡草戸村　中山八千代

私の知つた家に十四五の男の子が居ました、此子は身丈は眞直に延びながら心は非常に曲つてゐまして、子供が喧嘩をしたと云へば相手はいつも此子てす、近所の果實がなくなつたらいつも此子です、そして又其顏の獰惡な事はとても人間とは思へませんでした處が其後此子は指物師の處へ丁稚奉公に參りましたが、近所の者が眉を開く間もなく十日も經ぬ内に歸つてあばれてゐました、それから八百屋呉服屋菓子屋下駄屋と幾度か行たり歸つたりしましたが、とう／＼文具商へ落着いて勤めてゐたそうで、一年計した時一寸歸りましたが態度から口調から初の腕白者とは思へません、殊に私の感じた事はあの獰惡てあつた顏が優しく人間らしくなつた事です、て私は顏の美醜は將來醜い人もありませうが一つは其心だと思ひました、性來醜い人も心が美しかつたらどこかに優しい處がある者です、たしかにあるてす又美貌を天から授かつた人も心が曲つて居たら、どこかに其美を損ふ樣な險惡な相が現れるてせう、て私は皆樣に白粉を塗つて外面を粧ふより先づ心を美しくして頂き度と願ふのてす、てはどうしたら心が美しくなるかと云へばそれは覺悟てす、併し非凡な人てない限り覺悟を以て心を美しくするのは困難てす、私が申ますは「心を美しくせよ」と云ふ言葉を口の中で繰返すのてす、人が氣に觸る樣な事を云つて腹立紛れに一口でも云ひ度時「心を美しくせよ」と、口の中て繰返してだまつて堪へるのてす大切な物を下女がこわして泣き度程、腹の立つ時「心を美しくせよ」と口の中て繰返して笑つて堪へるのてす、何ても不平不滿の時「心を美しくせよ」を繰返すのてす、私は之をクリスチアンが聖書の言葉を繰返す位な感てやつたらよからうと存じます、併し何も彼も「心を美しくせよ」て默つておいてなさいと、云ふのては御座いません無論程

ふみきり　宇都宮　青山きよ子



度がありますよ、兎に角形式より內容に重きを置いて頂き度いものです、內容が美しくなつたら形式は自然に立派に整ふて參ります。

皆さんの參考になる議論、決して空論でない（評）

五等

○結婚後の婦人に就て

函館元町七一的場方　藤本鳥羽子

私は結婚後の婦人に就ていさゝか愚な觀察を述べて見ませう。大底の女子が結婚して了ふと人生の重荷を下した樣に安心して終つて、處女時代の樣に元氣がなくなり。研究心もなければ勉强もしない、折角修養した學理の應用をするでもなく、唯三度の食事に衣服の世話。娘時代には隨分美文や小說も作つて雜誌などへも盛に投書したものも、子供の一人も生れうものなら、それこそ此度はもう日々の新聞や雜誌さへめつたに見る事はない樣になり、何日立つても髮も結はねば、顏は幾月あとにそつたものやら、二日經ても三日經つても鏡を見ねことさへある、こんな風で每日々々忙しい忙しいと食事の世話やおしめのしまつにつきゝりで處女時代に想像した理想もホームもあつたものではないそれでは十九世紀や十八世紀の婦人もあまり異た事はあるまい。廿世紀の婦人としては今少し趣味のある生活がして頂きたい。

それかと言て朝から晩まで化粧三まいて、讀書や音樂にばかり心を勞して家事をなほざりにしたり、或は又貴婦人氣どりて、やれ音樂會、やれ慈善會と家を外に良人の出入の世話もろくにしないで。交際々々と流行の衣服や髮かざりにばかり心をいためる樣なのは尙更困るが。

兎に角前者と後者を折衷して、どこまでも婦人の美を失はぬ樣、趣味ある家庭の花となつて貰ひたい。

論旨は大贊成、未だ盡くしてはないが時弊に中つてゐます、一部の觀察眼を具へたものでせう（評）

秀選

○手紙を見て感じたるまゝを

野の花

此頃の皆樣の御手紙を拜見すると、皆が皆さうとは申されませんが、大ていの方は候文と言語體とをまぜてかくやうでございます、あれはよしたらいかゞでせう、例へば始めの方は何々に候とかいてあるかと思へば、中ごろになつて「ですから」等と御話のやうに書いてあつてよんで居りましても何だか變な感じがいたします。皆樣は何とも思ひませんか？私はあのやうにかくのは全然よしたがよいと思ひます。

それからペンや鉛筆をもつて洋罫紙にはしりがき、まるで男のやうではないでせうか。

又折角半紙にかいたかと思へばペンシエルで「よくつてよ」等とかいてあります、いつ他の人に見られないとも限りませんのにかやうな書方をしてをつて恥づかしくないでせうか。又之を見た人は何と申しませうほめるでせうか。

それよりも巻紙に水茎のあと美しく存ぜられ候等とかいてありましたらどんな感じがしませう、きつとよまないうちにまあきれいなことゝいつて先づ喜ぶにちがひありません、又ごく親しい御友だちとか姉様とか妹とかに上げるのなら御話し體でもよいでせう、しかし之とても半紙なり巻紙なりへなるたけございます言葉で、墨色うるはしくかきましたら戴いた人もどんなに嬉しいでせう、そして筆を持つてかきつけますと字の稽古にもなつてまずかつた人も上手になり人には嬉しがられこんなよいことはないではございませんか、私は此方を大に御進めいたします一寸感じたまゝを申のべました。

女らしい論です。手紙は其人の品性を表はしますから全く此言の通りです(評)

髪結ひ　北多摩　原　よし子



○私の母様　越後　梅　香　女

私の母様は今年三十九私は獨子ですの、ですから私は大さう可愛がられて居ります、が私の母様は決して、姑息の愛におぼれるやうな事はなさいません。一事萬事皆私の行末好い様にとばかり、考へてなさいます、そうして常に私に、有形の財産(即ち土地田畑金錢など)は譲りたくもないし、よし有つた處で、災難に遇へば無くなると云ふ事もあります、けれども無形の財産(即ち學問技藝など)は何様な災難に遇ふとも、自分の命が有る以上は、決して無くなる事もなく、又決して人に取られる心配もない、ですから私は何様な事をしても出來得る限り、無形の財産を譲るつもりですと仰つて、私は其爲めに懐しい御兩親樣の御手許を離れて。勉强する事六年間、やう〳〵昨年ともかくも、母樣の御陰で獨立の出來得るだけの、財産を得て歸宅致しました。留守中私は母樣に、さぞ御さむしいで御座いませう、申上げても、イヱ御前の爲めだと思へば、少しもさむしい事はない、御前はよけいな事を考へずと勉强さえすればよいのですと、仰

いました。又私が或る學校を卒業して、他の學校へ入學する時母樣は、種々御教訓の御手紙の末に、よき上になほもよかれと親心、と云ふ俳句が書いて御座いました。私は母樣の御心の有がたさに、暫くは顏も得上げずに泣きました私は片時も母樣の御仰せにそむかぬ樣、此の上ますく出來得る限り修養を怠らず、母樣の御恩に報いやうとのみ心掛けて居ります。

評釋、少しの疵もありません(評)

○小説に就て　四谷　八重子

日露戰爭、以來上流社會の家庭紊亂は想像以外でこれを發表しないのは新聞紙であります。而して近來その罪を小説作物に塗付するに至つては心外に堪へないのであります。むづかしい事は申しません。目下流行してをる處の、何主義やらと申すのも、現今の社會の狀態に比して、當然起るべきことゝて、敢て天文學者が新なる星を發見したやうに、驚くにあたらないと思ひます。

小説と傳染病あつかひ、作者を○○主義黨と同じく取扱ふは殘酷ではありませんか?。云過た所がありましたらお許し下さい。妾は思ひます、小説は誘惑の紹介物てはございません。常識のある方ならば、この中毒に犯されることはなからうと思ひます、萬が一、ありとしたならば、其人は小説の中毒にあてられたのではなくて、自己の生慾の中毒にあてられたので、斯る人は小説を讀まぬ以前より犯されて外面に現れてをらなかつた人であります。

見るなと云へば、見たくなり、食べるなと云へば食べたいのは人の情慾の然らしむる所で、少しも不思議なことではありません。餘り母親でもガミく〳〵する子供は、いこぢの强い子供であります、束縛すれば束縛する程小説に限らず萬事弊害の多いもので、大人振る譯てはありませんが、家庭を絕對的放任主義になさいとは申しません。然し學校て小説の閱讀を禁じても、若し家庭が放任主義であつて亂讀する人がありとしたならば、何て其禁止の効がありませう? 糠に釘てあります。妾は斷言致します、小説を裏面から深く觀察したならば、必ずやその奧底に多大なる教訓が含まれてをると申します。これも讀者の考へ一つて、すべてのものが斯樣とは申しません。妾は大に小説を讀むことをお勸め致す者で、これほど社會の狀體を知る簡便な方法且廉價に得らるゝ道は外に斷じて有りません。若しこれに反對の論者が數萬の本誌讀者にありますならば妾はその方を小説を讀む資格のない方と申します。

小說家の味方が一人ふえました(評)



和歌

佐々木信綱先生選



△規定　殊更に舊派と言はず、從來の如く清新の調を望む、原稿は半紙を用ゐ一人一首を限りとす、本名を記入すること、締切は毎月十五日、懸賞品は乙種の規定に據る。

二等

熊本市、古川町藤本善助支店内　加藤白薔薇子

大阿蘇に絶えぬ煙りは紫の霞となりぬ肥の國の春

三等

安房國安房郡大山村　兒松猶子

まろやかに並べる丘は若草の色にくれたり薄月のそら

四等

伊豫國越智郡岩城村　福井白百合

美しと見しは昔よちる花の今年母なき我に悲しき

秀逸

◎本所　田中久子

夕月は榛の木立を中にして母待つ門をほのにてらしぬ

◎群馬縣　ちすゐ子

何となう人にまたるゝ心地して夕戸ひらけば萩の花ちる

◎石川縣　茶木ゆう子

潮がすみ春の海行く七つ帆の一つ一つに朝の風吹く

◎攝津　和久薫子

ながき日を青葉にそゝぐ皐月雨小鳩の群の今歸りくる

◎大阪市　龍子

下京や君によう似し人ふたり傘して行きぬ春雨の朝

◎鹿兒島　山崎秀子

春の磯潮のひゞきに父母の住みます遠き島のこひしき

◎弘前市　佐野てる子

影の如人はむれ來ぬうす靄に灯かげおぼめく春の夜の街

◎筑前　田中登與子

日の御神七色の手綱ひきませば曉の白駒さとかけり行く

◎宮城縣　菊地葉子

如月や病の窓にそとよりて夕雲ながめ君をしのびぬ

◎石見　八杉都志子

紙窓に軒の干菜の影さしてもの靜かなり雪解の晝

◎京都　壽士星琴

美しき鳥の羽風にほろ〳〵と椿こぼれぬ暖かき日よ

◎秋田縣　佐々木千代子

咲つゞく菜の花小道少女等は繪日傘さして見え隠れ行く

◎下野　川村芳子

朝月夜柿の若葉の葉ゆらぎにしづく亂れて山鳩のなく

◎下總　三橋芳枝

夕日うけうら枯立る野の一木人の老い見る寂寥に似て

○　横濱　鈴木菫子
蝶ひとつ夢よりさめて飛立ちぬ菜の花白き春の夜の月
○　下野　くに子
戸あくれば軒にたゞずむ鷄の尾に雫して春雨の降る
○　直方町　輪田八千代
寂しさに小窓に倚て散花を數へても見つたそがれの頃
○　岩手縣　富士根小枝子
卯の花のにほふ垣根に小雨して月なき宵に啼く時鳥
○　群馬縣　須藤みどり子
目をとぢて夕鐘きけば幻影になき母君の面こそ見ゆれ
○　大阪府　西村千代子
菜の花の花より花に飛蝶はたが夢路より出てきにけむ
○　駿河　溪園女史
渡し呼ぶ聲長閑なり河ぞひの桃さく里は今ひるにして

○　大阪市　紫雲女
緋桃散る小徑ぬかるみ雨はれて深山櫻に七彩の虹
○　駿河　清水幸子
なつかしき友に別るゝ其夕べ淋しき我身月にてられて
○　秋田市　佐藤たか子
八千草の枯れゆく庭に白ぎくの霜を凌ぎて獨り匂ふなり
○　下總　山本きかど女
江のあたり花咲く小村ひるたけてひな歌細うおさの音する
○　靜岡市　高富政子
いさぎよく死れといさめてやりし子も呼びかへさまくほしき秋かな
○　佐渡　相田かすみ

吹く風のこゝろになびく青柳の眉もやさしき姿なりけり
○　備前　古武智香子
春日和花の香迷ふ蝶々の別れて逢ひてあひて別れて
○　長崎　廣田良子
鶯も谷間をいでゝ梅ヶ枝に初音もらさん時もきにけり
○　香川縣　松女
亡き母をかたみに忍ぶ十六夜の月よりすみぬ遠の笛の音
○　大阪府　祝綾子
若草の萠ゆるを見ては胸の血の湧きいでてむとすうらぶれの身も
○　筑前　芳賀しげる
咲きぬとて花はつげれどおのづからそよ吹く風の末薫るなり
○　豊後　菅原芳子
火の色のあかき花咲く森かげにまぼろしにして君を見しかな
○　福岡　廣瀬櫻子
草の上五反の帆行く長堤の極みに家と桃見る日かな
○　上總　森ふみ子
夕暮のしらべ床しき琴の音に欄干近う飛ぶ螢かな
○　神戸　みなしご
海の邊に立ちみる度に思ふかな我故郷の濱やいかにと
○　大阪　坂靜子
わが顔の恐ろしくてや里親にしかと縋りて泣きぬ罪の子
○　越後　岸はつ子
くしき香の薫じたつ野の眞晝時行手に霞む杜小さき
○　紀伊　大川栞子
佐保姫のたもと長閑に春の日は山里遠く霞こめけり
○　山城　幸子
亡き母のうつしゑ出して思ふ哉有にし時の夢や戀しと
○　靜岡　植木伊志子
國はいづこ齢はいくつ名はなにと問へばただなく小さしゝ舞
○　丹後　水口よしゑ
むらさきのその袖長く春の日にさくらみそなう禁の君

○　日向　みどり子

皐月雨はれて今宵は月淡ふ山の湯かけて啼くほとゝぎす

○　伊豆　小澤香芽子

うれしとき悲しと聞くも我が心磯打つ波の音は變らで

○　信濃　長谷川うめ子

人の世やあゝ幸薄きといま知りぬ母逝きませる春雨の夜に

○　常陸　宮本しげ子

あけぼのの富士より醒むる秋津洲めぐるうしほの聲にして

○　伊豫　福井壽美子

藤の花うつろふ池の藻を亂し緋鯉遊べり夕日をうけて

○　相模　藤原下枝子

ほゝゑみて這ひ寄る稚兒の可愛さを君に見せます日は近づきぬ

○　神戸　三澤政子

星戀ひて葦笑めるを鈍牛の蹄にかけてにじり行く世や

○　福島縣　添田松丘

春の野の花にながめもあかぬまに空はかすみてくれんとすらん

○　遠江　永田玉枝子

賑はしき都の旅も夕されば眺めやらるゝ故郷の空

○　福島郡　小林としゑ

雨晴れて沖の島山薄霞白帆の波に隱れ行くなり

○　土佐　森田久見子

雨はれて稲葉に宿る白露の玉さへゆらぐ秋の夜の月

○　下之關　木藤芳枝

霞む朝花賣る少女過ぎ行きし後より薫る緋桃白桃

○　美作　權田登久野

田舍の花　千葉縣　松ヶ枝浜江



梅は散り櫻開くる彌生月戀しき君は都におはして

○　岩代　波流子

夕焼の森の中頃白鳩の柔毛飛ぶと落花のして

○　周防　相本たれ子

空高き峯の浮雲ぬぎ捨てゝうさぎ抱きて昇る月かな

○　奈良縣　西田鶴子

佐保姫の霞の衣ぬぎすてゝ立ち行く今日ぞ名殘惜しけれ

○　越後　眞柄廣子

留守居して淋し夜なべにしと〳〵と板屋根たたく春雨の音

○　大坂　田中とき

天人のすてし羽衣落る如見えて白雲空を漂ふ

○　沼津　長井とら

春雨にいたくうたれつ鶯のぬれて啼く音の色は變らず

○　福岡市　兒島八重子

我宿の軒端にさける梅が香もなりなつかしき朧夜の月

○　長野縣　伊藤花桂子

永き日や亂れ心の歌いくつかきて流せし花舟なしも

○　信濃　伊藤利子

貝ふみて御そでのかげにほの動く白帆かぞふる春の一日や

○　福岡縣　ちよ子

靜かなる春のよひなり何故に姉は涙すわれもかなしき

○　神戸　田村文子

君よ君呼べど答ふは山彦の梅の香慕ふ鶯の聲

○　吉岡豐子

のどけくも降る春雨に山寺の花木れんも色まさりけり

○　常陸　鈴木花月

野につゞく庭の破戸に夕づつの影美しき春のくれかな　伊豫　勝山みどり

○萬籟の音は春雨と音かへて白梅かをる庭ぞしづけき　下野　瀧澤秀子

○雨の夜を淋しう聞ゆる鄙歌に忘れし戀をおもひ出てしか　熊本市　矢野壽江子

○春の雲流れ流れて南の故郷の山にきゆる日を泣く　尾張　秋波子

○なつかしきたらちれしのぶ夕間暮花の無常に鐘の聲する　埼玉縣　船津千代子

○訪ふ蝶の羽袖も重く見ゆるかな春雨けぶる菜の花の道　若草

○雨の日を片山里にうつら病む二十の春の我思ひかな　青森市　村林やす子

○ほの暗き小椽に立ちし若き女の柱にうつる洗髪哉　神奈川　山田つま子

○幾度か夢に通ひし古郷の君が心は血にぞ染らん　伯耆　湖濱さだ子

○佐保姫の舞ひなす布の長う來て谷の白百合靜かに開く　大坂市　山内渓子

○いさゝ川岸の庵に百合咲きぬ窓の少女の笑にかをりぬ　東京　野澤光子

○古寺の池に遊べるあひるかやの梨花ちり寶靜なり　鳥取　山田ます子

○箏の音に人のこゝろもうかざらむさくら花ちるおぼろ月夜は　群馬縣　竹澤すゑ子

○花はなほ散りてもうきて流るゝを消て跡なき水の泡雪　伊豆　桃村子

○鵑は軒端に物を思ひ居ぬ皐月の雨の寂さ覺えて　上毛　伏島直子

○三年ぶり叔母許訪ひてあたゝかき言の葉かはす春雨の窓　函館　藤本鳥羽子

○夕月の影を眺めて花かげに少女たゞづむ春の宵かな　羽前　白鳥露枝

○嫁ぐ姿人に見らるをはづかしみ雨所るまで若かりしかな　遠江　山本ます子

○四方の田に涼しき聲の聞ゆるは涼の雨をまねく蛙か　靜岡縣　小久江淡窓

○何故に君戀ふるとて問はるとも我にもわかずわが戀ふ心　伊豫　曉子

○月出てぬ詩集の上に椅よりるりとかゞやく玉やこぼれむ　紀伊　正木菊枝

○夕日影木の間を低う輝すなり薊の草の紅や紫　埼玉　春山しげ子

○たんぽゝのいろはこぞにも變られど妹は眠りて奥津城のもと　神戸　加谷

○今日よりはまなびの庭にうゑおかんすがたやさしきやまとなでしこ　大分縣　佐伯七三子

○樂しげにもすそかゝげて岩蔭に遊ぶ少女子春の海原　北海道　鎌田しげ子

○のどかなる春の山べは白くものまだ消えやらぬもやにつゞきて　韓國　原登里子

○折々にホヽと笑ひの洩るゝなり美き二人紅梅の窓　三河　清香

○嫁菜つむ少女の影も見えずなる花散る里に昇る夕月　若狭　津田汐汀

○若草のもゆる如くも我が胸は君とあひみて戀うみしかな　佐賀縣　樋口御幸子

○山の端に八重に見ゆなる一雲は色に香に咲く山櫻花　山城　有野露子

○朝まだき村はづれ行く百姓の鼻唄聞ゆ山里の春　神戸市　久野のゑ

春雨に蘭燈もれて海棠の花美くしき夕窓の許
○　丹後　塩見千代子

蝶ならば思ふ花にも宿らましうたて人の子幸あらずして
○　茨城縣　花田美枝

母病める枕邊近かう少女子の忍び音に打つわら碪哉
○　中山道江

別れてはあじきなき世をかこちつゝまた逢ふ春を待つぞ悲しき
○　紀伊　室井美那子

藻の花をわけても見たり水底に三年昔しの影あらずやと
○　遠江　貞子

朝ぼらけ濱名の橋はとだへして霞を渡る春の旅人
○　中郡　吉岡かく子

橋だての松にたな引く春がすみたえし處や切戸なるらん
○　飛驒　上島むら子

なつかしの姉に送らん梅の花文につゝみて其香りなば
○　上総　能城久子

ゆあみして秋涼しき夕暮に小舟浮べて螢狩かな
○　八王子　富本登美子

ゆめさめて十年の憂さを今こゝに今日ふるさとの月を見るかな
○　横須賀　齋藤松代

佐保姫のかすみの衣袖透きて白帆三つ四つ春の海見ゆ
○　膽振港　秋子

五月雨のつと晴れ空の雲間より霞たゞよふ春の夕月
○　豐後　桃の家しづ

卯の花に月よき宵の河原道そゞろあるきに聽くほとゝぎす
○　伊豆　堀井りゑ子

おさらひ　京都　高野八重子



初夏の風そよ〳〵と萍の漂ひより來うぶすなの池
○　丹後　小谷保子

落穗さへあまりある世は冬の田に餓たる鳥の聲も聞えず
○　播磨　佐久間ゆかり

緋桃散る小川の岸にたゞずみて君ます方をなつかしと見ぬ
○　小樽　清水靜子

風なぎて藻の香潮の香の匂ひ夫の君あさる大洋にして
○　岡山市　池田芳子

わぎもこが丹塗の下駄の鈴とよき音ゆれん三つ叉の花
○　和歌山　市村重子

流れゆるき小川の晝の月みえて櫻ちるなりみづ清き里
○　德島縣　中村勝子

美しき薰の高き花園や南の國に春の風吹く
○　千葉縣　蒔田靜子

にはとりの鳴く音靜に風なぎてかへり花咲く二の宮の里
○　日本橋　石川靜枝

夕立の晴れし雲間に月見へて木間に涼し笛の音して
○　愛媛縣　月浦光枝

眞盛りの櫻に遊ぶ蝶々の樂しそうなる女夫連れ哉
○　紀伊　木下春子

鶯のなく一聲に咲く花の眠さめゆく春のあけぼの
○　ゆき子

亂調の琴かきなてゝ踊り行く若き二人に花散りかゝる
○　沼津　渡邊とよを

古郷の松原みちに近づけばまづなつかしき浪の音する
○　長崎市　北尾小百合

○物思ふ名は恐ろしき鬼百合のいとうるはしき花の姿や
丸龜市　よし子

○佐保姫や花のもすそを敷き初めば高く低くと蝶のしたひ來
長崎市　一瀨白菊子

○春霞む四方の山皆たそがれて朧月出ぬ丸き山の上
安房　兒松ひやく

○春川の岸の花かげ柳かげいづれのかげに舟こぎよせん
栃木縣　夏子

○我が庭の一もと櫻咲きそめて春の日長くにはとりの鳴く
岐阜縣　日野禮子

○妹のやさ手のうへに眠る子の頬にも似たり牡丹の花は
德島縣　上野浦花子

○逝く春のおばしま近き夕窓や君を偲びて涙こぼれぬ
津市　佐々木光子

○入相の鐘の音低う日は暮れて淋しく散りぬ緋桃白桃
三重縣　小林靜子

○捨てられて流れ來りぬ花一枝清き胡蝶の夢をのせつゝ
岩代　武藏清子

○春たてど風まだ寒くふる雪はそらにや冬のなほのこるらん
靑森縣　久保石子

○さら〳〵と茂りを吹きし春風を落葉ときゝぬ春の悲しみ
富山市　ふみ子

○紅梅の今年なかりき鶯の宿はと問はゞ如何答へむ
大阪市　藤原美代子

○小雨止み遠音の鐘の吹かれ來て行く島消ゆる故鄕の空
常陸　塚本幸子

○春の夜やほのかに霞む花と月彼處の小田に蛙ひた鳴く
三河　みどり

○古しへは主もありげの梅の花さびしう野面に咲き匂ふかな
泉南郡　金田芳子

○歸路に西の山の端眺むれば黃金色の雲うすれゆく

○花言はず少女語らず山吹の咲きたる門に春雨の降る
北海道　小林喜代乃

○大寺の櫻のもとや日もすがら西の御國をおも影にして
安房　くら子

○水馴れ竿とる手に櫻ちり〳〵て岩間をぬふて筏下り行く
若狹　田中貞子

○母心今朝出て行きし子供等はなぜにかへらぬ夕立の雨
高島田富子

○けさまではまだ咲かざりし櫻花ゆふ日の影に匂ひそめぬる
筑後　田中繁子

○天のはらありのこと〳〵ゐながらにきくも樂しき朝の一ひら
茨城縣　野口咲子

○中庭のほかげのうすき燈籠に花柘榴こぼるゝあけがたの月
秋葉子

○西北へ飛びゆく雲に名をつけて歌にもよまんゑにもうつさむ
三重縣　つる子

○こゝばかり秋のあはれの外なりき稻穗刈りほす門の千町田
大阪市　辻廣子

○春雨に花のしづくをうけとめて君に送らん文書きて見ぬ
紀伊　木下操子

○見おろせば霞かゝりし我が里に雲雀長閑に風ゆるうして
常陸　鈴村勝子

○父母はなく兄は病の床にして我家も同じ春や來にけん
讃岐　竹田敏子

○美しき春の夕波月のせて花ちる磯にくだけよるかな
伊勢　越村文枝

○なつかしき君が御衣の香をしたひ仰ぐうてなの花となりし夢
越後　哲子

○少女子のうしろ姿は梅によし紅梅多きわが裏畑
神戶市　雅子

門司市　鈴木靜枝

おとめ子がいてふ返しの黒髮にすみれ油のかをりよきかな
○　紫溟　岡村みどり

歌ならぬ人をあざける心地する夜もすがらなく小田の蛙は
○　沼津　山縣梅園

鶯のまだ初音さへきかなくに誰を友とて梅の咲くらん
○　愛知縣　永田舞鶴子

すら／＼と風に吹かれて菜の花のひら／＼散りて蝶の出て來ぬ
○　相模　中川綠子

下京や被衣の人の忍びゆくかげもおぼろの春の夜の月
○　日本橋　石川文代

春雨の音する窓に思ふかないやなつかしき故郷の友
○　伊豆　尾崎そひや

うすがみに文したゝむと若き人萩ちる窓に暫したゆたふ
○　山城　村田まさ子

音高き瀧のひゞきをよすがにて知らぬ山路をいくめぐりつゝ
○　羽後　田中千代子

岩の上を清水流れて蟬鳴くや峠路三里風綠りなり
○　青森縣　葛卷りさ子

わが宿は梅の社にとなりしてはねつるべ高く鶯の鳴く
○　下野　青木榮子

さまざまになぐさめられぬ我聞え人に知られて弱身をぞ思ふ
○　上總　鈴木梅子

鳥のあとは學びてあれど雲の上にのぼる道なき身をいかにせん
○　濱田町　和田岩子

ともし火の明石の浦に夜るかけてゆきかへりなく濱千鳥かな
○　大阪　今西こゆき

我姉の嫁きます宵を裏庭の藤咲き初めぬ細き雨して
○　常陸　松本保子

見る人のあまり笑ひに耻ぢ入りて山もかすみて面かくれけり
○　滋賀縣　池田よし子

いくたびか夢にかよひしふるさとの山よ流れよみななつかしき
○　茨城縣　楢櫻女

しと／＼と降る春雨に綠色濃かになりぬ庭の櫻木
○　下野　下河邊喜美子

薄暗き青葉若葉の影ふみてうらぶれの子が戀になくかな
○　靜岡縣　原木ふみ子

滿月の雲にかゝりて我が胸のはかなき事ぞ思ひ出ださる
○　橫濱市　初野子

心地よく洗ひ清めし髮の毛を春風ふきて又もよごしぬ
○　岩代　香川榮女

藪かげの緋桃花咲く妹が家琴の音やみて春の雨ふる
○　下野　梅澤哲子

若き人乳房にねむる兒をながめ書よむ夫見ゑみぬ春の夜
○　秋田縣　菅よし子

我が植し桃の林に風吹けばとなり十村の夢さますらん
○　周防　房子

谺して鳥なく野ゆき木立行き温泉に通ふ路に出てぬる
○　德島縣　中村勝子

野花咲く南の國に春見えて歌ふ少女の憐れなる聲
○　耶馬溪　房子

春雨にぬれつゝ庭の紅梅にぬれ羽打ちふり鶯の泣く
○　茨城縣　中村清女

遠居ては逢はん日思ひ相見ては別るゝ期思ひ淚こぼるゝ
○　小樽　村山きせ子

八千草も枯れて果敢なきそが中にひとりゆかしき白菊の花
○　丹後　小谷保子

春の景色心は浮きてえもいへず家も忘るゝ心地こそすれ
○　牛込　五味はな子

日は暮れてかゞり火たきぬ鐘打ちぬ畔にぎはしく蟲送りする
○　越後　山本やす子

春の山たゞ一面に白雲のたなびくさまに櫻花かな
○　茨城縣　望月

春の夜に月すみ渡る文まどに閼送らん花ちる中に
丹後　福丸浜子

○

君と今語らふ胸の輝きはくもりの見えぬ月の卯の花
岐阜縣　高見秀子

○

千代八千代にちかひし友は今はしも都の空に別れゆくかも
長崎市　松尾れき子

○

長閑さに春の思出たどりつつ小春日和を蒲公英のさく
但馬　なてし子

○

かへり路のつきぬ恨みはすげがさの中に隱れし人の面影
肥後　桑本松子

○

菫さく細き野道を過ぎ行けば歌のあるじの花の香ぞする
千葉縣　大木しげ子

○

しと〳〵と降りつゞきたる春雨にしめりて聞ゆ文を讀む聲
下野　榮谷德子

○

朧夜を白き狐の人に化し笛盗むべし東に去りぬ
杞子

○

とけ初めしうなじにかゝる淡雪もほゝ笑む梅のしずくと思へば
南豐都　月女

○

山里の我庭に咲く梅の花鶯ならで訪ふ人もなし
石見　石黒絹子

○

降りしきる雪に梢はわかれどもにほひこぼるゝ梅の初花
下野　くに子

○

鶯はまだ來鳴かれど此處もはや春の領かや咲く梅の花
播磨　小林美枝子

○

雪達磨家の砂場にこさえけり幼男子の手を赤くして
日向　琴音

○

八重霞棚びく山のおちこちのたにまにきよき鳥の聲する
佐渡　中島この子

○

薔薇薫る垣根に菜摘む少女らのリボンと見ゆる胡蝶涼しき
大阪市　生田稔女

○

夜や朧花も朧の下道を美し少女眉ひめて行く
大分縣　平田つみ子

○

味氣なき月日を送る我身には夜半の夢のみ戀しかりけり
茨城縣　須崎せい子

○

小波うつ霞ヶ浦を横にみて滊車は早や行く荒川のをち
下野　福岡きく子

○

さゝげばや君ようけかし少さき子が情燃ゆらむこの花束を
静岡縣　富永朋子

○

春風は暮れゆく野邊を蝶々の惜げに舞へる山畑に吹く
山形縣　長岡よん子

○

みなし子の哀れや乳を欲しがてに聲も細りぬ里の夕ぐれ
南豐　安岐の月

○

山の端に登りて見れば田や畑に黄金色なす菜種花咲く
本郷　朝井松子

○

立籠むる霞み森の佐保姫は花の衣に舞ふて居まさむ
千葉縣　豐子

○

木々の間に見えてはかくる賤家のあかり見て行く夜道涼しき
相樂きみ

○

我が戀ふる君が住むさと紫のすみれ咲く野の野の末にして
靜岡縣　外波山泰子

○

誰獨り落つるものとてなかりける新の庭に入るぞうれしき
豐能郡　寺部君子

○

何んとなくよき香こもりて吹く風にさそはれて來ぬ若草の野べ
上總　山口いく子

○

さびしくも五月雨森をはぐれては闇に消えゆく尼寺の鐘
河内　松風

○

千早振神の御めぐみあまれくばわがたらちねの身をもやすかれ
美濃　市川覺子

○

山櫻昔ながらに匂へども大和心のうせて行くとは
京都　田中文月

○

宵月夜並木を急ぐ鈴の音瘠馬つれて馬子一人ゆく
岡山縣　廣江壽子

白帆きえ舟歌きえて夕月夜はなれ孤島のおぼろにかすむ

○ 神戸市 加藤むらさき

物思へば小窓の藤に春の雨しづれ〳〵て雫するかな

○ 上總 四之宮滋子

蟲きくや母が昔の思ひ出をもらひ泣きしぬ少女心に

○ 豐後 工藤たまき

春風の奈良をこえては紅寶が姿かはゆう行くや大和路

○ 高槻 久子

青によし奈良の都に今も尙ふるき手振は殘りぬる哉

○ 京都 武部柳葉女

春風や嵐の山の花散て保津の川邊に舟遊び哉

○ 神戸 水守春子

蝶ぞ戀ふ菫は逝きし其如に我がのぞみさへやみに徨よふ

○ 愛知縣 小笠原久子

花かをる野路の夕ぐれ馬追うて歌ふて歸る追分のふし

○ 香川縣 松井一枝

夏姫のもすそのあたりにほへるは只一輪の白百合の花

○ 遠江 林衛子

汐干狩沖の深底にわれ行きて姫と遊びし夢見る夜かな

○ 讃岐 守谷ゆたか

桃の里靜かに暮れて夕靄の絕間に見えぬ順禮一人

○ 後志 橋本千草

七草の萌吹き出す春野邊に美し人の袖つられつゝ

○ 近江 藤野やす子

菜の花の黃金榮ゆる賤が家に少女機織る添えうたのして

○ 遠江 藤野琴月女

わが夢に別れしことは知らずあるおごそかなりや京に見ゆると



海水浴　伊勢 河村富子

○ 玉島 坪井小美榮

うるはしき尾花が袖の白露は玉さながらに散りにけるかな

○ 盛岡 四戸節子

止みもせぬ五月の雨に遠山はうす紫に染めなされけり

○ 茨城縣 外池たつ子

春霞瀧の方はおぼろ〳〵灯火ちさし川添ひの里

○ 陸奥 岩崎政子

冬の日に浮かされ出てゝ眺むれば小舟も魚もアラビアの雪

○ 神戸市 幽霞里

朝毎の君が化粧の醱れ水匂ふも床し紅梅の窓

○ 香川縣 橋本かすみ

水鏡すがたうつして行く船の影おしぞ思ふ山の端がくれ

○ 茨城縣 大崎誠子

春くれば花もほゝゑみ鳥謡ひ胡蝶が友とつみくさの道

○ 横濱 水野秀子

朧月かすむ夕の八重櫻風さそひてか花や散るらん

○ 芝 多美野子

噂の色にもまして匂ふかなみ堂にとめし言の葉の花

○ 名古屋 藤井志津子

花の上にむれてとび交ふ蝶の影消えて暮れ行く春の空かな

○ 久留米 常夏

月沈む美し曉を若出てゝ待ちませ岸に花流れ來ん

○ 靜岡縣 わかば

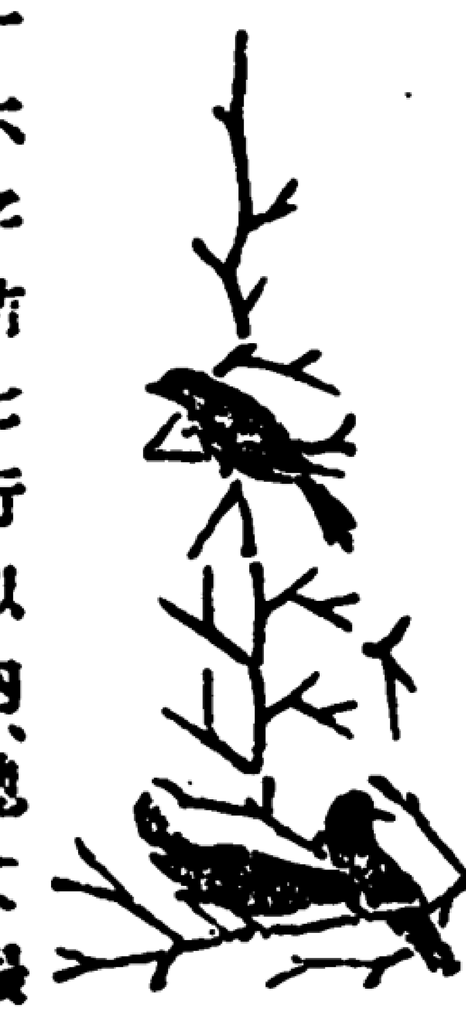
水の面に湖畔の古城かげ落ちて白雲まよふ夕暮の空

○ 兵庫縣 香川菊子

切下げの人まだ若し夕風に櫻花ちる奥都城のもと

短文

編輯局選



規定　十六字詰七行以內、總て振假名を付くること、締切前同斷、懸賞は乙種に據る。

二等　○春雨の曲

德島縣小松島町西ノ口　西野花菱

にはかに空が黑く成たと思ふと庭へ幾千萬とも數へきれぬ程糸のかゝつた、琴が現はれるとやがて木々の緑は、靜に春雨の曲をひき出しました。

奇想天來

三等　○春雨

攝津　寺部君子

前の杏は雨に花咲いて、又雨に散りそめた、今朝其のこぼれて雨に打たれて居る花瓣を何に見違へてか、雀が二三羽飛て來て、一寸啄いて見ては又こちらのを啄いて居る、這麼日は雀も困るて有う、花は絕ずひらひら散てくる。

詩景双絶

四等　○雲雀

上野國新田郡太田町入町　大沼染子

雲雀が空に舞ひ上つて農夫の勞を慰める樣になる迄には、何の位な苦心か知れません。每朝早くから塒を出て、田の畦や堆肥の上に佇んでは首を曲げ羽を振つて親鳥の囀りを聞いて居ます、そして自分も少しづゝ囀つてみて、漸く圓熟するに至つて始めて舞ひ上るのです。

鳥類にも修養あり

五等　○裁縫

香川　松女

私は今年て、十二年の學生時代を、終るのてす、裁縫仕始たのは、尋常三年の時からて、縫ふた着物は、單衣が二十八枚、袷が二十一枚、綿入が九枚、羽織が七枚、其外前垂、襦袢、帶、足袋、シャツ等ミシン迄そして糸代、に一圓七十四錢つかつて居ります。

綿密

秀逸

○蝶あつめ

相模　中川綠

私の兄樣は蝶を採集して居り升、先日も美くしい蝶を澤山採つて來て、あのまあきれいな羽にいろ〳〵針をさしますの、そして私にも捕つてきておくれつて被仰るけど可愛想て私には捕れませんわ。

此れだけは兄樣の言ふ事をきかない方が宜しさうてす

○別天地

根室　久美子

ほんのりとした、はな曇りの午後弟や妹をつれてふと海の氷の上へ出ま

した毎日穴ごもりの姿には殊に廣々と感じました豆粒程の人の往來は町並より賑かですいつの間にか渡り着いたのは近くもない辨天島でした其高い燈臺の元で四方を見渡した時の心地よさ。

氷の上の散歩は北海でなければ出來ますまい

○雨の日

大阪市　梅本　龍子

雨の日てす、何とはなしに人懐かしい雨の日でした、窓に倚りますと紅椿の花がぽたりと落ます、果敢ない人の運命を示して居るやうてはありませぬか、私はたゞもう言知れぬ寂しさに小さい胸をとぢられて……果は熱い涙が頬を傳ふのてす、雨の日は淋しいものてす。

散文か詩か

○郵便

相撲　日代なか子

私は毎日家へ來る郵便を書取て二十通位たまると兄様に選評して頂いて實用文の練習をするのです、亦繪はがきの方は姉様に見て頂て圖畫の御手本に致します。

此の心がけあつてこそ物事は成就する

花見姿　陸前　春風



○椎茸とり

徳島縣　吉田　紫花

伯母さんに取りたての椎茸の御馳走をするといふので、私は籠を持つて裏の山へ椎茸とりにまゐりました、澤山な椚の丸太に、水々したのが夢の様に生へてゐるので、とるのを忘れて見惚れてゐると、やがて下から伯母さんが呼ぶ、籠は未だからの儘で轉つて居ました。

大小無數の傘かさなり合ふて

○寂寞

福井縣　片山　千里

世の中に最も寂寞たる生涯を送る者は何でせう、と尋て來たから、戀の無き人でせうと答た、處が世の中には尚一層寂寞たる生涯を送る者がありますと云てよこした、變だなと思つて其翌日逢つて見たら、今までの快活なるみや子さんは非常な沈鬱なる人となつて居られた。

やはり當つた

○春の花

丹後　鹽見千代子

雪の中から咲いた梅は、醜く凋んて、今は桃と櫻が滿開、それが散つたら、澤山な海棠の蕾が、ほころんて、そして、春はいつてしまう。

此文章好し

○毎年　美都子

里見岳の雪が解ける頃野邊の青葉が芽を出し國見山の雪が消えると里も野も櫻花に飾られ國光山の雪が解けると最う暑い夏となり庭の楓葉がばさりばさり散つて弟も妹も螢籠を忘れる樣になると間もなく銀世界となる噫妾は毎年同じ事をくり返しながらうつり變り早い世に驚いてます。

短文、必ずしも短かゝらず

○叩頭　本郷　朝井千とせ

幼い時分よく喧嘩を仕ては叱られて居た太郎さんに此の間途中でお目に掛りましたらお互に叮嚀に叩頭を仕まして「ちつとお遊びに」「貴兄もどうぞ」其後一度も被入りも仕なければ又行きも仕ません、何でも叩頭を仕無い内が一番面白い時代だと思ひますわ。

皮肉

○成績　紀伊　木下操子

私は昨年中投稿いたしました成績を掲げて見ましよう一月沒、二月沒、三月沒、四月文藝遊戯一篇當選、五月沒、六月沒、七月和歌一首當選、八月沒、九月沒、十月沒、十一月新歌謠秀逸、十二月短文秀逸、總計三拾八篇二拾一首拾二句。

記者はこんなに沒書しないつもりですが

○山中の冬　福井　すみれ

冬は山中の事で少しも面白い事はありませんが、毎日窓際の雪垣を手てコツ〱と鳴らすと山から二羽來るのです、そして掌へ南瓜の種子をのせておくとそれを喰へて行きます忘れてゝも居るとすぐ窓際で啼くのです冬は毎日これを仕事のやうにしてくらして居ります。

閑寂の境

○家族の名　大阪市　渡邊みね

私のお祖母樣が、かねて、其お家へ嫁られた母樣が、よねてあつたので、生れた私もねをつけようとてみねとし、次の子は皆と違ふのも變だからといふてつねとつけ、三女にはふね、四女にはたねとつけた、私の弟は皆、名が違ふからよいけれどさて今度、又女の子が出來たなら、何と名をつけたものであらうか。

むれ、なゝれ、やれなどは名になりません

○進歩　韓國　原登里子

韓國へ來た當時は、草深い野や、山ばかりの不便な山里であつたが、二年過ぎた今は、日本軍隊所在地となつて營所も建ち、川も開き、橋もかかり、廣き路も出來誠に住みよくなつた、こゝ一二年のうちに商家も建つとの事、女子文壇を賣る本店ができる頃には私が古郷へ歸つて終ふ。

虎狩も昔の夢

○霧　失名

妾の所は、山家でありますからこれから秋頃迄は、霧が谷間を閉します妾の家から見ますと、目の前から、恰ど海の如てあり、所々に大島や小島がひよい〳〵と覗いて、居ます、其に朝日が射すと、餘程美しい、去年も妾は度々思ひました、此の霧の上を静かに、歩んで沖の小島の方へ行つて見たいと。

山家の人、却つて海を語る

○轉校　磐城　千葉光子

私は家事の都合て、數度轉校しました。始めて入學した所は山形市です、其後東京市から岐阜市の小學校へ、次は沼津小學校、女學校と、凡十年間各校皆規定風儀が異て居ます轉校は誠に身の爲に成りませんが未來教育者となつた其時の立派な風儀を心得たのであります。

身の爲にして下さい

○嫁蠶　西多摩　森田なか子

私はお隣りから送られた嫁蠶を（土地の習慣で誰方か亡なられると嫁蠶と云つて二眠の時少しづゝ近所へ配このです）大切に育てゝ上簇も恙なく、やがて白銀のふくべがなつた樣な繭の宿り、かき落すのは惜いのでそのまゝ眺めて居りますと、或朝それはそれは可愛らしい蛾が何時出たのかひら〳〵と音を立てゝ居ました。

養蠶讚美

田舎道　伊勢　越村文枝



○好きな事　仙臺　春喜

父樣は庭を綺麗にして眺める事なら母樣は家の內や外を掃除して置く事なら、兄樣はテニスをやることなら私は文を讀み又綴る事なら、弟は相撲を取つて勝つ事なら、妹は御菓子を頂くことなら、下女の清は湯に這入つて居ることなら、何れも御飯一食位食べなくてもよいと云ひます。

清はお湯の中で何をしてゐるのでせう

○海のあなた　鹿兒島　山崎秀子

松林を出てゝ砂山に登りますと前は太平洋の波が戰つて居ます。此處が妾の住家なのです、いつも此の波打際に立ちましては白い羽の海鳥が飛ぶのを見ますと、あゝ海のあなたの兄君は今如何して御出でだらうと

悲しくなります、ことに海鳥の啼く時は身の上案じられてすぐ手紙を書きます。

此時の手紙に眞情こもる

○糸　備後　井上年子

卷けば難なく卷かれもする。織れば綺麗に織られもする、然も直くして曲らない。弱いやうで强く、細くて長い。どこまでも優しい。優しい中に雄々しい所がある。古の語に、糸のやうな氣に成つて居れと、實に糸こそ女子の本領として恥ないでせう。

又一つの心得

○葬式　濱田町　和田岩子

私の內はお寺でございます其故いつもたくさんの人の葬式がありますけれども少しも悲しく思つたことはありませんが私は近頃最愛の母をなくしましたそれよりこちらへはお葬式を見るとなんだか恐ろしいものを見るやうな氣がして身體がぞつといたします。

何事も我身にふりかゝつて來れば眞の情は動きません

○學校の名　麻布　町田靜江

私の參ります學校の名は、香蘭と申します、人も通はぬ深山の奧にても、猶ゆかしう咲く花のその如く、優しく、氣高くて、美しき德の香高う、如何なる場合にも、この名を汚さぬ樣心懸けて居りますので、またこれが先生方のお希望なので御座います。

○あわびとり　橫濱　白ぎく

或る晩でした父は一同を集めて色々面白い話をした末兄さんに向ひお前は將來文學士になるがよろしい 次に姉さんには軍人の妻妹には造花の教師になれと命令して一番終りに妾に向ひお前は伊勢の國へ行て一生あわび取をして暮らせと申ました妾あわび取などは大嫌い

○花のこゝろ　麴町　野村光子

ゆかりの色の菫は謙遜 てきんぽうげは無邪氣で撫子は 純潔な愛のうぜんは戀白百合は崇高であぢさゐは冷淡又は移氣 のこゝろを持てるさうです美しい花にも色々違た心を持てる事 私は可愛らしひ忘勿草を愛し升

○花壇　加賀　中山つゆ子

今年の春、きよちやんと日あたりのよい處へ花壇を拵へました、皐月草、釣鐘草、野菊、一輪草、白百合、日遊、石竹、撫子の樣な草の種子を蒔きましたが、是等が生へて花咲く頃は土用休て、きよちやんが歸へつて來ます

○晩御飯　若草

頭から手拭を被つて、襷を掛けて、巾の廣い前掛をして、庭前から、椽の下から、押入から、納屋まて、朝から眞黑になつて、御掃除しました其れてそこらが、見違へる程美しうなつて、大變氣持が宜しいてす、今日はいつになう、晩御飯をおいしく戴きました。

○四月の青森　青森　淸子

青森は、此二三日から、漸く雪散道が、乾いて今まで二の字跡にキチ〳〵と、ひゞいた音も皆カラコロ〳〵と、輕い下駄の響きてす、而も東京では、今は櫻の最中とやらと窓より庭の梅を見れば、御日樣有難う御座いますと、芽出しの最中。

○記號　伊藤　曉子

三年越しの作文帳が昨日て全く終つてしまひました、女子文壇て沒書になつた文へは×の記號をつけて記載された文へはXの記號をつけますが×の記號が決して少なくないので、大に勉强して此度の帳へはXばかりつけたいものと思つて居ます。

○淸き涙　大阪　小百合

今日つきりなつかしい師友に別れればならぬ繼

しい寄宿舍を見捨てればならぬと悲しんだ妹は遂に汽車に乘つたが、故郷近くなる迄泣き止まなかつた、一點の汚れもないその心、あゝ淸い涙である、と私もつひもらひ泣きをした。

○村のお祭

栃木縣　千葉奈津子

私の村には面白いお祭が有ります それは舊の十月十日の午後からてすの 甘酒祭と言ふて大きな釜に甘酒をわかし そして道を通る人ごとに御馳走してやります 少し遠い所を行く人ても大きな聲して「オーイオーイ」つてよびもどして、ふるまつてやるのよ隨分面白いお祭れ。

○春の空

和歌山　照子

一羽の鳥は高い〳〵靑空に浮ひて居るおや又向から友達が來た後のは羽の波大きく打つが先のは靜かて一直線の樣、あら面白いよ二つの黑い塊は廣い空を我物顏にダンスを始めたふと塊は一つにと見る間に黑いものは西と東に流れて行くきつと春風は其先にあるだらう。

○一秒時

京都市　大井香園

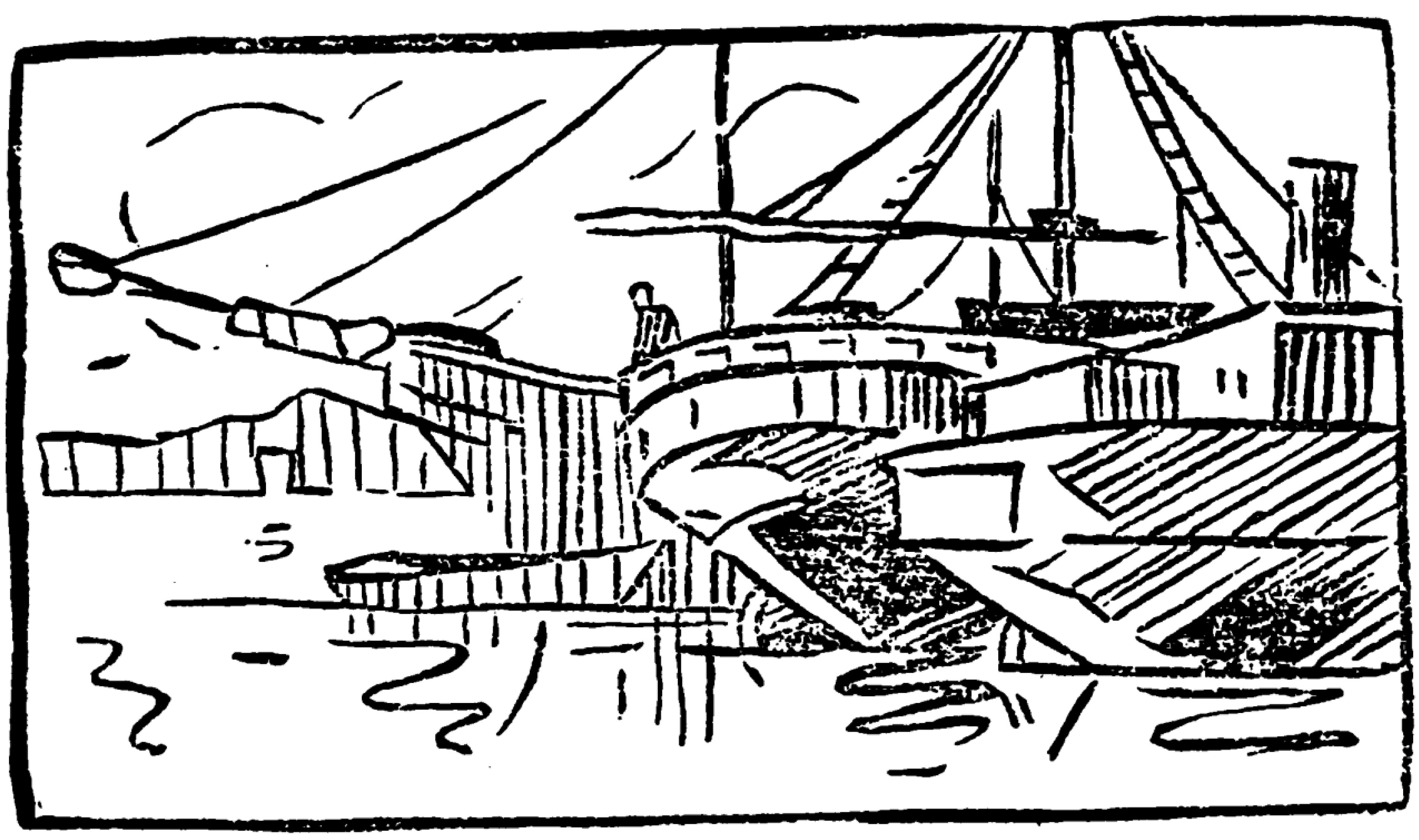
一秒時間のものゝ速力は如何てしようか、蝸牛は其遲々たる一秒に五厘を歩み、我等は四尺を歩む、空を切る蠅は翅を誇へして四間を飛び、自轉車風を殘して五間を軌る、驍馬士を捲て六間を驅ると滊車は煤烟を吐て九間の力燕尾を振つて御三十三間堂を飽へ銃丸四丁拾八間の敵陣に當るとかや――

○春祭り

膽振　港秋子

一昨日から妾の村の春祭りてした。本日は終日なので村の若衆は大騷ぎてす。妾は伯母樣と芝居見に、弟は花火。兄樣は花車踊りの屋臺に出る。午後六時頃各々自宅に歸り湯に入り夕げをすまし、ほつと呼吸をつくと彼方此方に夜祭の太鼓の音。弟は早や浮々。

泊り船　矢名子



○日向の日の出

鹿兒島　山下敏枝

日の出見んとて まだ幽暗き稚艫戸の窓の前に立てば眼のすぐと下にゆらぐ波 の音は太古さながらの樣に響いて居る。夢の樣な霞の中に白々と光れる日向洋をたどると水や空なるあたり紅の雲が浮いて日は昇つた。山も海も夜の夢から醒めた。後の山て今眼醒めた鶯が啼いて居る。

○初節句

北多摩　すみれ子

お節句が來てもいつても 昔のお雛樣が三ツ四ツて飾るのもはりあいなくて居たのが今年七年目て一月姉さんへ女の子が產れたので、私の内の嬉びは一通りては御座いません。お雛樣もはうばうから頂いて今年はまるて雛屋のやうて飾るのに大さわぎてす。

○轉任

德島縣　野菫子

私は此度或學校へ轉任する事となりました、何ぜだか只だ行きたくありませんので父母にも罸らず深く考へこみました、そうだ今の所も初はよくなかつたのだ、そして何れて勤めるのも猷身的敎育にはかはるまいと漸くさとりを開いて翌朝快く出勤しました。

○終列車

神戸市　紫峰

神戸行きの終列車に私は乘り込んて ホツとしました、乘合は私とて七人、列車が進行しかけるゝ客はそろ〳〵寢仕度をする、私は明日の事を考へると寢られない、外は何の音も無く車の響きがゴーゴーと凄じい、妙に車內の電氣が陰氣に私の心を闇に導く。しきりに父の病氣がきにかゝる。

○可愛ゆき鶯

下總　三橋千代子

まちにまちて居た可愛夏蠶が生れましたから、私は一人で毎日一心に、よい繭を造らせる様にと世話をするのです、澤山あるのですから朝は早く、まだ星の消えない時に畑へ行き、露まみれに成て籠一ぱい桑摘んで歸つてから、夜の十二時頃迄はいつも忘らず起きて居ます。

○おとぎばなし　大阪市　岩津　愛子

例の通り今晩も座敷に圓く座つた家内七人交るがはる御伽噺をし始めた。やがて末の弟の番になると廻らぬ舌で桃太郎の話目頃乳母やに聞いて覺へてか、どうやらこうやら終ると一家中手を打つて賞める折々笑ひ聲が外へ漏れると小川の畔さが返事をするやうです。

○からすなき　愛知　紫　雲　女

カヽコロ〳〵と短く切て啼くは何處かに慶事があるといひカア〳〵と長く引て啼くのは凶事の知らせといひ又無暗にガア〳〵騷ぐのは子を取られたのだそうです現に昨朝隣の塀で一種いやな聲で啼いて居ましたが先刻東京の伯父さんが死んだ電報が來たそうです。

○躑躅　埼玉縣　岩田文窓子

木々の若芽が育くなると、私の宅は赤うなります、それは前の山に赤い躑躅が、一面に咲くのです、朝早く霞がかゝり、淡紫の山で。日が昇ると漸漸赤い山となり、宅にうつるのです。日が入ると紫の山となり、終には消えて仕舞ひます。

○夕景　陸前　小出久代

川から吹き上る風が頬にあたるのでショールに顏を埋めて足もとばかり見詰めて來ましたらポット目先が光つたので顏を上げて見ると左側の雜木林があか〳〵と光つて居る。右方を見るとずつと向ふの山と山との間にかくれようとして居る川を見ると此れこそ金波銀波であらうあゝ好い氣色と寒いのも忘れて立ち止まつた。

○雀　熊本縣　松本つい子

私の家の軒には雀が巣を作つて子供を五つ産て居ます　お隣の係さんが來て鳥かごの中へうつして其そばへかけて置きました親雀は歸つて大に驚く事でありませう。

○わが島　長崎縣　永松すみ子

九州の陸地には五十六浬も離れた直徑五十丁の小島ですが割には戸數も多いのです然し灘荒く一日一度の汽船便さへ有りませんので自然島民は助け合て仲能く暮します、それに海産が多く奇麗な島ですのに何故ペストは流行ましたらう島民が信心深い姫神樣も御座るのに。

○仲よし　水戸　重　子

今年五才のさいちやんは日當りのよいお椽側でお人形さんと、猫ちやんと、軒の雲雀と、毎日毎日仲よく唱歌を歌つて遊んでなります。

○日誌　札幌　月　花　子

私の學校では去年の暑中休暇から日誌をつける樣になりまして此冬休みにも書きました今度は始業式の日からつけて毎日やる樣になりました校長先生は作文の稽古にもなり細字の稽古にもなるからとおつしやいましたので私もこれから書んでつける積りです長い後で見たらどんなに面白いでせう樂しみでせう。

○初めて叔母さん　三重縣　小林　靜子

昨日宅の用で御嫁に行かれた。姉さんの處へ行きますと一昨年姉さんが產みました雪ちやんが、誰に敎へて貰つたか、皆さんの前で不意に叔母さんと言つたので、私ハッとしました。

○作文　伊豫　芳　枝

私はいつも文を作る程むつかしい物は無いと考へますだつて事實を寫生し樣と思ふても一時間經てば忘れちまうし、何でも奇麗なのをとすると形にはまつて下手に出來るんですもの。こうして死ぬるまで上達せないのでせうねえ。

○御嫁樣　神奈川　山田つま子

何時も御母樣は私に、赤い御飯に御湯を掛けて食べますと御嫁に行く時雨が降り、御飯を食べる時御はしの先を持て御飯を食べますと御嫁に遠くへ行き、御飯をこぼしながら食べると里へ歸されますと、よく仰しやられます。

○四國巡り　讃岐　長尾　ふじ

私の國では毎年春がくると阿波讃岐伊豫土佐などの人が若い物も年寄も紺がすりの若物で黄色の手拭ひの笠をきて來る日も〳〵山の樣な人ですそれは眞に眞言宗で四國を廻ると弘法大師の御陰で色々の病氣がなほるとか又は先の世で極樂生活が出來るとか申します

○霧島　陸前　沼倉　孝子

秋の頃種々の躑躅の多くある庭の中から葉の形

ん標準により わけて買ふて來た霧島がらう花が開きそうになりました、私は實に嬉しい、しかしどんな色に咲くてせう、一日も早く咲くやうに祈つて居ります。

○五月雨

岩代 波流子

あゝ嫌だ、今日て早や五日になるのだもの、未だ止みそうもないのてす、庭の山吹も嘸、晴日を欲しいことてせう、疊の縁から心の底まて徹たやうてす——。

○圖書切符

大阪 田中とき

始めて作つたお伽噺が四等に當選して出たので嬉しくつて〳〵早速母上に申しましたらまあえらかつたね それぢや其切符を持て行たら廿五度圖書館選ひが出來るれと伯母様も同様な事を仰いました 私は未だ見た事はありませんが書物が買へる切手だと思ひますと申しました。

○故郷

神戸市 水守春子

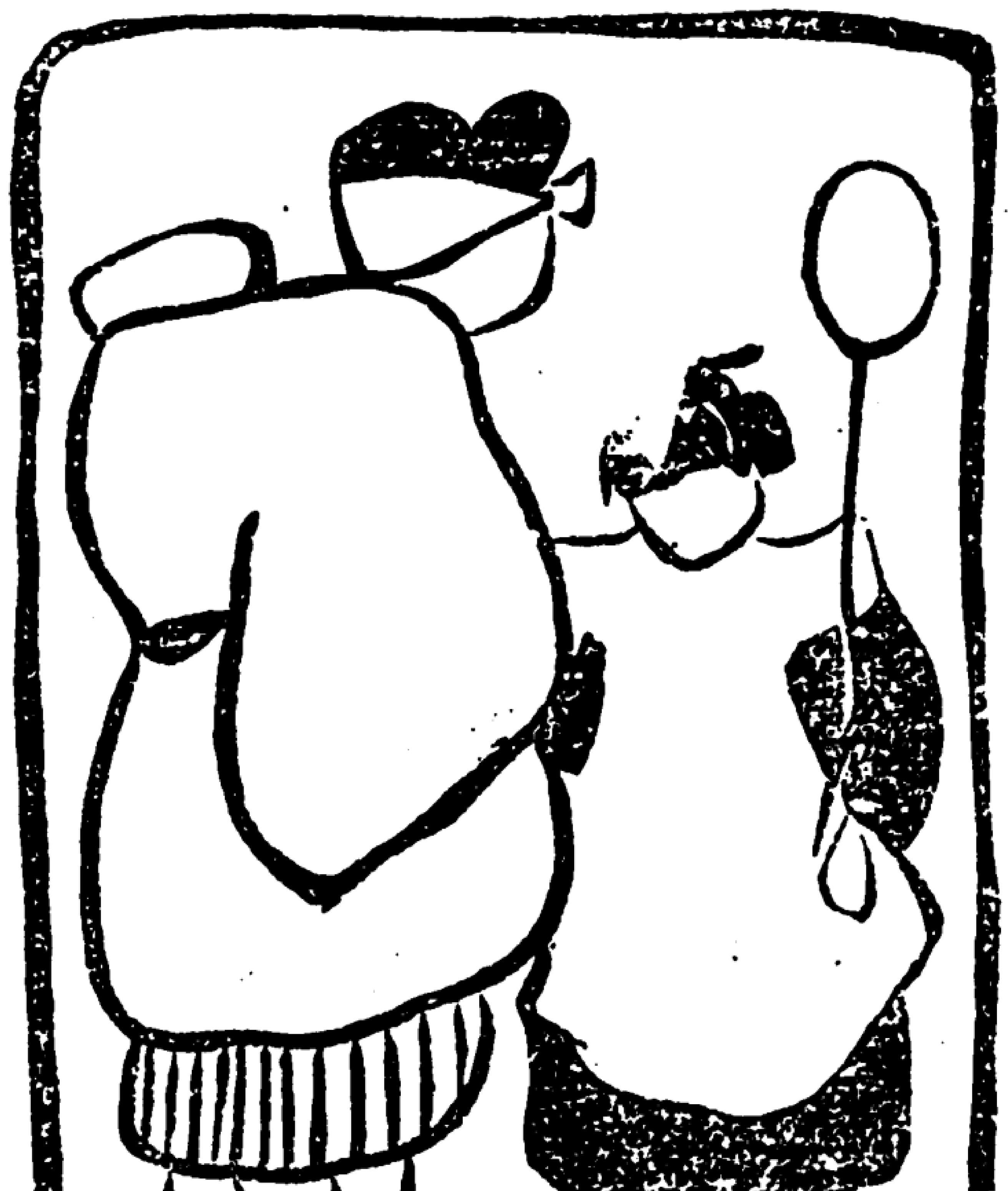
妾の故郷は田吾作ばかりてす、花の彌生も蒸し暑い夏の日も、もみぢ秋草女郎花の秋の日も、霜のつめたい冬の日も休まず、田畑を耕やす正直な人ばかりほんとに感心て御座います。

○郵便屋さん

上總 四之宮凌子

妾は今、本納女學校に通學つて居りまして、懐しい、父母の御手紙と、親友な、秋子さんと、金子さんと、琴子さんの御手紙を持つてきて下さる方と待ちに待つた女子文壇を持つて來て下さる方が、一番よい郵便屋さんです。

子守　上毛　飯島きよ子



○星

山形縣 大瀧露野

今の文士様方は、星や菫ばかりは詩人の領てない、もはや陳腐だから止めよと仰るけれど、滿盤色の絹帛張り詰めし如き蒼空に、千萬の星がエホアの榮光を顯はして、美しう輝きわたつてゐるを見ては、とても止められません。

○わかさと

常陸 鈴村勝子

わたしの里は、岡田村と云ふ淋しい處てす、汽車も自轉車も通らぬ、たまにはおいしやさんが人力車に乘つて、通るのを見ます 唯毎月くるのは女子文壇と中學文壇のみです。

○欲しいもの

三河 富美子

嘉の義子さんの様な縮緬の羽織に御召、其れから一昨日隣の叔母さんが御産みなすつた様な赤兒に、女子文壇の賞品の帛紗半襟などを集めて仕立てた襦袢が欲しう御座い升。

○袖が浦

上總 森ふみ子

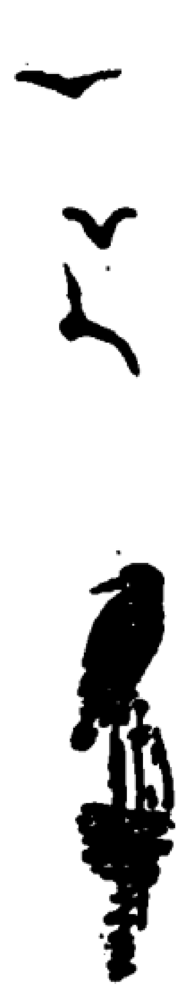
富津は小さい町てすけれど陸軍の要塞地てす 下洲といつて美しい浦づたひがずつと鋸山の方へ連いて居ります 此は昔日本武命が東夷征伐の道すがら風雨烈しく遂に其妃橘姫が投身せられて其御袖が此所に流れついたので一名袖が浦と申ます。

○鶴

紀伊 室井美那子

疾く起きて海邊に出て精一ぱい深呼吸をするのが毎朝の日課てす。空は碧の一色に晴れ渡て波はうねり長く遠くから寄せて碎けてヒタ〳〵と砂を洗へば涼い朝風颯と吹て我肌にひやり——刹那空に清けき一聲仰げば眞白な一羽の鶴……生れて見初めの姿は踊つて左の一句を色紙に流して紀念にして居ます。

鳴いて行く鶴あり春の海の上



俳句

内藤鳴雪先生選



▲規定　先人を模倣せざる獨創の佳句を望む　用紙は半紙を用ゐ、一人一句以上の投吟を許さず、締切は毎月十五日とす、懸賞は乙種の規定に據る。

一等

よべの夢皆朝顔に咲き出てぬ　岡山市二番町十三番地、矢延方　池田芳子

二等

古宮や青侍の毛虫やく　岩代　甚野蝶子

三等

春の水詩人の家を巡りけり　大坂府豐能郡麻田村祝藤方　祝綾子

四等

梅の村櫻の村となりにけり　信濃埴科郡寺尾村字柴　小林いち子

五等

若菜摘みて昔の人に吾似たり　大坂市北區松ケ枝町四七號木太吉方　しのゝめ

妹は雛と添寢や春の宵　筑後　田中繁子
行く母の行くとも見えぬ春の海　愛子
夕霧の檜原の星を埋めけり　大坂　辻蔚子

薄月や卯の花垣に人の影　上毛　ちすゐ子
若草に妻もこもれりむぐらもち　千葉縣　豐子
舟人の聲のどかなり春の海　横濱　相樂きみ
豐後路は山を燒くらし海かすむ　周防　河村房子
せみなくや涼風通ふ鐘の下　茨城縣　中村清子
紅梅の窓に繙く源氏哉　安房　浜子
春寒や水田にうつる鳥の影　沼津　山縣梅園
鶯を啼かせて姫の機嫌かな　宮崎町　卯の花子
伏せてある舟や小春のさゞれ蟹　越後　哲子
春雨のつゞけばながきあくびかな　北海道　赤間紫水子
栄の花は盡きて浪速の街に入る　神戸　雅子
白梅や鳥とまりて花の散る　香川縣　A丑女
紅白の牡丹活けたる書院哉　尾道市　石原こいち
洗ひ髮卷きつけ帶や夕涼み　三河　みどり
白蓮や老僧の影水にあり　岩代　香川榮女
四海皆のどけき春の彌生かな　相模　光月女
新月の濡れて出たる若葉かな　横須賀　柏原美奈子
名月や白砂青松島點々　府下　山本りつ子
春風の輕く吹くなり蝶の羽　遠江　すみれ女
鶯や旭に向ふつゞけ啼き　常陸　松本美泉
行く春の日が當るなり欧机　滋賀縣　池田よし子
鶯に訪はれ顏なる伏屋かな　上総　鈴木梅子
梅の下に北野の巫女の薄化粧　秋田縣　山田白梅子
裏口に水くむ人やさくら散る　青森縣　葛卷りさ子
鳥のきて啼かぬ木もなし春の山　越後　山本白萩
小兎の草喰みて居る月夜哉　下野　福富きく
春雨に二尺のびたり軒の草　安房　高梨芳子
新院に繪師召されけり春の雨　大坂市　生田稔子
永き日やわれに胡蝶の羽あらば　茨城縣　戸島富美子
鶯や椿の中をごそつかす　大坂　三浦掬子
客人の今日も來らず梅の散る　千葉　大崎ゑい子

櫻狩しなさだめする女官哉　下野　くに子
影うすく夕日の落つる燒野哉　茨城縣　小堀とし子
雲降らで初春寒しゐろりばた　遠江　星花子
摘草や忘れし袱布のぬぎどころ　滋賀縣　神崎美津子
三毛猫が戀する聲や雨の宵　美作　權田とくの
探梅の歸るさ寒き吹雪かな　八束郡　錦海女
春逝きて京人形も單衣哉　岩代　波流子
春雨の緣に鞠つくひとり哉　大阪　西戸政江子
袷着て鬼が島へも行かんかな　茨城縣　小松崎なを子
潮窺の渦ものすごき青葉かな　相模　藤原下枝子
若蘆や一寸青き春の水　神戸市　三澤政子
天津雁琴横たへて聞く夜哉　土佐　森田久見子
戀人を花に見付けし狂女哉　晴子
春雨やうしろすがたの蛇の目傘　紀伊　大川楽子
行く春を念佛ゆるき花の寺　茨城縣　小堀とし子
閑居して鵜の聲聞く青葉かな　伊豆　小澤香芽子
學なりて若葉の里に歸りけり　常陸　宮本市子
老人の昔話や夕涼み　印播郡　小夜しぐれ
歌人が障子つくらう日永哉　大阪府　親芳子
初虹や帆船の續く利根の口　常陸　中内泉子
ひな祭る京の少女の美しき　大和　内田孝子
夏の月猿の懸橋照らしけり　秋田縣　大越ひで子
野に白馬いななく朝や風薫る　神戸市　加藤ふみ子
誰人の住家ぞ花に月に琴　青森縣　川村美惠子
酒を飲む障子の影や春の月　名古屋　石田榮子
あじさゐや姉の寫生のたそがるゝ　上總　四之宮浚子
雨二日奈良のはたごに古代雛　京城　大島こう子
初瀬行く笠にしづくや若葉時　長野縣　伊藤花桂子
たんぽゝのつぼむや人も夕日影　上毛　元子
靜けさに角を振りけりかたつぶり　名古屋　吉田なみ子
手枕に砧きくなり萩の宿　豐後　松岡こうめ

初夏や庭に水まく青すだれ　伊勢　福島春子
池見ればまだ朝月や鴨のむれ　越前　紺井いわ女
雨晴れて炎陽もゆる小塚かな　遠江　林衞子
蝶舞ふや菜の花つゞく攝河泉　攝津　和久濃子
月の夜や梅あらばやと舟上り　陸奥　岩崎政子
春の風孔雀の戀を吹きにけり　上總　蓉花子
桃咲きぬ緋桃開きぬ野の日和　京都　西村ゆかり子
花散りて俄に暮れぬ春の空　名古屋　藤井志津子
霞む夜に野火の烟の低きかな　久留米　平井良子
菜の花の中に鳥飼ふ小家かな　上毛　美起子
霧晴れて崖の白藤雫する　伊豆　わかば女
草青み風暖かや乳母車　千葉縣　大木靜江
満潮や逆に流るゝ春の川　中津　やま川
白き菜に胡蝶舞ひけり春の暮　岐阜縣　村井春子
松の根に鎌忘れたり秋の山　臺北　稗貫みつ子
春の川蝦はふ影を見てありぬ　高知縣　島内虎芳
花賣や額の皺も春の雨　廣島縣　和田しづえ
雉子啼て五山の僧徒起き出てぬ　茨城縣　葦女
月更けて井戸に水くむ女哉　靜岡縣　絹村凉子
よき人のよき衣ぬれぬ春の雨　熊本市　山崎くに子
野に出れば野に連のある小春哉　常陸　鈴木花月
靜かさやいづみにうつる春の月　伊勢　春川柳女
花電車西に東に春の町　若草
外風呂に隣も來たり夏の月　神奈川　山田つま子
順禮の顏洗ひけり春の水　大阪市　山内溪子
葉櫻にはずかし春の醉心　京橋　野澤光子
大粒の雨に牡丹の散る日かな　京都　芳子
なほさむしえみしの里もはるの逝く　北海道　鎌田しげ子
鹽茶出す嫗かしこしや花戻り　岡山縣　梅枝
春の月文讀むこゑのかすむかな　石見　ちどり子
元祿の小袖かけたる櫻哉　秩父郡　田端花子

佛像の目ばかり光る餘寒哉　伊豆　桃村子
何となく野は若草の匂ひかな　千葉縣　鶴女
春雨や琴の遠音の東より　羽前　白鳥雪枝
春雨に破れまがきや桃の花　宇都宮　森島きん子
稚子抱いて堤上て見る花火かな　伊豫　曉子
佛壇にさして散りけり山櫻　紀伊　正木菊枝
いさご白き月の松原一里二里　岡山縣　桐本悦子
寒食や佛の棚の白椿　埼玉縣　小林まさし
道連に別れて遠き枯野かな　播磨　佐久間ゆかり
春風の信州に行く飛脚かな　秋田　奥田碧子
花散つて草堂に聞く木魚哉　攝津　赤松久子
灯の下父のうたひや春の宵　仙臺　岩田よし子
築山に花見る春の別れ哉　千葉縣　見松けゑ女
囀りを谷間に聞くや木曾の旅　磐城　薑村子
その殼に蝸牛や冬をこもるらん　上總　齋藤くら子
菜の畑に狐鳴くなり朧月　津市　佐々木光子
櫻よし梅よし橋のかけ所　羽前　エス子
卯の花や琴の音止めば人寢れぬ　大阪　倭文子
涼し氣に五位鷺のなく夕哉　常陸　塚本李子
春の夜やうたの一間に燭ともる　安房　津代子
荒波やマストに更けしおぼろ月　佐賀縣　津田ひて子
あけ放つ寺の廣間や春の風　石狩　王子清志
追分けの節面白や春の月　靜岡縣　青木靜山
鳥の鳴く方へ立ちたり春がすみ　遠江　月塚しげ
蓮池に聲たか／＼と蛙かな　常陸　須崎せい子
おぼろげに櫻散り來る溪　三河　清香
獅子が兒を落す谷間や藤の花　千葉縣　三橋濱子
靑梅に我を求むる人ありや　千葉縣　渡邊恒女
見てあるく名所々々や春の風　下總　篠原はつ
春風の障子にとまる小蝶哉　山城　有野雪子
小羊のゆめ長閑なり牧の草　神戸市　非佐野子

桃の實のぼたりと落ちて壺しづか　常陸　鈴木花子
思ふ程旅は歩けず春の風　神奈川　片野良子
卯の花に琴の音きくや月あかり　八王子　富本登美子
葛城の神子の姿や白ぼたに　横須賀　齋藤松代
夕ざれば花吹雪する垣根哉　靜岡　柘植鈴江子
酒の座を睥睨するや初鰹　備前　岡崎保惠
春風や我が文机の花あられ　高輪　秋草
亡き妻の顔おぼろなり盆燈籠　長野縣　瀧澤すみれ
山吹に釜かく音の小家哉　水戸　小桃子
呉竹の葉一つ搖れぬ暑さかな　大分　桃の屋賤子
やせ犬の尾花ふみ行く月夜哉　上總　政子
湖の中の御堂や明け易き　鹿兒島　山下敏枝
一尺の堤を人行く暑さかな　茨城縣　清水子
花紅く鳥の聲きく沖の島　西多摩　森田きよ子
馬車驅りて古羅馬に入る霞かな　茨城縣　三好ふみ子
草の香のとき／＼送る岡見かな　上野　大沼そめ子
春雨や崩るゝ岸に草の花　常陸　松本やす子
山一つ越えてまた見る菜たねかな　伊勢　山路くに子
片町の上は堤やげんげ咲く　土佐　弘光芳子
花散るや馬上の人の綾藺笠　芳子
蹄音して珍らしう聞く蛙かな　下野　くに子
夕立や鬼が住むかと雲凄き　甲斐　篠原みさを
れて覺めて曉近し明がらす　千葉縣　きく子
傘見ゆる垣根は低し春の雨　金澤市　きよし
小ぬか雨人も櫻もおぼつかな　神奈川　福島史女
白桃や詩人が門の傾きて　駿河　深尾研子
一本は庭に採りたる躑躅かな　常陸　今泉磯千島
切れ凧の桃を散らして落ちにけり　筑前　すみれ女
日の入りしあともあかるき櫻哉　羽後　津田よれ子
傘さして花折る人や雨の中　筑前　川内きく子
水鏡ゆら／＼寫る花の影　筑後　深山女

谷江風先生選



▲規定　所謂日用の往復文にして、手紙文又はハガキ文の實用を主としたる文字を歡迎す、二十四字詰十五行以內用紙も締切日も前同斷、懸賞は甲種規定に據る。

三等

○しら浪樣と賤子樣とに

豐後姫島燈臺二號官舍內　鈴木さち子

第四年第五號にてたまはりし御兩方の御文、暗らんずるまでに繰返し〳〵拜讀いたし候。初は御同情の厚さに、花なき島の春の侘びしさをも忘れ、さびしき胸に力得て何とはなしのカヾヤキを覺え申し候。さて餘りの御やさしさに、却りて若き心の只譯もなう亂れて、暫くは忘れし淚の、またしても漫ろに催されて候よ。

顧みすれば島に參りて早や一歲、故鄕の空へ漾々と流るゝ天の川をふりさけ見ては、悲しと泣きしも幾夜、暮行く海の色――夜半の枕に通ふ千鳥の啼聲を、哀れと泣きしも幾たびなりしか、漸く馴れ候ては寂寥の念も哀愁の情も、やゝに薄らぎて、二人が西に東に奔走して設らひし形ばかりの門松に、新しき年も迎へ、桃はなくとも手づからの拙なき雛を飾りて、上巳も祝ひ、喜ぶ兄上の御顏見るが自らもこよなう嬉しうて、世は今方に百花の盛りと知りながら、汐路幾重の小天地に、斯かる儚なき慰めを命ちに、僅かに淚を忘れ居る身に候まゝ、誰とて再びやさしき御言葉もて、必ず妾を泣かせ給はじな。

さるにても懷かしきは羽前の君にも候哉、妾も同じ奧羽の產、世の荒浪に逆らうには細きに過ぐるみをつくしの、弱かる身をば今四百里外のこゝ一孤島に遁れ居り候とも、もと陸前沃土のたゞ中に生まれ候もの、御懷かしさは一入にて候、さるを罪深うはおはさずや住所さへよくも告げ給はず、いとゞ御恨みにこそ存じ候へ、あはれ詳しく洩し給はずや。

規定ある行數に、あまり長う候てはと、要をのみ急ぎ候を、いづれも樣、禮にならはぬ島守が妹よと幾重にも宥しませ、かしこ。

（評）簡約なるが中に無量の情の籠れるを見る。譏むらくはどこやらに作者の女ならぬ面影の浮べることよ。

四等

○大淵夏子樣へ

栃木縣上都賀郡南押原村　青木たか

外はさやかなる月の夜に候、かゝる夜こそ樣々なる思

ひの糸のみしげくして、堪え難き苦しさに、せめては憂をまぎらさばやと、月さす窓に女子文壇を披き候、いつとなく繰られしページの諸嬢の交際を見入り候折ふと、妾が母の名と同じき夏子様の御名を拝し候て、言知れぬ悲しさと懐かしさを覚え候、げに母に別れ候時程悲しき事は候はじな、わづか十行にたらぬ御文にしたゝめられ候へ共、幾千行の御涙の中よりいかばかり苦しき御胸の中よりもらし給ひしならんと御推し申上候だに胸いたく、いか様の御身柄にておわすやら、八重の汐路をへだて候へば、御顔など知るよしもなけれど妾と同じ悲しき御身の上よなと、御傷はしくも御懐かしう、存じ候ものから、失禮をもかへりみず座ろ筆取り申候、妾母に別れ候ひしは早や一年前の事に候へ共猶忘られぬなつかしさに、幾夜さか、夜着の袖をぬらし候を、まして、近き頃にておはします由なれば、さこそ、み袖のけしき、しめりがちにておはすらんと同情の涙にくれ候、わけてかゝる夜など猶更に亡き御母君の面影を偲びてはあくがれ居給ふらん、人は皆花鳥の香に酔ひて、今日は西明日は東と、浮かれ候世にも出給はず、室にのみたれこめて憂のふちに沈みてやおはすらんをいかにもしておなぐさめまほしう存じ候へ共、いかにせん拙なき筆は妾が心の萬分一もうつすにたらず候を、せめて御近きあたりに住む身にて候はゞとくはしりて御涙の川も、妾が袖もてせきとめまゐらせんよすがもあるべきをとかこちては、いたづらに空とぶ鳥のみ眺められ候、されど盈虚常なき慣ひとやら申候へばくれぐれも御力落し給はず今までの事は皆はかなき夢にてありしよと、つとめて御放心遊ばされて憂の眉を開き給はらんこそ、妾が唯一の御願ひにて候へ、未知のところ、不しつけの限りながら是も妾が同情の念に堪えぬ胸よりこぼれ候筆と、あしからず思し給ひてよ、直接御手紙差上んとは存じ候ひしかど、拙なき筆の恥かしうてかくは誌上を借り申候もし幸にして此拙なき書、誌上のはしへなりともかゝげられ、御目にふれ候はゞ本望の限りにてこそ候へ、かしこ。

（評）情を偽る勿れ詞を衒ふ勿れとは文の妙訣を記す第一頁なり、此文たゞ誠を以て成り聊も衒氣なきは當にこの妙訣の第一歩に達せりと謂ふべしかくて三歩五歩情らずんばやがて其の奥に入るに庶幾きを得ん。

五等　都の友へ返し

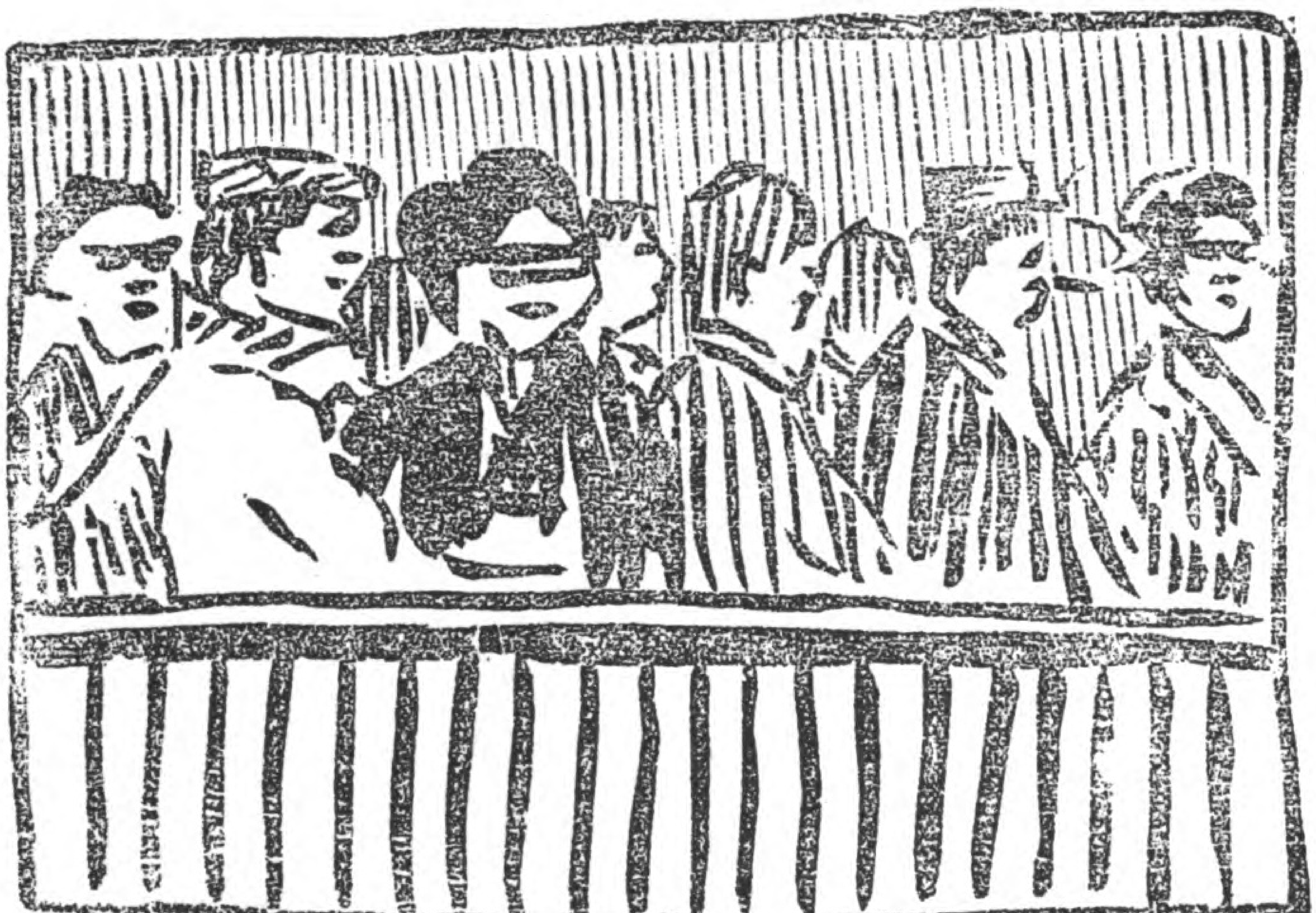
廣島縣山縣郡壬生町　和田静枝

御心こめて送り給ひし御文に接し、匂やかなる水莖の跡をたどりて、幾度か繰り返し巻き返へし、嬉く誦し申候。

御懐しの御身よ、朧月櫻にかゝりいさゝ小川のせゝらぎいとゞ妙なる夕べ、離れがたなき袂を別ちてより、すでに三度びの春を迎へたるにて、其間雁の訪れだに

怠り勝ちなる罪、御宥しあらまほしく候。さて御身には浮世の外かの靜かなる古郷の、けふ此頃の美しき景色を偲びては、日夜憧憬れ給ふとな。されば稚なき雛のすさびも顧みず、空なごりなく晴れ渡りたるを幸ひけふ一日針の手止めて、妾が逍遙ひのあらましを報ぜむものと妹の綾子を連れて、一つには汚れたる胸の塵を拂ひ申候。御身よ思ひ出多からずや、妾はいま天滿岳上、花吹雪露おく千草に美しう敷ける、雄松雌松の間に踞して、東の方遠く展開せられたる、この詩趣に富める千幅の活畫を、恍として見守り居り候。微風はおもむろに妾がほつれ毛を嬲り、薰を銜んではら〳〵と散る花瓣は妾が衣を染めて、いとゆふにゆらぐ色美しの菜の花に、眠る胡蝶の夢を驚かし、一眸蒼々たる麥畑に波を描いて次第に霞の奥に消え申候。雲雀は高く雲井に囀り、をちこちには草取りの女の白手拭のちらほらと見えて、長閑けき平和の春を頌歌するが如き諸鳥の囀り、颯々たる松聲に和して微妙の音樂をかなで、霞靉靆びくわたり遙かにふりさけ見れば、山縣川の深碧は鶯なくなる岸の竹藪の、たえ〳〵に隱見して遠ちなるは針の如く、近くなるは水銀の池の如く、きら〳〵と日に映じ、彼の上官の堤には昔にかはらず袖をつらねて、土筆摘む子の三人四人相見え候稚かりし折り共に螢狩りせし、虹の如き常磐橋の袂には、煙こめたる柳の三株四株風に糸より居候など、いづれか思ひての種となり給はざる可き、さはれいつまで見るも飽かず向かはまほしきこの眺め、洵に暢然として湧くが如き爽快の氣と共に、心遠く紫瞑に走するの想ひ、妾が少さき胸に浮び出て申候。綾子も花束を作り終へ候ゆへ、盡きぬなごりを殘して、道すがら御身と共ならましかばなど語りつゝ、家に歸り申候。

芝居　京橋　小林月雨



せめては御身が古里の春に接吻けせられんかてにもと息吹き入れて、妾が袖にかゝりたる櫻の花瓣二ッ三ッ拙き文に卷き込め參らせ候、かしこ。

(評) 美しき筆なり、さながら春の野の目のまへに浮ぶがやうなる心地す。

秀逸

○誌友の皆樣へ

筑前　和田やちよ

山々の翠の色も著しく濃やかになつて、彼處の野邊此處の澤と草も木も生々として、小鳥の音も麗はしう、見るもの聞くもの皆長閑になりました。殊に昨日今日の暖さ、誠に心も打ち溶けるやうではありませんか。都の人が態々田舍にお出でなさるのも御最ですね。だが私なんかは是れから愈々忙はしくなるのです。寒い間は一年中の着物の用意、又は履物から種々の器具迄悉皆準備して置いて、暖氣になつたら一家打ち連れて、田や畑へ仕事に出て行きます、其れが中々樂みなのです。四ヶ月餘りも狹つ苦しい處に踞つて居たのが急に目の醒めるやうな翠の廣野に出て、菫や蓮華草などの咲き亂れ居るほとり、雄蝶雌蝶のもつれ合ふ中を、雲井に囀る雲雀の聲を聞いては和らかな春風に吹かれて、老も若きも諸共に、無邪氣な謡に興じて仕事を致すので、日の暮れるのも忘れる位です。

是れからは又麥畑が厭に雜草が生えますので、其れを除りに毎日行きます。貴女方が郊外に散歩なされる折り、或は汽車の窓からなどよく御覽なさるでしよう、黄金色の菜種子畠や、青々しい麥田に這入つて、鍬を打ち振り乍ら土塊を打ち碎ひて居る有樣を。彼れです私なども矢張り彼して毎日働いて居ます、で御飯なども其れは驚く程澤山食べますよ。決して男子などに劣りはしません。

偶々雜誌の口繪など、田舍の景色の中に、赤い襷に姉樣かぶりの姿を見ますと、我れ乍ら恥しく可笑しうなります、雖然、あんな詰らぬさましたものに迄親切に、お玉章やら圖書までも贈つて下さる都の美しいお孃樣方のお心を考へて見ますれば、誠に有り難の念に堪えません。お返し申さんも右樣の賤の女なれば如何とも出來ませんが併しお情けは永久に忘れは致しませぬ、何つかは又御報ひ申す折りも有りませう。尙お變り無く御教示の程偏に願ひます。田や畑の仕事のまに〳〵綴りました文など出します程に。かしこ。

(評) 羨ましき御身の上かな。徒らに虛榮に走りて一向都にのみ上りたがる人たちに見せてもやりたき心地せらる。

○慈善音樂會を開くにつきて

大津市　夏山ゆり子

父を失ひ母に別れた一百餘名のみなし子の寂しいほゝゑみを買ひたさに、私ら生徒の發起て、來る四月二十六日の、日曜日を撰びまして、午後一時から、さゝなみ館に慈善音樂を開かうと思ひます一晩のおこたの火を消してゞも、技はもとより拙うございますけれど、どうぞ、哀れな孤子の爲に、世の博愛慈善のみなさま、聽きにいらしつて下さいませ、御賴みかた〳〵御案內申上ます。

猶プログラム入場劵其他の事はこの印刷物の裏をごらん下さい。

（評）冒頭の句先づ人をして強きインテレストを覺えしむ此の種の文として申分なし。

○初めて日本髪に結ふて

沼津　八代美代子

艶子さん、私ね、いよ〳〵今日は生れて初めて日本髪に結びました、前からあなたにも一度々々と勸められて居ましたのね、今日結ふ算りならお先きにお知らせ致すんでしたが、實はこうなのです。



學校がへり

近藤道江

今朝少し寢坊して御飯後に髪をとかしてましたら靑木（姉の嫁家）に居る食客でなか〳〵器用のものが有りまして、其者が丁度使に來たんですの、すると母や皆が頻りに勸めますし其人も是非一度と云ふので遂々結ふ決心になりましたのです。で私ね、あなたに何だか御目にかけたくてなりませんから伺ひ度いんですが此頃咳が大變出るので兩親が一寸も外出させませんので困ります、と云つて明日では形がくずれるし、どうか今日中にお目にかけたいんですよ、いよ〳〵あなたはモウ今日で八日もお出で下さいませんのネ丁度好い、失禮ですが今からお遊びに來て下さい、ね、けれど今御用中なら夜でも宜しいの、そしたら秀をお迎へに出しますから何れにしても一寸御口上でお返し聞かせて下さい……さようなら。

（評）面白き題なり可愛らしき文なり、御心地よさ思ひやらる。

○都の友へ

山城　有野雪子

春も漸う深う花見の客の群り出づる頃とは相成り申

候。貴女樣にはいかゞおはし給ひてか、妾事此の春より或る事情の爲め懷かしき學校に別れをつげて鍬鎌にぎり農事を手傳ふべき身と相成りまして羨ましきは貴女樣が御身の上にて候、されど農事も又實に愉快にて候。菫蒲公英咲き匂ふ中に雲雀鶯の聲を聞きつゝ青波打つ麥畑に鍬握る時の心地よさ、つたなき筆には書きつくされず候あゝ眞に愉快なるは田舍の生活にて候。いつもお顔色青くして家に籠り御勉強遊ばさるゝはかへつて、お體の毒と存じ候。御寸暇もあらば是非に一度御越し下さるべく待ち入り候、かしこ。

（評）幼き筆つき可愛らし。

○古郷に殘りし友へ

長野縣　山下とう子

お別れの後は、一人寂しく峠を登り申候。頂きに登りて、とある木の根に腰うちかけ、御家のあたり打ち眺め申候處、昨夜迄の樂しさの思ひ出されて、そゞろに涙に沈み申候。

霞にそれと定かならねども、お庭の松が枝の高き白き倉の壁などおぼろに浮び出しを、やるかたもなき心に打ちながめ候心の內御察し下され度候。黑川迄參り候へば、もはや桃の花も盛りすぎて、ちら〳〵と風のまに〳〵散るを見受け申候。なにかと打ち慰められて、漸々六時と云ふに此家に着き申候。皆樣もお變りなき樣子故御安心遊ばされ度く、妾はいつもの八疊に、丸心のランプ搔き立てゝ、獨り寂しく坐し居り申候、明

日より學校に參るべく、さま〴〵の心支度をなし居り候へ共、貴女樣と俱ならねば、何となく心も進み申さず、何卒一日も早くお出のほど御待ち申上候、かしこ。

（評）此種の文動もすれば冗長に流る此の文よく此の常弊を脱せりと謂ふべし。

○小さき姪秀さんへ

熊本縣　久野いと子

秀さん此間は種痘をなすつたつてね、痛かつたでしよう、泣きはしなくつて私ね秀さんに逢ひたくてあひたくて仕樣がないの、お仕事も手につかんで秀さんの寫眞を一日眺めてる事もあるのよ、お母樣から送つて頂く新聞に時々墨がぽつちりついてるのを見ると、私何ともいはれぬ懷しい感が湧ひてよ　必つと秀さんのおいたゞらうと思つて、去年の今頃だつたつけ、私が秀さんを、をんぶして水前寺に遊びにいつたら、さも嬉しさうに、につこりしてお築山にとち〳〵と登つてざぼんを大事さうにだつこして、あふ人每に誇りがにみせびらかした事、秀さんは覺えて居て？、この月の十二日にはね、五高の端艇競漕があるのよ、去年は秀さんはお母樣にをんぶされて、私が傘をさしかけて見にいつたはね、秀さんは樂隊を聞いて大變喜でお母樣のお背でぴん〳〵飛んで、赤旗のボートがでたら指して「やあ」と手を廣げてはやしたつけね、今年も秀さんを連れてつて見せたいとしみ〳〵思ふの、どんなにお喜びだかしれないと思つて、あゝ私がこんなに憧れたつて此手紙を書てる時は、秀さんは遊び疲れてお母樣のお膝の上に他愛なく眠つておいでゝしよう！

（評）可愛らしき御筆よ、秀さんの母樣は何と讀んでお聞かせになるでせう。

新歌謡

編輯局選

▲規定　無邪氣にして野卑ならず、現在の言葉を以て優美の思想を手近にうたふべきこと、是も一人一首限り、投書に新歌謡と明記せよ、用紙及び締切日等は前同斷、懸賞は乙種迄呈



三等

可愛い少女の草刈り唄に霧が晴れます朝霧が　丹後宮津字魚屋町　神田春子

古い調子を新しい意味にかへたもの、上手です

四等

地圖を披いて物尺當て姉さん日本は只二寸　薩南山川　山下浪子

新しい

五等

ねるも遊ぶもなの花の中よ花は胡蝶のパラダイス　栃木縣上都賀郡　青木たか子

下の七、七句がうまい

秀逸

田植近づく麥穗が黄ばむ黄ばむ頃なくほとゝぎす　常陸　橋本小啓

土地がかはれば言葉もかはる花もかはるか小笠原　相模　鍋田美代子

姫の氣まぐれ天女が舞ふて咲いた櫻に雪が降る　越後　五十嵐須賀

福津山から吉祥が峰へ見るまにかけた虹の橋　三河　寒菊子

花の模様をかすみに染めて蝶々ちらした春の山　伊豫　福井白百合

夢で見る樣な御殿へ住んで手繰つて見たいよ愛の糸　根室　久美子

よめにいつても母樣こひし子供持てもまだこひし　沼津　渡邊とよを

わたしや見ました朝早う起きて龍宮御殿も乙姫も　若狹　早水その子

ほしい〳〵と母樣せめて買て貰うたバイオリン　函館　藤本とは子

手鞠つくさへ感心するに年に似合はぬ唄上手　丹後　福丸軒女

松にほまれの君待坂を通りや飛び立つ鳩の群れ　小樽　秋田すみれ子

此度初めて投書をしたが何か一つは載るかしら　耶馬溪　勝子

○

藤は咲き〱下るけれど咲いて上るよ朝顔は　南總ちゑ子

○

いやでならぬは百姓仕事わしも行きたや東京へ　靜岡良水

○

色が褪せても小袖は小袖仕立直して妹に　臺灣中村政子

○

花が散る〱小窓に洩れる絃揃ない稽古三昧　日本橋石川文代

○

いくら開けぬ山家だとても日本の國なら手紙は通ふ　三河富美子

○

妾が住む里二見の浦邊朝な〱に日を拜む　尾道石原こいち

○

後姿がよくにた方と言葉かけたらおほちがひ　靜岡植木石子

○

れむる胡蝶の舞はれおりて春の女神に抱かれたい　遠江手塚深雪子

○

紳懸山の紅葉で染めた月が餘島で照つて居る　香川松女

○

富士の裳裾より低い野べに花摘む春の旅　福岡市廣瀨櫻子

○

今じや少女の桑つむ畑昔や矢の雨太刀の風　甲斐勝村もりよ

○

海で名高い豐後の灘は妾しの里から眞ん向ふ　南豐小川榮子

○

宅の父さんせんどの職よ朝上つて晩下る　美作櫂田靜子

○第四號コマ繪に題す

德島縣　西野花菱

艪の音（二等）
眠け催す春日の艪音、濱にや網干す陽炎立つ

摘草（三等）
霞む春日に乳母がり訪うて、姉へ土產の土筆摘む

あけぼの（四等）
森の藁家は烏の聲に、明けて美し五色雲

梅見（五等）
白いお髭の祖父君共に、梅を見に行く仲のよさ

三五頁、釣人
釣手二人が河邊で談、堤の柳が顏なぶる

四一頁、飴屋
かこむ子供に笑顏を見せて、四十お白粉飴を賣る

四五頁、由良鬼
春は朧の祭の宵を、大人まぢりの鬼ごつこ

五九頁、出勤前
寢床出るのが惜しいと云ふて、せまる時計の針恨む

六一頁、門出
四年歸らぬ覺悟はしても、またも見返る母の影

七三頁、牧場の暮
可愛い羊の夢守るよに、星が微かに光り出す

七九頁、春雨
柳烟つた春雨小路、學校通ひの袴づれ

一〇七頁、お使ひ
母にすゝむるお藥とりに、お花可愛や山越えて

記者曰、斯う云ふ作が出て來ました、面白い節もありますから別に此處に揭げて置きます。

滑稽談

編輯局選



十六字詰七行以内締切日は毎月十五日、懸賞は乙種。

三等 ○寫眞　伊豆國下田町廣岡一一二七　鈴木やす子

娘「お母樣私は全身を撮影(と)るのは嫌よ」
母「なぜ！」
娘「私は脊(せい)が高いから顔まで寫らないといけないから……」

四等 ○禁酒　根室　久美子

主婦「與作や澤山お呑みよ」
與作「エヽありがたう御座りまするが近頃禁酒いたしましたので、これだけで澤山てヘエ……」

五等 ○いゝ迷惑　本郷　朝井松子

春子仲好しの花子に向ひ、
「私どうかしてあなたと一緒の級に成り度いと思つて居るのだけれ共、私が四年に成ればあなたは五年に成つちまうから眞當に困るわ、だから私どうぞあなたが落第すればいゝと祈つて居るのよ。」

○味噌の白粉　相模　しげ

新参の下女が「お孃樣御園白粉つてやはり並の白いんですか、」つて云ひますから、「ナゼ」つて聞きますと、「御園々々つて仰るから私は味噌の白粉かと……」皆まで聞かず大笑致しましたわ。何程田舍者だつてと呆れましたわ。

○聲のかんづめ　神戸　白はぎ子

今年六ッの敏ちやんが蓄音機を見てお母ちやんおかしいれ聲にまでかんづめがある(實話)

○ライオン　たけを

父と共に動物園に行つた子供獅子を見て「御父さんこれが齒みがきになるの？」

○正直　山口縣　紫菫子

「此大根を五本買つて行きますぞ五錢位でよいでしよう」と云うと愛らしい八百屋の小僧が出て來て暫く指て計算して居ましたが「いゝえ五本なら四錢五りんですよ」與ては主人の眼が光つて居る。

○縁日へ行く　日本橋　石川靜枝

母「これから夜遲く外へ出てはいけません」
娘「なぜなの」
母「大久保のような事があるといけませんから」
娘「いゝえ妾そんな淋しい處へは行かないわ、何時でも縁日よ」

○汁粉屋　名古屋　吉田なみ子

妾が弟に靜子さんの許え出す手紙を渡して、郵便函のある所を敎ようと思つて、『柳橋を渡ると角に評判の汁粉屋があるでしよう』と云へば弟は嬉し氣にニコ〱と笑を湛えました。

○頭が先　若松　靜枝

母「信夫お前なぜ頭や顔を先に洗はないの足はおしまひに洗ふのですよ」
子供「でもお母さん風呂へ頭から先にはいれますか」

○田舍者　朝霞史

二人の田舍者向島に至り、次郎作「ありや何せる所だんべい」太郎作物知り顔に「ありやルーピロポッサちゆうだんべい」次郎作「おらもそうだろうと思つた」

○お父樣の車に乗る　堺市　淸雪女

或る日仕事をして居りますと車屋の茂ちやんが出て來まして色々面白いはなしをした末に私が茂ちやんは大きくなつたら何になるのと申しますと、「はい私は大きくなつたらえらい人になつてお父樣の車に乗るのよ」と申ました。

○私もおもい　武藏　すみれ子

先日四つになる弟をおぶつて川原へ遊びに行ましたの坂を下りながらお前はおもい事れ、と申ましたら僕もおもいやて背の上で申ますのよ。



卓上談話（課題）

若葉の風さら〳〵と綠に匂ふ夏木立の陰に、卓を圍んでの物語は何てせう、夢の話、母の話若き經驗談、繪葉書の話、男子の話、それからそれと話の興は盡きません、記者も諸嬢も謹聽いたしませう。

一等　若き經驗

鹿兒島市　露萩子

私が福岡市から、この鹿兒島に來た時は丁度十歲て尋常三年の時てしたが、何故に川が逆さに流れるかしらと、不思議てなりませんてしたが、後、海の方へ流るゝのだ、と氣づきました、所が今度は海がどうして此方にあるだらう、と又うたがひました、けれ共、其時はどうしたものてしたか、誰にも尋ね樣ともせず、丁度高等科の壹年になりましてから、地圖て福岡市は九洲の北端、鹿兒島は南端だと、知りましたのですが、其時は重荷でも下した樣な氣がしました。今も地理の時になると思ひ出して、おかしくてなりません。

智識のありがたみも斯う云ふ事から分つてくるのです、誰にてもある經驗て、而かも餘り言つた人はありません。

二等　夢の話

磐城國平町仲間町四十五番地　千葉光子

英國の所を復習して居ると、微に人の聲、フと見ると、あら不思議兩側は高い西洋造り、電車馬車て大賑か何んだか見たような市街、あゝそう地理書にある倫敦の繪と同じ、おゝ嬉しい、きつと倫敦よ。あの少女は私を呼んでるわ、日本語の上手だ事私は立派な運動室に案内されて、可愛い西洋人と庭球をしますと私は何した故か、外にばかりして、遂に球を窓から落したので、驚いて窓から頸を出すとたん、すとん、と落ちた所は海の眞中、おゝ冷たい水、驚いて眼がさめた、見ると花瓶が倒れてゐて顏や手が水だらけてした。

夢にも斯んなハイカラな夢があるやうになりました。

三等　わが母

大阪豐能郡池田町　寺部君子

私は九つの年に母樣に別れて今は無いのです、被入た頃は、學校から歸ると復習を仕て、明日習ふ所を母樣に敎るのです、少覺えが惡いと、那麼事て母樣が無く成たら何するのですと、虫の知らせか口癖の樣に言はれましたが、もう遊び度一方で、其が濟て琴のお稽古に行く時は籠の鳥が放れた如く、飛て行きました。母

樣が心を込めて敎えて下さる事も馬耳東風に聞き流して居た昔を思ふと今更悲しくて成りません。母樣が無く成たら何うするのですと、言はれたお聲は今も尙耳の底に響いて居ります。

子養はんとすれば母在さずて、此感も誰にだつて起ります、恐らく異論はありますまい。

四等　夢の話

上毛磯部　元子

私は讀書が好きで寢るのが惜しくて夜更くるまで致します。其れかあらぬか、身體が衰弱して夢をみます。其れが多くは書物の夢です。ある時、本箱をさがしますと、つひに見たゝめしもない靑表紙の和裝の本。「月と草花」と、朱色の文字。私は無心に取り上げて、中を開かうとしますと、目が開きました。實に殘念。私は月と菫の樣な小さい草花がすきです。其れ故見た夢でせうか、實際こういふ本があるでせうか。私は夢に誘はれて翌日、家中を捜しましたが、似た樣な本もありませんでした。



孤村　大阪　生田花朝

夢に詩歌を作つた人さへありますから、夢に書物を見る位の事は、文學好きならあるべき答です。

五等　夢の話

大阪東區横堀六丁目　木村春江

行きたい〱と思ふてた都で逢ひたい逢ひたいと思ふた花樣（友の名）にお逢ひ申したのは朧月がぼつと匂ふてお花がちら〱散る晩でした、懷しい、そして美しい御顏は昔も今もお變りはありませぬ、ま白のみ手に我手を握つて、涙ながらに其後の事ども御尋ね下さいました、うれしさにもゆる血しほに我唇はいたくわなゝきましたが、いぶかしくも一言も聲は出ませぬ、こはいかにと思ふ刹那に目ざめました、がまざ〱と見し御面影はどうしても夢とは思はれませぬ、私しは、あの晩きつと私しの魂があくがれ出て、花樣に御目にかゝつたのであると今も猶信じて居ります。

これは新派の夢です。

秀逸

○我が母　奈良縣　福西田鶴子

私の母は今年五十になられます、いつも私にかう云はれますの、「お父さんはね、今はあんなに優しいお方になりましたが、お前の小さい時分にはそれは氣むづかしい方で、何かちつとお氣に障ると、すぐ妾を撲ちました、そしてフイと家を出たきり三日も四日も、戻つて來られなかつたの、人に聞くと、聞くも忌はしいお遊びをなさつたとか、他人は妾の事を、お人よしだと笑はれたけれど、妾は、貞操を守るのは女の道、又お前と云ふ可愛のがあるので、これは私の徳がないからだ、事へが足らぬからだと、夜通し泣き明した事幾度あつたかも知れません」って私は之をきく度に胸がはりさけんばかりです。

○わが母　土佐　高橋白ばら

眉毛を落した色の白いお顔に根下りのちひさいまるまげこれは今年四十六歳の私の母です。額にきざまれた幾條かのしわ…そは父なき後の二十とせをただ一向に私の爲に苦心せられた形見かと思ひますと有がたい樣な淋しい樣な…いひえぬ想ひに涙がこぼれるのです。

○わが見たる男子　佐賀縣　岩井くり子

何々學校卒業の博學のお方は知らず片田舍の小道を通ると小さな茶屋に二三人の若者腰打かけお姉さんどこに行きますか、お供しましようか、あらリボンが落ちたよと後からついて來る顔のにくさ、終には相手にしないとすご〵〵と引き返すおかしさ、これでも村の好青年かと。

○繪葉書談　下野　青木その

誠にお恥しいわけて御座いますが久しいあと繪葉書中の美人を撰て友人へ暑中見舞を出しました何しろ印紙を買ふにも一里も行かれば成らないので惡いかとは思たが書損じ葉書の印紙を切りぬきはり付て出しましたすると四日目に御返事が參り末筆に下すつたお端書について配達夫が申ますに此書に付て印紙何税とやらて罰金六錢です非常に美人繪だからまけてやりたいが規則だから是非がないと大笑ひ御注意然るべくとの御親書に預り大いに赤面致しました。

○わが母　近江　小倉壽榮

母は今年五十てすが一昨年父がなくなりましてからは家事萬端から、商業の事迄取しきつて父のかはりをなさるのてすから大そう年が老けて見えます、いつも「父が居ないからと世間に笑はれる樣な事をしてくれるな」と操りかへし〵〵云はれる時のかなしさ、御胸の中を察して姉上と人知れず泣く時があります、母はあまり强くはありませんが、弱い事もない、そうして大そう人にあはれみ深くあはれな人を見れば惠むのを樂みにしても一つは男衆に畑を作らして暇な時に見に行くのをこよない樂しみにして居るのです。

○わが母　大分縣　御手洗操子

お友達のお母さんなどは、朝ても早くから起きてご飯もたきお掃除もすんて、お友達を起すさうてございますのに、私のお母さんばかりは私共姉妹を朝早くから起こして、私に御飯を焚かせ妹にお掃除をさせてそれがすまなければ、どんなに遲くなつても學校にやつて下さらなかつたのてす。試驗の時なんかは、ほんとに母を恨みました。

もう此頃はお友達は皆立派な奥樣になられて處處に別れましたが、第一ご飯が焚けないのに困ります、とのお話…私は今更ながら、母の慈愛深きを悟りました。

○夢の話　大阪市　松田しづゑ

妾は是迄たび〵〵高い所から量る事も出來ぬよ
うな深い〵〵奈落の底へ落ちた夢を見ました、削つたような巖頭から底もしれぬ程の谷底へ落ちる時などは其は〵〵恐しいと云つたら何とも例へようがございませぬ、そうして下へ落ちてしまふと目が醒めますが其時には屹度腋の下に冷たい汗が溜つてゐます、何分夢の事てすから別に何とも思ひませぬが然し其が餘りたび〵〵てすから若しや妾が華嚴の瀧か淺間の噴火口へても投身する前兆てはないかと思ふのですが皆さん！如何てせう。

學校生活

二等 ○勉强するお家

大阪 幸子

私のお家には八百人の子どもがありまして、十五人の父母に育てられて居ます。それはく圓滿な家庭です。淸潔をお家のおきてとしてゐますから廣いお庭にも木の葉一つ落ちて居りません。

三等 ○學校の農業

陸前米谷 小出久代

妾の村は七百戸ばかりある內、何職業の家でも大抵農を營みますので小學校でも高等二年以上から農を敎はつて居ります。何時でも火曜の五時間目で土曜日は特別に午前は學課、午後は一時三十分だけ農業でおもに男子が致します女も折々手傳致します、其收穫を賣つて校費にします

四等 ○出水

岐阜 澤子

私の村には、尋常科ばかりで、高等科が有りませんので、私は、川向の、他村の學校へ、通いました。校舍も立派で、景色も良く、お友達も澤山あるので、毎日樂しく、通ひましたけれど、只一つ、殘念に、思ひましたのは、行きに歸りに、渡らねばならぬ、長良川は、夏になつてたびたび雨がふると、大水が出るので、それが爲め、時々、遲刻したり、舟止めになつて、缺席したりする事でした。

記者曰、本號より「學校生活」の懸賞は凡て乙種規定によります

秀逸 ○敎室の窓

大阪市 生田みのり子

私が昨年まで通て居りました小學校は市の東南に御座います、あのやかましい四天王寺の釣鐘堂は朱色あざやかに五重の塔と共に若葉の梢ぬけ出て、一すじに私等が敎室の窓硝子に映ろので御座います、其樣恰ど水彩畫を見るようで、一番いやな理科の時間でも此れを見ると心がすがすがしい致します

○學校の附近

上總 師野御屋綾子

私の學校は三方山にて、東は名高い九十九里濵であります、大風や大雨が吹いたり降つたりする時等には濵が荒れて、手にとる樣に聞へます、戰爭紀念の爲め女學校三年級の生徒が植ゑた櫻の木も今は西南北の山々は皆翠の色であります、都から西風が大きくなつて滿開して居ますが、學校の運動場へ吹く時は花瓣がヒラヒラと散つて海へも蝶々の如くに飛んで行くのです。

○學校の花園

福井縣 片山千里

妾の通ふて居りました小學校では、三四年の生徒男二名女二名を一組として、一坪の地を持せ、其所へ各自の家にある珍しい草木を植させ男には耕させたい肥料をかけさせたり、女には草をむしらせたり害虫を驅除させたりしますのですが、互に競爭をして世話をしますから、立派な花園が澤山出來まして、年々少からぬ金が上りますが、其は皆貧民の子弟に筆墨紙を買つて與へる事になつて居ります。

○學友會の四部

千葉縣 石渡けい子

式日を問はず服裝は、一般に筒袖で袴は、紫紺を標準とし之に徽章として、三條の白線を附します。それで職員及全生徒を以て組織せられた學友會なるものがあつて、之は文藝、運動、園藝、雜誌の四部に分れ、各、其の名の如く文藝技藝を、練磨し、體育を獎勵し花卉、蔬菜を栽培し傍ら養鷄の業にも携ります。で雜誌部は、是等の景況、校內の模樣を報じ職員の有益なる、談話を、揭載し、會員の詩歌文章を募つて學期毎に趣味ある雜誌を發刊致します。

○出席奬勵　大阪市　渡邊みね

私が、この三月に卒業いたしました小學校では毎月、月末に各組は各出席數を調べて、是を百分比例にし、滿場で讀み上られます、そして其內を先生が、一等と二等には賞牌を貰ふことが出來まして貰つた組は數室の入口に揭げ、是を生徒は、最も級の名譽といたして居ります、ですから生徒は、日々學つて登校し、爲に大なる効を、顯はしました。

○お庭の樣な運動場　名古屋市　櫻井つた子

私の每日通つて居る學校は町はづれの高燥の處に建てられた新しい建物であります。そして其の運動場は元或る人の別莊であつたと云ふ事ですから廣い事は他に類がありませんただ運動場ばかりでも一町四方位はあります、それに此の內には大きな池もありますし飾り井戸などがあつて運動場には一寸珍しい處です又池の周りには木が森の樣に茂つて居ますので夏などは其の下に居るといゝ心地です。

○初めて女學校に入る　水戸　重子

今迄小學校の墨だらけの室に居た、私は、始めて女學校へ入學した時は、校舍が廣く、講堂などは、五百人以上入いれる位、正面には御寫眞を置き、又段々が出來て居て、生徒が揃つた時後の方が見える樣になつて居る、造り方や飾り方が隨分立派なので唯キヨトキヨトする樣です校長先生の御話には、生徒一同木綿服を用ふる事、髮飾りを用ひぬ事私はいつも、嬉しく承るのて御座います。

○花に埋れた校內　土佐　弘光芳樹

つひ去年迄通つてゐた村の小學校は私の家から十八町、廣い田の眞中小さい杉垣の內に只一棟外見はよくないが 其中の師弟の間は實に親子の樣なのが我學校の評判です、こんな長閑な春の日はげんげや菜の花に埋れた校內からテニスの玉がポーンと飛び出て、柳垂るゝ小川に流るゝ樣が思ひやられて懷しく行き度い〳〵と病の床にもがいてゐる。

○涼しい學校　ゆき子

私の學校は去年の春新築せられたのでありまして從つて、未だ多くの日數を經ませんから校舍は甚だ美麗てあります、且つ、衛生を重んじて高く建てられてありますから大層心地が宜ろしくあります、ですから世人の暑い〳〵と苦しん

逝く春　陸奥　矢須子



て居る夏の盛でも私等は學校へ來て靜かに勉强をいたします、そして暑くて嫌になつたと思ふ頭には教室の横にある大きな窓から涼風がそよそよと吹いて來て私等の汗を拭ひ去りますのて皆はひどい暑さも知りません、其上先生からはいと御懇篤なる御教を受けて日々樂しく通學出來るのは、實に、幸福な事だと喜んて居ます。

○洗面　山口縣　貴船艶子

私の學校には生徒が每朝顏を洗はず目糞を付けて來る者が澤山有りましたから私が每日顏を洗つた者を調べて居りましたら今日ては一人も洗はぬ者はなくなりました

○學藝會　信濃　鈴蘭

私共の學校では月に一回づゝ全校の生徒が集まつて學藝會を開きます。各級から一人づゝ御話をしますが、上級生の眞善美などいふ鹿爪らしい理論から、下級生の無邪氣な、お伽噺などありますの其他英詩の暗誦英語會話、音樂の演奏、裁縫の運針の競爭などなか〳〵趣味があります、殊に女子に最も大切なる常識の試問もあつて、それには辰丸事件は米國との關係だの、お米一升三錢五厘などいふ珍談がありますので、生徒は自然日常、常識の修養に心掛けてなるのです。

○齊美會　下野　磯みい子

私の學校では齊美會といふのがありまして會員は高等科の男女生、會費は月に一錢づゝです。この會費でテニスも二組買ひました。雜誌も三種許りとります。そして硝子窓のこはれたのや其處、此處の修繕も皆會費から剌出します。又學校用のバケツもみな一錢づゝの會費て買ふのです。

○紀念木　陸奥　小島もと子

私は小學校卒業したのは三十七年の四月一日てした其時私と同じに卒業した方は女の方ばかり七人てした、其時紀念の爲に松子樣と二人て櫻の木を一本植ました後の五人の方は、落葉松三本植ました其後私は父母の膝を遠く離れて五年振りにて古里に歸り其櫻の木を見たら大分大きくなつて花が澤山咲て居りました。

女醫顧問

東京女醫學校長　鷲山彌生

○前號『肺病患者の看護法』解答つゞき。

『答』　患者に對しては時期と、病氣の輕重とに依り、其看護法を、異にせざるを得ざれども、何れの時期にも缺く可からざるは、日光の射入と、空氣の流通宜しき室を撰び、滋養多き食物を充分取らしむ、此食物は種々調理法を考へ、味を變へる工夫を講ぜざれば、慢性の疾患なるを以て、患者に飽きを來たさしむるに依り注意せざるべからず、又俗界を脫せしめ、精神を安靜ならしむるは、最も肝要なり、喀血等ある時は絕對的安靜を要するものなるも、其他の場合には、相當の運動を試み、又庭園の散步等は大に神身を爽快ならしむるものなり。

○盲腸炎　私は昨年の末から盲腸炎を患ひました今はすつかり快復しましたが此病氣は再發の恐れがあるとのことてすから何卒病後の攝生法をお敎へ下さい（甲斐、弱々女）

『答』　盲腸炎は結核性のものと、刺戟に依りて、來るものとの、二種ありますが、結核性のものは治癒する事はありません、依りて貴孃の罹られたるものは、第二のものと思はれます此原因は多く食物の不攝生より來るものでありますが、又一つには非常に寒冷に逢ふとか或は過度の勞働に依りて、來る事もあります、故に再發を防ぐには、是等の原因を避くる樣注意せんければなりません、即ち食物の攝生を第一とします、御病後の事てありますれば、滋養物は充分食せんければなりませんが、なるべく消化し易きものをお撰びなさるのが、肝要でありまず例令ば牛乳鷄卵及び凡ての、肉類は大抵胃の中にて消化し盡すものでありますれば滋養物として之等をお攝りなさるは、最も適當です、之に反し野菜類は盡く、腸內にて消化するものでありますに依り當分此野菜類は、極僅かに食せらるゝ樣なされたし、菜の莖が盲腸にかゝり、爲めに盲腸炎を起す、例は往々あります、御飯は充分軟かになし食せらるべし、長途の旅行をお見合せになり、殊に長く人力車、又は馬にお乘りになる事を禁じます、且つ重きものを提ぐ可からず又身體殊に腹部の冷えざる樣注意し始終腹帶をなし居らるべし。

○腫み　妾は大掃除をしまして其夜から非常に身體が腫んで來ましたが何う云ふ原因でしやうかお敎へ下さい（名古屋、藤井志津子）

『答』　塵埃の內に、皮膚を刺戟する毒物混じ居り、之が爲めに腫れたるものかと思はれますが俗に水腫と稱する樣に腫れしならば體內の病氣と思はれます、前者ならば、今頃は癒り居る筈ですが、今日迄依然と腫れ居る樣では、後者であります、之は先づ腎臟病か心臟病と考へますが、此病氣を持つて居るのにも關はらず、何等の自覺症候なき事があります、然るに大掃除に際し、過劇の勞働の爲め、此病氣を誘發したる如く思はれます、何れにしても醫師の診斷を受け、心臟に故障がなければ、一應尿の檢査をしておもらひなさるが必要であります。

○にきび　顏ににきびが出來て困ります

又背より腕の邊にかけても同樣なものが出來時時大きくなつて痛むことがありますか療法のお敎へを乞ふ（野の花）

『答』いゝにきびは脂肪分泌の過剩なる人に生ずるものなればなるべく脂肪分の少なき穀類野菜類等を主に食され、且つ常に食物の量を減少さる可し、而して皮膚を淸潔に保つ樣、毎日一回入浴を怠る事なく、其際石鹸をつけたる西洋手拭にて充分皮膚を摩擦すべし、斯くして廿歳以上に達すれば大抵治癒するものなれば、御心配なさるには及びません。

○頭痛　私は十七歳のものですが十日許り前から腦が惡く頭に鉢卷をして居るやうな心地がします又耳も時々風がつまつたやうな氣がします療法お敎へ下さい猶健腦丸は効めがありましやうか（備前、病困女）

『答』腦が惡いとは、醫師が診察の上でのことですか、又頭痛でもして、御自分で腦が惡いのだらうと思召すのですか、頭痛は種々の原因より、來るものでありまして、例令ば鼻の病或は胃病、子宮病等は、之が原因となります、其他多くの原因により來るものでありますれば之を確めた上、原因に向つて治療せんければなりません、腦病と假定し、其衛生法及び療法を説かんとするも、腦病には其種類多く、隨て其治療等も其病症によつて、各異ります、故に症候及び原因の不分明なる問題に對しては、御答は出來ません、兎に角醫師の診斷をお受けなさるが、最も得策です、決して賣藥等を信賴する事のなき樣注意致します。

○腋臭　私はいゝわきが症で困つて居ります何かよい療法はありますまいか（田舍娘）

『答』腋臭は根治する事は出來ません、が一ヶ月二回宛局所に塗布して置けば、更に臭氣のなき樣になる藥はあります、然れども此藥は毒藥なれば遺憾ながら此欄に掲げる事は出來ません、依つて貴殿に於て、若し御上京でもなさる事がありますれば御立寄りなされ塗り方をお敎へ致し又藥も差上げます。

○氣管支と痔　私は十年程氣管支で苦んで居ります此頃は聲が日増にかれて極く低音でしか談話することが出來ません何うにかしてせめて聲の自由に出るやうには成れますまいか猶私は痔を患つて居りますので容體で藥は用ゐて居りますが最初は効きましたが只今は効がなくなりましたので大便の度毎に出血して非常に苦みますのみでなく平生にも痛んで困ります何卒療法のお敎へを仰ぎます又牛乳と鷄卵を日常用ゐて居りますが痔に障るやうなことはありますまいか（三河、不幸女）

『答』詳細なる御容體書にて御病氣も略想像する事が出來ました聲音の嘶嗄するのも肛門より出血するのも、手療治にては、到底治癒する見込みはありません、一時も早く各々專門家の治療を受けざれば大事に至る樣に考へられますから、其方針を御取りなさるが急務であります、鷄卵、牛乳等は最も多く御攝りなされたし決して痔に障る樣の事はありません。



讀友倶樂部

益者三友損者三友直を友とし諒を友とし多聞を友とするは益なり

孔子

紹介欄

紹介は個人の事に限る廣告的紹介は一切斷る。

（五）高等女學校を卒業して家政學を修めました、目下は技術研究中てすが其方面に近いことて自活して行かれる道はありますまいか、或は餘暇に研究が出來るところてあれば、それてもよい。（貞子）

（六）海外に行くを望む、英、米、佛のうちならば何處にても宜し、目的は技術研究、正當の勞働ならば如何なることにても厭はず、よき方法はなきや。（匿名女）

（七）外人のところに小間使に行きたし、履歴書が必要なれば直ぐ送ります。（無名女）

（八）學資の助けにする爲めに、肉筆の繪葉書を毎月定めて買つて下さるやうなところはありますまいか。（一女）

（九）生糸をとることを習ひたく思ひます、月謝など出さず、寄食して居つて、敎へて下さるところはありませんてしやうか。（りか子）

（十）三四年前某宗敎女學校を卒業し、目下田舍の私立女學校に敎鞭を執りつゝあり、將來英語にて身を立てんとす、家庭敎師にてもよろし周旋を乞ふ。（ＨＲ女）

本欄掛曰く、本欄に關する問合せ其他の用事は凡て往復ハガキか返信用切手封入てなければ答へず、又（一）（二）の番號を書添えて問はれたし、姓名在社の者は答ふ、又記者に紹介を賴まるゝ向あれど紙上に出す外、直接紹介の義は斷り申す

文學顧問

問　記者樣風景水彩畫帖の著者及び定價發行所を敎へて下さい（安藝、一少女）

答　著者は小林萬吾氏、定價五十錢、金尾文淵堂發行

問　榊原蕉園樣の御住所はどちらですか

答　東京府下北豐島郡日暮里村金杉二六六

問　記者樣にお尋ね申します作文中に〇點やヽ點を付けてありますが何故に付けるのですか（小梅）

答　圈點のつけてありますところは一篇中の主眼の場所か若くは文章に妙味のあるところです。

問　私は之れまで詩のようなもの許り作つて居つて外の作文は一ツも出來ませんので今から習はうとして居ます叙事文、叙情文は誰のがよいのですか適當の書物一二册及び其定價發行所等御敎へを願ひます（上總、小川たき子）

答　參考書も隨分數多くありますが、それよりも寧ろ餘り參考書のやうなものをたよりにせずに自分で努力して澤山作つて見られる方が宜しう御座いまやうし。

問　記者さま三昧の意味を御敎示下さい（若狹なでしこ女）

答　梵語より出でたることばにて、念佛三昧、又物三昧など云ひて、心を其ものに集めて、一意專念他に移らぬことを云ふ。

問　記者先生に御伺ひ申します妾は和歌や新體詩が學び度いと思ひますが御地に通信敎授する所はありませんか亦獨習書はいかなる本がいゝでしようか何卒お敎へ下さい（神戸柾子）

答　和歌や新體詩の通信敎授をするところは只今ありません獨習書としては岩野泡鳴氏著新體詩の作法、（定價三十錢、神田區錦町一ノ十修文館發行）窪田空穂氏著短歌評釋、（定價四十五錢、神田區駿河臺鈴木町十二、玄黃社發行）などが宜しいでしやう。

問　『言海』の發行所及び定價郵税を御知らせ下さい（岡山、千年）

答　京橋區南傳馬町一ノ十二、吉川弘文館發行定價一圓五十錢

（附記。以上の書籍を需めらるゝ場合には本社用達部へ申込まるればお送りすべし、詳細は廣告欄を見られよ）

問　記者樣よあの和歌など俳句などを作るに新派とか舊派とかゞ御座いますつて私はまだ其の新派はどう作るか舊派はどう作るかちつと

も知らないのだからどうぞ誌上でお敎へ下さいな。（羽前、高橋たか）

答　これは本誌二月號の同欄に柳月女の問にお答へしたことがありますから就て御覽なさい

讀者と記者

○記者樣寫眞をお送りしやうと思ひますが直へ住所や氏名を認くのですか又今月送れば何月の誌上に出るのですか（埼玉縣、木下澤子）（記者曰、寫眞の裏でも封筒でもどちらでも宜いのです、掲載は何月とも申上げられませんが、早い方から順次に揭げます）○記者樣私は字も文章も大變下手なのですが、今度恥を忍んで投書致しました。どうか宜しく、沒書になるものも、郵税を入れておくと、評或は點數などを入れて返して戴くことは出來ないでせうか。評のよくなり點のよくなるを樂みに益々勵むによからうと存じますが（兵庫、しづく）（記者曰、編輯が多忙ですからそれまでは出來ませんが、然し揭載する分は愼重に拜見します）○記者樣暫らくお目に掛りませんでした私は少し感じた事があつて昨年の四月以來投書せずに居りまして昨年の九月末に小樽から上京致しました今度又ボツ／＼投稿致しますから宜敷御願申ます尙記者諸先生の御壯健を祈り上げます。（小石川にて、梶水仙子）（記者曰、全く暫くですね、幸に復活を望みます）○御親切なる記者樣に一寸御伺ひ申上ます私も愛讀者の一人です、之れより奮發して投書したいと思ひますが一人で、いく種も投書することが出來ますか何卒敎へて下さい（山川信子）（記者曰く、差支ありません、だが各欄に就て一篇或は一首に限ります）○記者樣、新參の私、一向勝手が解りませんが投書するには何麼すれば宜敷いか（名古屋市、吉田たま子）（記者曰、各欄の初めに投書規定が添えてありますから御覽下さい）○記者樣左記の件に御答へ下さい。一、美文、短文、繪畫、誌友倶樂部、其他を同封にしても宜しいですか。二、繪畫、誌友倶樂部の原稿は半紙で良いですか、尙倶樂部は何字何行以內と定めて有るですか。三、今月十五日の〆切原稿の分は來月の本誌に揭載してくれますか。（靜岡縣深井濟子）（記者曰、左にお答へします。一、同封て差支ありません、開封にすれば三十匁まで二錢でまゐります。二、兩方とも半紙で宜しい、誌友倶樂部は二十一字詰十行以內。三、翌々月一日の誌上に揭載されます）○記者樣妾も愛讀者の一人です以後諸孃に御交際下さる樣御引合せを願います、又原稿に十五日〆切と云ふのは本社で御受取が十五日ですか、又は郵便局の受附が十五日迄ですか、して文がうまくも〆切後になれば沒書されるでせうか一寸次の誌上に御知らせを願ひます（小縣、武井晴子）（記者曰、斯樣な質問は以前度々お答したことですが、今一度申上げましやう、十五日の夕刻までに本社に着したのまで、と云ふ意味です。〆切期日に遲れても勿論沒書にはなりません、只翌月〆切の分にまはされるのです）○記者樣文壇餘興ははがきでも宜しうございますかお知らせを願ます（往鄉民、花園守）（記者曰、はがきではいけません、矢張り半紙か原稿用紙に認めて下さい）○記者樣に御伺ひ申上げます一昨日私の所へ廣島よりすみ子として葉書が來ましたが所がよく分かりませんから返事を出さなくてよいでしやうか私氣がかりでしかたがありませんからどうぞ敎へて頂戴な記者樣御願よれ（深川區猿江裏町二〇五、吉田千代子）（記者曰、サア、住所の分らないのは何うにも致し方がありますまい）○記者樣私はやう／＼高等小學校を卒業致しましたばかりのごく淺學なもので御座いますが女子文壇を何より樂にして居ります每々諸姉樣方のお作を拜見するにつけてもとてもと思ひますけれど何事も一心になればとお耻しい作ですけれど投書致しましたどうぞ御面倒乍ら宜しくお願申ます（兵庫、露の玉）（記者曰、何ごとも一心になれば出來ぬことはありません、折角御奮勵なさい）○記者樣私は誠にふつゝか者で御座いますが女子文壇愛讀者の一人と成りましたので何卒文壇御愛讀のお孃樣方へ改て御紹介下さいます樣與々も御願申上ます（長門萩川島二三六、吉田美代子）（記者曰、諸孃！此のお方も御仲間入りを願ひます）○記者樣少しお尋ねいたします本誌に出す繪畫は二寸と三寸にして彼の通り畫てかけばよろしいのですか又用紙は端書でよろしいですか（豐後、一少女）（記者曰、畫てかけば宜しいのです用紙は半紙を望む）○記者樣いつも御機嫌よく御盛し遊ばされ何より御喜び申候五月の本誌大そうお早く御送り下され誠に有り難く御禮申上候異鄕の空に父母なく友なく暮す身の唯一の友は女子文壇にて候先は御禮まで申上候（韓國龍山軍司令部官舍、原覺里子）（記者曰、御禮で痛み入ります、益奮勵してお言葉に背かぬやう勉めましやう）○拜啓記者先生並に諸孃には永らく妹緩子を導き被下厚く御禮申上候さて

嫂子は二月中旬より少しく心地すぐれず只かりそめの感冒と存じ居候ひしに、 四月初つ方より病勢一變して十八歲を一期とし十二日 夕刻茅ヶ崎の客舍に永眠いたし候、 早速遺言に依り諸孃に御禮申上候ひしが伺ひ洩れの御方には紙上を汚して御禮申上候（牛込、九穗嫂子兄凉夫）、記者曰、本社及び誌友諸孃を代表して、謹んで御弔詞を申上げます）〇紀伊、無名女に。和歌俳句は用向きの手紙と一つに認めてはいけません、必ず別に半紙半枚に清書して下さい（記者）〇愛知縣、 今枝須磨子。日向、福山奘爾子。函館、りりー子。筑前、白菊。渡邊。本所、秋山欣子。愛讀女。信濃、駒澤ひろ子。伊藤やえ子。秀子。松本つる子。春江。伊勢、天人菊。熊本、峽よし子。北海道、小島とし子。中山道江子。房子。島越淸子。備中、田上浩子。町子。雨宮靜子。和泉、藤原奘代子。元子。以上の諸孃には一々お答へはしませんが、 お尋ねのことは皆宜しいのです。 猶、 御丁寧なるお書翰は拜謝します（記者）

圖書換讀

〇手許に二十世紀、美文の資料、明治靑年文壇、日本女禮式、新約全書、萬物製法、秘術寶典、落語大全、お伽共進會、しくじり男、幻妙不可思議奇術、毛筆畫手本、 以上十册不用になつて居り升から皆樣の内に女子手紙のしをり、秀才文壇、美文作法、ハイカラ令孃、戀と戀、朝ばれ、夏子、婦人世界、水彩畫の栞、戀學生等不用でしたら御交換して下さい （靜岡縣引佐郡中川村瀨戶廿一深井淸子）〇滕澤利喜太郞先生の算術小教科書が、上下共にあります、 長澤龜之助先生の「數學辭書」か「靑海」と取換へ下さる方はありませんか（靜岡縣庵原郡江尻魚町藤波馨子）〇下の詩集を御讓り致します、 御入用の御方は往復端書にて御問合せ下さい 繪葉書て御問合せの方には御返事の端書代は持ちます『泡鳴詩集』『孔雀船』『春駒』『花がたみ』『迦具土』『ゲーテの詩』『ハイネの詩』『銀鈴』『金銑』『靜波』『玉虫』『塔影』『無弦弓』『テニソンの詩』『有明集』『草わかば』『獨絃哀歌』『春鳥集』『花守』『花守日記』『二十八宿』『毒草』『うもれ木』『紫』『舞姬』『夢の華』『みだれ髮』『戀衣』『東海遊子吟』『曉鐘』『天地有情』『夏花少女』『花妻』『花外集』『ゆく雲』『天風寬帆』『睡蓮』『おもひ草』『竹柏園詩選』『七ッ星』『若き日』『藤村詩集』『二十四絃』『白羊宮』『白玉姬』『湖畔の悲歌』『まひる野』『さゝ笛』『夏廂』『小鼓』『わが思』『片われ月』『小詩國』『伶人』（東京府豐多摩郡下戶塚村五二六番地目白臺下にて愛知俯拾螢室にて渡邊俊子〇諸姉樣方よ只今姿に家庭之友、文藝倶樂部、妖怪奇談、あはれみ、俳句集、英學生、社會半面、明治の家庭等の不用書がありますのよ。皆樣の御うちにて多情多恨、鏡子 不如歸、般若お作、ハイカラ令孃等御送り下さいませんか御指命の書に自筆の拙畫を添へてすぐ御返送致します（福井縣遠敷郡鳥羽村無惡池田秀子）〇貴孃樣の中に里見八犬傳の上卷御不用の方あらば何卒おゆづりを願ひたいのです御禮には御好みに應じまして夏ショールか夏手袋か又紅葉全集、日本文學書、母の面影、美文作法等て御返禮神にちかつて致しますもし御きゝ下さる方あらば最初に御一報下さる樣御願ひ致します（東京京橋區月島二號地岸本別莊内、田村波津子）〇私はハガキ文學、女子文壇、中學文壇、秀才文壇、ムラサキ、女學世界、其他二三の小說等が不用になつて居りますから郵税さへ御自辨下さいますなら男女にかゝはらず送ります（下總國印旛郡富里村中澤相川芳太郞方三森ゆき）〇皆さんの中で金色夜叉、思ひ出の記、夜叉男、多情多恨、可憐娘、乳姉妹、鏡子、夏子等其外文學雜誌の御持ちのお方は私の小說、雜誌、嫁の秘密、紙きぬた、文章世界、中學世界、中學文壇、秀才文壇、 良友、少女世界、婦人世界、ハガキ文學、明治才媛文集、中學生小學世界等合せて七十册餘有りますから御交換下さい（三重縣志摩郡磯部村迫間、南由江子）〇最近文藝倶樂部 新小說、文章世界等御送り下さいました方には私の演藝、衣裝かゞみ、女學世界、趣味、ハガキ文學等て御返し致します（東京芝三田二堤方たか子）〇皆樣の中に、不如歸、新朝顏日記、玉蟲 婦人世界、言海、文藝倶樂部、濱子、明星、玉むし 緣不緣、あさばれ、百合子、化粧かゞみ其他種々の雜誌や、小說本の不用の御方は、御情を以て、 私等の女子文壇、鏡子、女子修身訓、算法記、自然と人生、天地有情、令孃と男兵、千草の錦、花紅葉等に姿等の寫眞一枚づゝ必ず差上ます（上總山武郡白里村南高古内俊一郞方大藤秋子、北田金亭、齋藤馨子）〇私の許に悲戀悲歌、夕潮、己が罪の歌、ハイネの詩、睡蓮、紫、二十八宿、まひる野等の詩集及徒然草、伊勢物語（上下）古今集遠鏡、詠歌辭典、 油繪階梯、盆栽法秘訣、家庭衛生學大意等の雜書があります、 皆樣の中で夢の華、舞姬、有明集、花守等の詩集を御持の方は右の書物の中の何れかと御交換を願ひます、又雜誌には文藝倶樂部、趣味、新小說、中

央公論、新聲、新潮、女子文壇、秀才文壇、演藝畫報、寫眞畫報、文章世界、文庫、ほとゝぎす、卯杖等新舊合せて百八十册ありますから乗、ひぢつき其他編物にてお申込下さい、神に誓つてお送り致します（東京芝區中門前一丁目十一長谷川秋溪方靜枝）○御手許に女學生、小さなハート伯爵夫人、みだれ髪、其他面白き小說本御持ちの方は御惠み下され屹度返禮には相當の小說本を差上ます（山形縣南置賜郡鹽野相田とく子）○皆樣の中で思出の記、魔風戀風を御持ちの方は私の新不如歸、後の新不如歸、肉彈、乳姉妹（上下）と交換して下さいまし其他可憐娘、ハカラ令孃、御持ちの方は婦人世界、女學世界、秀才文壇などありますから何册とても交換下さい（名古屋市入江町三輪市太郎方三輪靜子）○私の手許に、舊の卷、露子夫人、名家批評文集、文學偉人傳、紛紅集、ハイネの詩、殘花集、新體詩模範、其他樣々の詩集や小說があります皆樣の內で新體詩辭典、川上賢三著俳歌があれば私の前記の書と交換して下さるか相當の代價で讓つて下さい（山梨縣東八代郡一宮村有賀久代）○親愛なる天下の諸姉樣よ、御手紙度々頂戴いたしましてありがとうあります妾れ三月迄は京都に居たの然し今度東京へ來ましたのですが知己もないのですから綺葉書、玉章、肉筆綺葉書、和歌、俳句の交換を御願します其れから故村田學伴著花一時御持の方は妾の小說類、文學的書物と交換下さいませんか男子の方は御免（東京市芝區三田四國町博信館內照野信子）○岩手縣の高橋ちか子樣四拾年の女學世界御送り致しましたが御返事がございませんのでわかりませんからどうぞ御返事下さいな（香川縣多度津町東濱香川政子）○私の手元に雪中梅、少女の操、天打つ浪、幻影、極樂村、水彩畫法、都々逸一千題、新俳句、明治一萬句、明治俳句、新俳句集、秋の日、女學世界、新小說、詩人、中學文壇、家庭辭書、詠歌自在、新潮、美文資料、美文集、小說著作法、帝國作文全書、作詩自在、文章世界 短文集、百字文集、義經勲功記等差上げ升から天地有情、己が罪全部、吾輩は猫で有る、伯爵夫人、青春、不如歸、漢和大辭林、數學辭書、辭林、理化辭典、魔風戀風、新不如歸、油繪一班、藤村詩集、水彩畫手本、兒雷也、八犬傳、女子文壇 秀才文壇、歸雁の齒、算術小數科書等と交換して下さいな其他にも千草の錦、書海、面白叢談、金色夜叉、露子夫人等有升す（廣島縣高田郡甲立村深瀬箕問よし子）○婦人世界、女學世界、少女繪ばなし、何程古くともよろし御送り下さる方は、本年四五月間本縣に開催したる奧羽六縣共進會紀念繪ハガキ、川俣名所繪ハガキ及び圖畫を以て必ず御禮いたします（福島縣伊達郡福田村羽田八然代子）○私の手元に女學世界、婦人世界、女子文壇其外不用の本が澤山ありますから裁縫の裁圖及びひな形や編物造花なぞ御送り下さらば御望みにまかせて差上ます（茨城縣東茨城郡下大野村飛田梅壽）○誌友の諸姉樣方江見水蔭著花や、二人女王、戀と戀、新夫人其外面白き小說御持ちの御方は黑雲、ちから草、山櫻、萬年姬、罪のゆくえ、等と御交換を願ひ上ます（肥後玉名郡伊倉町前田えち子）○誌友の諸孃樣方よ只今妾の手許に不如歸、戀か夢か、伊國情史、嵐嶽奇談、ハイカラ令孃、ホトトギスの歌、思出の記、戀と戀、枕草紙、戀學生等何れも不用になつて居りますから讀古しの雜誌又は繪葉書でお申越し下さい屹度御送り申しますわ（茨城縣稻敷郡君原村字塙荒地場臨月張濟子）○私の許に女學世界五卷十六號六卷一號十一號七卷一號七號九號十號十五號八卷三號五號、文章世界一卷一號以上持つてますから皆樣の中で作文の本、新體詩、和歌等の本御持ちの方は御交換下さいませ（福島縣石城郡平二丁目石川繁子）○愛讀の皆樣妾は今淋びしき生活して居りますのてすから何卒交際して頂戴なそして皆樣の中に紅葉全集か歸雁の齒又は婦人のかゞみ。食道樂。日本家庭百科事彙等いづれにてもよろしいですが私のヴアイオリンと御交換して下さい（下野國下都賀郡寺尾村字尻內福富清子）○諸孃のおうちで、坂正臣先生か小野先生の書き方の書物なおもちの方はお送り下さいませ。お禮は當地方繪端書で（京都府下伏見町京町六廣江正枝）○誌友の皆樣玉むし、お持ちの方は御惠み下さいお禮には黃菊白菊、英語獨習、新小說、文藝倶樂部、手製の造花、編物等お好みのを差上ます又妾は音樂大好てす古くても宜しいのよヴアイオリンお持ちの方はハーモニカと交換して下さいませんか（下谷區仲御徒士町三ノ七十青山方春枝）○私の許に「にせ紫」「吉丁字」「己が罪」「横戀慕」「舊山河」「鉛筆畫法」「四星霜」「新詩文範」「日本文學全書數册」及び女子文壇等不用になつて居ますから皆樣の中に、「青春夏之卷」「新約物語」「舊約物語」「花物語」「病間錄」「肉彈」「わが袖の記」「つき影」「虞美人草」「ハムレット」「樗牛全集」等御持の方は寫眞か、細したり添へて御交換を願ひます、又エハガキの交換も。（秋田縣仙

北郡藤木村藤木川越守子）〇不束ながら廣く天下の諸孃と多趣味なる御交際を熱望致しますお懐しい玉章や繪葉書を今日か明日かとばかり憧憬れて居りますから何分宜しく（横濱市北仲通三丁目五〇服部花子）〇手許に小說良人の自白上中下、不如歸、血の涙、小說美文玉むし、讃美歌、鉛筆畫法、外に女子文壇、女學世界、ムラサキ、等二十冊程有りますから、魔風戀風、金色夜叉　乳姉妹、筆子、夏子、濱子、と御交換下さいませんか。（小樽區稻穗町大黑座通り岩旅館方宮村榮子）〇女子文壇、ムラサキ其他の雜誌が不用てありますから御入用の方は一錢切手御送附になれば手許にあるだけどなたにても差上ます（赤坂表町三ノ六横井千志）〇妾にハガキ文壇、秀才文壇、女子文壇、少女世界等の雜誌及び數學遊戲、算術遊戲　其他色々不用になつて居る書籍が御座いますから、　皆樣の不用な書籍と交換が致したう御座います。　又相當の郵券御送りになつても（定價の半分）宜ろしう御座います。　玉章交換も願ひます。（大阪市東區瓦町二博進社内田宮薰）〇妾は家事の都合で女學校を退くことなりましたの、皆さん會話辭典、不如歸、　いひなづけ、自然と人生、黃菊白菊、緣陰閑話、ＡＢＣ組合、靑蘆集、さくら貝、短文軌範　懺悔、野外植物、草枕、金色王、息子ハムレット、ヴエニスの商人、ロビンソンの無人島日記、三人姬、神田氏英文典、源平盛衰記、　假名遣辭典、作文辭典、理科辭典、呪はれたる女、情的大革命等の書籍がありますから寫眞封入申込みの方に一冊づゝ差上ます、早速申越を願ひます　（千葉縣夷隅郡大多喜町船子押日屋新井くに子）〇皆樣の内多情多恨、黑湖、色懺悔、青春、破戒等御持ちの方が御座いませば私の新夫人、さゝ舟、其他　新小說、文藝俱樂部、女學世界、秀才文壇、中學世界等弐冊以上五冊づゝと御とりかへ下さい（神奈川縣鎌倉町長谷柴崎方糸子）〇親愛なる諸孃樣花宮、花がたみ、行く春、行く雲、ハイ子の詩、金色夜叉、千山萬水、二十五絃、殘月、亂髮、青春、若菜集、紫紅集、以上の書籍御不用の方は下記の書籍と御交換して下さい、大絃小絃、深山櫻、守人、戀衣、紅葉全集、舞扇、海底軍艦、美文作法、白玉姬、心中、の内御望みの本に信濃名所繪葉書を添へて御禮致します尙は文章や編物や造花、及び名物の御交換も願ひます（長野縣北安曇郡北城村横川露枝）〇諸孃樣のうちに千鳥の曲、春の曲、陸奥の花、殘夢、ローレライの曲等を御持の方は（略譜にても宜し）是非御惠下さいませんか御禮に妾の女子文壇、ハガキ文學、秀才文壇、其他の雜誌百冊許りありますから御望のを幾冊でも差し上げます（小田原幸二丁目石井方君代）〇不如歸紅葉全集第六卷。盛衰記。樗牛全集二卷以下。東洋歷史。一葉全集。の中何にてもよろし社會主義神髓。普通看病法。處女衛生。英國の婦人。文學批評論及西洋名家傳（早稻田講義錄）と交換を乞ふ（大和高市郡晩成校熊野靜榮）〇思出の記、自然と人生、紅葉全集（何の卷でも）、多情多恨、金色夜叉　己が罪、男女學生健康法、俳句作法等御持ちの御方は私の言海、新撰女流文範、明治女子書簡文、子規書簡集、日記文作法、肺の衛生、栗山先生の面影、脚本金色夜叉等と御かへ下さい（香川縣大川郡樋水村細矢久造方まさ子）〇皆樣の中に殺戮と編物、月に立影、愛の犠牲、結婚難、伯爵夫人、嫁がふち、天うつ浪、富美子夫人、はつ姿の中どれても御送りの御方には私の想夫憐、二筋道、不如歸、妾の懺悔、乳姉妹まだ他にいろ〱ありますから御禮に差上げます（千葉縣葛飾郡丹橋町九日市川島市太郎内初子）〇皆樣の許に源氏物語、魔風戀風、樗牛全集、アラビヤンナイト、枕の草紙、女學世界の本年一月以降三日迄、青春全部、　女子習字本の類御不用のものあらばお寫眞と共に送つて下さい、妾の金色夜叉全部、多情多恨、心の涙、草枕、ハイ子の詩、紅葉全集、及び馬琴全集、　高等女子文のかきぶり等御望のものに手製栞編物へ寫眞を添へて送ります又交換書目御通知下さらば妾より送付してもよろしい（大阪市中之島七丁目二番地尾上直二郎方秋野俊子）〇誌友の皆樣の内て婦人世界一卷一號から五號まで御持ちの方は私の女子文壇、女學世界、むらさき、女鑑など、交換して下さいませんか（南總鶴枝村下なかよし安藤みつ子）

寫眞編物交換

〇ひじつき、しをり、寫眞掛、造花、りぼん、寫眞を御惠みの方へは屹度御禮を致します（秋田縣平鹿郡横手町柳町　三梨謙一郎樣方田口むれ子）〇寫し畫、繪葉書、玉章の交換を願ます當方よりは御惠み下さつた品に相當したものを御返禮いたします（靜岡縣安部郡大里村馬淵森本與三郎方潤子）〇諸姉樣妾は病氣て此の地にきて居るものてすが何うか姉樣方の御寫眞や繪葉書を送りくださいませんか必ず妾の寫眞も御送り申ます御玉章て御交際をしてくださいな、皆樣の內て不如歸の歌御不用の御方御ゆづりください（相模山一色玉井方竹澤芳榮子）〇婦人世界、

女子文壇、食物かゞみ澤山ありますから縦とりあるハンカチーフを以て申込んで下さい御のぞみ次第何册でも差上ます（茨城縣眞壁郡新治村舘野町子）○誌上の皆樣よ妾に編物、造花、寫眞掛、等然んで下さい送つて下すつた方には相當の御禮は必ず致します（茨城郡新治郡東村西根中兵方中村清子）○私は今年十八歳の無學なものですが諸姉樣方何とぞ御手紙下さいきつと御禮します又寫眞も頂戴其變り私しのをもきつと差上ます（大阪市東區島町一丁目廿一番地神保華慶樣方宮本清子）○私は不束な田舍娘ですがどうぞおつきあひして下さい。寫眞や玉章や繪葉書や編物などを交換して下さい。金澤市野田寺町四丁目粟野利吉方高村安江）○親愛なる皆さん何卒繪はがき玉章の御交換を願ひます亦寫眞を送つて下された御方には妾しの見にくい寫し繪に宇都宮の繪はがきを添えて御送りいたします（栃木縣河内郡姿川村下掛字質御よし子）○妾は此の度引佐郡鹿玉村へ轉居いたしましたから皆さん相變らず小說やあみもの繪はがき寫眞等の交換して下さいそして皆さんの地方の新聞雑誌等も送りて下されば妾も静岡民友新聞や俳句雑誌天龍川お送り申します（静岡縣伊藤靜枝子）○皆樣寫し畫及繪葉書が澤山に御送り下され有りがとう今迄に寫し畫を三十二枚お送り下さいました紀念として五十枚に致し度御坐いますから御情ある御姉上樣方は何卒御送り下さいまし文藝倶樂部か婦人世界若くは當町名所繪葉書へ見苦しき妾の寫し畫を添へて返禮といたしまする妾必ず僞は言ひません（静岡縣小笠郡掛川町ステーション通り内田屋旅館内杉山富佐子）○スタンプ付繪はがき及び今年の四月寫した寫眞三組あります故、繪はがき、寫眞、栞、おし花等てお申込下さい（信濃下高井郡往郷村戻苅木まさ）○諸嬢よ妾は濃尾の平野に住むいやしいものですが此の四月から本誌愛讀者になりましたから以後玉章や編物の交換を願ひます（愛知縣丹羽郡扶桑村大字サイト今枝須磨子）○誌友の姉樣方何卒寫眞や手編物の御交換をれがひ申します、（日州廣瀨にてみどり子）○貴嬢等よ御手製の栞、肱炎や絹ハンカチーフ、寫眞等御送り下さいな私も名所繪葉書やスタンプ押しの鐵道開業紀念繪葉書等又雑誌も有ります御交換下さい又御玉章御交換も伏して御願申します（北海道札幌北一西十九廳立寄宿舍柳野蕙子）○御手元に寫眞掛。編物、造花等御持ちの御方は御送り下さいませんか品の若き次第きつと御返禮致しますわ又リボンの交換もれ（越後國新發田町下町中村きい子）○皆樣の内で子供洋服の雛形に裁方をそえて御送り下さい御禮としては栞寫眞掛をなほ美しいのを御送り下された方には女子文壇をそへて御返し申ます（茨城縣久慈郡世喜村辰江野澤登玖子）○皆樣よ上等繪はがき數枚以上又は小說編物等の御交換を願ひます先着の姉君樣三名に私の寫眞を送ります（若松市中六日町宮原白浪）

諸嬢の交際

○諸姉さま私は今年取つてよはひ十六歳の春をむかへたる者ですが不便と思召して繪葉書や又玉章などておなぐさめ下さる御方は御座いませぬか（京都市西高瀬正面下る吉村方吉村錦子）○何卒繪葉書及び雑誌の交換を永久に願升（神戸市橘通り一丁目三十一番邸小國茂登子）○諸姉上樣此後は永久的に玉章やエハガキの交換をお願いたします（神戸市橘通五丁目百十一吉田八十女）○玉章繪葉書及び寫眞の御交際を御願ひ致します（神戸市加納町三丁目一九七番屋敷ノ四福岡絹子）○なつかしい〳〵お姉さま方よ私は淋しい所につまらなく暮して居りますごく淺學な者ですが御玉章を御惠み下さいまし（府下瀧野川村七十一番地淺香方みどり子）○誌友の皆樣私は北海道のごく田舍に淋しく暮して居る愚なるものですから何卒不便と思ふて今から親しく御交際を御願ひ致します（北海道夕張郡斜坑ノ上百十六號髙橋てい子）○妾の手許に色々の繪葉書澤山ありますから何卒花、風景、美人繪葉書で申込んで下さい、先着五名に限つて手製の栞と繪葉書て必ず返禮を致します、又諸の本を御持ちの方は私の繪はがきと交換して下さい其他百雑誌が(色々)百册程あります（小樽區柳川町三丁目岩村すみれ子）○私は草深く浪荒き鼓浦村に終日幾多のエンゼルと苦樂を共にするの身てす。願くば以後宜敷。（北海道壽都郡政泊村松木とめ子）○妾も愛讀者のお仲間てすから何卒御見捨なく繪はがきや玉章又は學など御惠送下さいな先着五名の御方には見苦しき妾の寫眞に紀れん繪はがきを添へて御禮致します（膽振國有珠郡伊達村字紋鼈三拾貳番地渡部茂子）○妾は去る二日からヒステリで下名の病院に入院致して居ります諸友諸姉よ繪葉書の交換を願ます先着十名に妾の寫眞一枚宛北海の名果繪葉書一組宛其他二拾名の方には アイヌの寫眞一枚宛さし上ます（北海道室蘭町町立室蘭病院一號室

内杉山淑枝）○ホヱ記者様や皆様色々の交換御願いたしたけれども　随分だれも男子の方が投書だけ女の名前にしてよこすの　が澤山有るの男子より鐵く位なら何も女子文だん　へ願ひませんわそれ故澤山戴いた中でも女子か男子　か見定めて御返事致しましたからもしも女子　の方で御返事の行かない所がありましたら申出て下さい（東京神田區表神保町十りノ七三橋内山本八百）○誌友の皆々様地方名所　繪葉書の交換を願ひます東京名所繪葉書にて必ず返禮致します　（神田宮本町四入澤方長島りき子）○誌上の諸姉様よ私は和歌が大好きです　併し何にやらの横ずきとか誠に下手で困ります御親切　のある御方は和歌の御教授をねがひます　（東京市芝區琴平町二番十四號弘瀬多美野）○皆様御手紙頂戴な私は府立の一年ですのよ　（神田區鎌倉町三中尾いと子）○みな様よ御しやしんなり御玉章をなりと給ひて不幸の姿をなぐさめ給ひてよ姿　とても必らず御情にはそむき候はまじものを　（横濱市石川仲町六丁目一二四渡部昌吉様方春野美津子）○うるはしき繪葉書の交換をして下さい　（下野國足利町三丁目岡部保三郎方中山秀子）○諸姉様方よ只今なれば會津名所拾枚程有ますから是非繪端書の交換して頂戴な…　寫眞交換もれ　（岩代國若松縣前野口秀子）○諸孃よ私當地方の繪葉書澤山持て居りますのよ御望の御方は造花編物美しき繪葉書にて御申込下さい　（岩代喜多方町西町栗木しん子）○なつかしき誌友の諸孃様よ繪葉書寫眞編物などの交換を願ひ　ます先着十名の方には茂原風景寫眞に見惜くき姿　の寫眞を添へて返禮します。（千葉縣長生郡二宮本郷村新町枚田敏子）○諸嬢様今姿の手許に姿の見苦しき寫眞三組と我學校の寫眞二枚と外國美人繪葉書二組有りますから御交換を願ひます　（千葉縣長生郡關村關山中谷高山嘉一方北田琴子）○誌友の姉上様よ愚妹を愛しなされ　て土地の美景繪はがきの交換をねがひます　（栃木縣那須郡境村大字下境小森きつ子）○誌友の皆々様姿も本誌の愛讀者ですよどうぞエハガキ交換　の仲間に入れて頂戴な　（千葉縣匝瑳郡福岡町加瀨つる子）○誌友の諸姉様方永久的に繪はがき　の交際を願ます　（京都新京極錦上ル明田内松島君子）

「文壇の花」口繪に掲載したる山田くに子孃の寫眞は、「誌友おもかげ」中より複寫したるものにて、今回直接同孃より送り越　されたるものにあらず。（記者）

剽窃詩文の注意

▲七號の分　大阪、辻廣子。實用文秀逸「人の妻の死したるを弔ふ」は『中學世界』四卷八號より

▲六號の分　韓國、笠原のぶ子。お伽噺秀逸「黄金の斧」は『少女界』四卷十三號より

▲五號の分　安房、兒松ひやく子。和歌二等「鐘の音」は四十年發行の『新聲』より

▲四號の分　千葉縣、北田信子。お伽噺五等「宵の明星」は『秀才文壇』五卷十二號より

右、何れも剽窃と認む。

○今回注意をたまはりし諸孃は　○岡山、千年○青森、姫百合○弘前、翠坡女○羽前、愛讀女○大阪、生田女○播磨、國頂梨花子



○タイムスタンプによる景品贈呈法　六月一日より日本橋通旅籠町大丸呉服店にては新柄浴衣地賣出し中餘興としてタイムスタンプにより商品切手の景品を提供する由なるが、其の形は上圖の如きものにて、今同店のスタンプにより説明せんに、左の下に千九百八年其上が四月六日、小圖の左肩のAMが午前にして針が其方を指し居るを以て午前なることを示し、左の大圖の針が二時、右の大圖の針が五十五分を指せるを以て、此のスタンプは千九百八年四月六日午前二時五十五分を示すものとす。さて今回同店にて右スタンプを使用し景品を差出す方法といふを聞くに、同店の營業時間午前八時より午後六時迄絶えず進行せるタイムスタンプの時計により其時々の時刻を受取證に押捺し、夫より夕閉場後新聞雑誌通信記者立會の上時間の抽籤をなし、當籤時間前後五分間即ち當籤時間ヵ分前より五分後迄の時間を示せるタイムスタンプある領收證を提出する者に夫々景品として商品切手を進呈するものなりといふ。右の擧行日は一日、五日、六日、七日十三日、十四日、十五日の七日にて景品引換は當日以後二日間とし其後は無効とするとのことなり。

文壇餘興　香（かをり）（課題）

今回は香と云ふ題です、例に依りて聊か題意の説明をいたします

▲香はカチリ又はニホヒ何れの意味も含ませて見て下さい▲諸孃の髮には香油が匂ひ、諸孃の持つて居るハンケチには香水が馨る、衣服には麝香がかをる、けれど香は人間ばかりに必要ではありません▲動物は雌雄を知る爲に香があると云ひます、植物は無論の事、香は花の生命でせう▲偖て諸孃に題を出した以上は『香』の事なら何でもよろしい、例の通り、好きな香、嫌なにほひ、變つた香を好くことや、花の香りて何が好きだとか、食物や飲物の香に就いての事や、男の香や、女の香や、市中の香や、森の中の香や、野の香や、果實の香や、さまべくの香に就いて書いて下さい▲題の文壇餘興香と云ふ字は必ず傍へ書き添えて置くこと▲賞品は一等より五等まで例の通りです

▲しめきりは本月二十日

雜報

○愛國婦人會大會　愛國婦人會第七回總會は前月二十三日青山練兵塲で開催された筈です

○歌劇中止　音樂學校で前々から準備して居た歌劇は何か內實の事情あつて中止された、中止されたことが評判になつてゐる

○新雜誌　此頃又新しい雜誌が起るやうで神田の青年評論社からは『青年評論』本郷の鳳翻社からは『野火』が出た、なほ澁谷のほは會から出る『火柱』は第三號を、同所の自然社から出る『自然』も第三號を發刊した

○若葉の色　世は若葉の天地となつた、爽凉快適、うすもの着る時節も近づく、此れから後は夕暮や夜の心持が好くなります

○上野女學校　小林弘貞氏經營の同校は上野公園の東、根岸に隣れる閑靜の場所に在りて、生徒も質朴、師弟の間も至つて融和して居る

○懸賞規定の改正　投稿諸孃により多く滿足を與へる爲めに懸賞規定を改めることになりました來月號に發表して八月より實行します

懸賞呈品

（甲種）

▲壹等―金拾圓―賞金牌品
▲貳等―金參圓―呉服物
▲參等―金八拾錢―小間物
▲四等―金五拾錢―圖書切符
▲五等―金四拾錢―圖書切符

（乙種）

▲壹等―金五圓―絹張洋傘
▲貳等―金壹圓―帯止半襟
▲參等―金六拾錢―文房具
▲四等―金三拾錢―圖書切符
▲五等―金貳拾錢―圖書切符

▲各種の賞品は發表翌月上旬に贈呈する事

定價

女子文壇　毎月一回一日發行　其外定期増刊（三、五、八、十一月十五日）四回發行　臨時増刊（四月十月）貳回發行（例號二倍）

一冊（百頁定價）	前金拾錢	郵税共計金拾壹錢
九冊（増刊トモ半ケ年分）	前金九拾五錢	同計金壹圓〇五錢
十八冊（増刊トモ一ケ年分）	前金壹圓八拾錢	同計金貳圓
六冊（増刊ナシ半ケ年分）	前金五拾七錢	同計金六拾三錢
十二冊（増刊ナシ一ケ年分）	前金壹圓〇八錢	同計金壹圓貳拾錢

〔備考〕○定期及増刊は各拾錢郵税壹錢　○臨時増刊は貳拾錢郵税貳錢

振替貯金の拂込は登記料貳錢増額

郵便切手代用壹割増、收入印紙謝絕

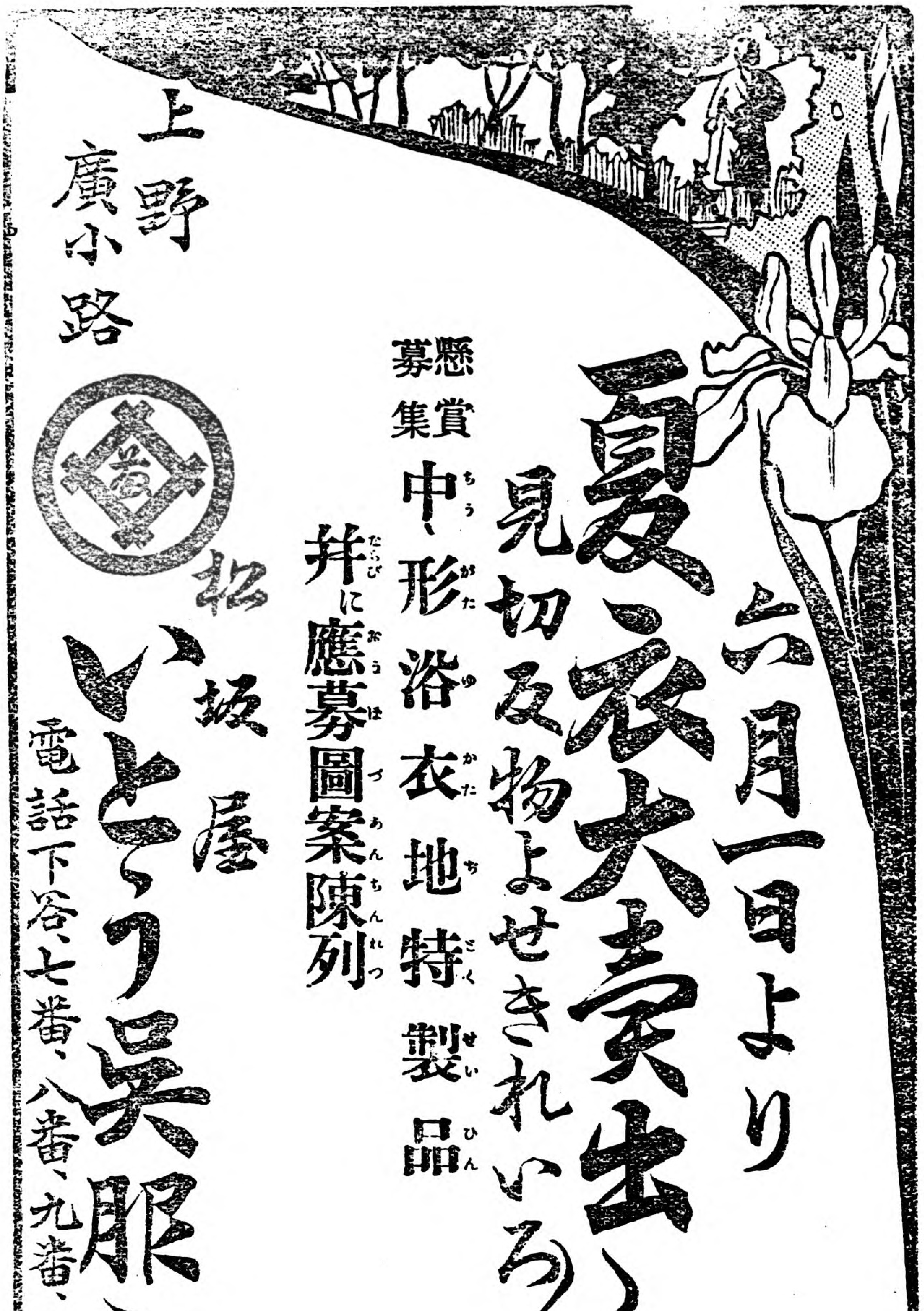
女子文壇社の郵便振替貯金口座は―第壹七貳九番

明治四十一年五月廿九日印刷
明治四十一年六月一日發行

不許轉載

定價金拾錢

編輯兼發行者　東京市京橋區大鋸町十一番地　野口竹次郎
印刷者　東京市京橋區西紺屋町廿六七番地　石川金太郎
印刷所　東京市京橋區西紺屋町廿六七番地　株式會社秀英舍
發行所　東京市京橋區大鋸町十、十一番地　電話〔本局六〇七番〕　女子文壇社
特約賣捌元　○東京堂、東海堂、北隆館、上田屋、至誠堂、良明堂


六月一日より
夏衣大賣出し
見切及物よせきれいろ〱
中形浴衣地特製品
懸賞募集
并に應募圖案陳列
上野廣小路
松坂屋
いとう呉服店
電話下谷七番、八番、九番、十番

【明治三十七年十二月十九日第三種郵便物認可】

女子文壇 無比廉價 金拾錢 郵税貳錢

（東京秀英舍印刷）